
名探偵コナン 『闇に放つ銀の弾丸(シルバー・ブレット)』

真知歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン『闇に放つ銀の弾丸』
シルバー・ブレット

【Nコード】

N6766W

【作者名】

真知歌

【あらすじ】

ある事件をきっかけに黒の組織に迫る。全面協力で立ち向かうコナンに幸福は待っているのか!? 切なさ辛さ嬉しさそして感動のフィナーレ 終

闇へのお誘い（前書き）

こんにちわ！

名探偵コナンの原作をもとに私なりに最終話を書いてみたいと思います。

原作に沿って考えますのでこんがらがらずに、面白く読めると思います。

では気になった方はどうぞー！

闇へのお誘い

都内某所

深夜11時廃業ビルの屋上から公園のベンチに座る標的を狙う二人のスナイパーの姿があった
キャンティ「いくよ！コロン」
掛け声と共に一発の銃弾が夜の華麗な公園を残酷な風景に変えた
コロン「成功、嬉しい」

撃たれたのは大阪府警の刑事

『織田正也（38）』

黒の組織を調べるために潜入捜査をしていて有力な情報を掴んだ矢先に組織に敵だとバレてしまった。

キャンティ「ジン、任務完了だよ」

無線で報告するキャンティ

ジン「ご苦労、身の回りの物を全て片付けておけ」

キャンティ「あいよ！」

そういうと遺体に近づき組織関係の物を全て消した

コロン「俺等の敵、痛い目みる」

一言吐き捨ててジンの元へ戻る二人。

翌日・毛利探偵事務所

学校の支度をして玄関に向かうコナン

コナン「いつてきまーす」

いつもと変わらぬ顔で蘭と小五郎に言う

蘭「いつてらっしやい！気を付けてね」

小五郎「おうっ！」

また蘭と小五郎もいつもと変わらぬ顔でコナンを送り出す

学校に行く途中に元太、光彦、歩美、灰原と合流し5人で学校へ向かう

歩美「コナン君、おはよ！」

笑顔で挨拶をする

コナン「おはよ！歩美ちゃん」

それに対してコナンも笑顔で挨拶をする

闇へのお誘い

朝一番に暗い話をし始める

話を持ちかけたのはコナンを除いた少年探偵団の中で一番頭の切れが良く小学校一年生とは思えない人物

光彦「見ました？今朝のニユース」

いきなりコナンに問う

コナン「ニユース？なんの？」

いつも自分が一番早い情報を持っていて自分だけで行動をしてみようコナンの言葉に一同は驚く

それもそのはず今朝コナンは寝坊をしまい顔を洗い、歯磨きをし、身支度を済ませてパン一枚をさつさと平らげた所要時間が10分弱なのだから

光彦「知らないんですか!？」

驚きながら少しどこか馬鹿にしたような感じで話す光彦の姿にコナンは恥ずかしがりながら悔しそうな顔をしながら返答する

コナン「あ、ああ」

そんな姿をみた灰原は

灰原「どんな内容かしら？」

光彦は灰原に促され淡々と喋り出す

光彦「ええ、今朝のニユースなんですが：昨日の夜中に花畑公園で男性が殺害されたんです。」

灰原「それで？あつてはならないことだけど、良くある話だと思うけど」

光彦「それが：頭を銃で一発撃たれたみたいなんです。その男性、大阪府警の刑事さんみたいなんです。が現場の状況によると仲間割れか何かのトラブルに巻き込まれてたみたいで…」

闇へのお誘い

この話で寝坊をしたコナンの目が一瞬にして覚めた

コナン「お…大阪府警の…刑事!？」

顔色を悪くしたコナンにびっくりして様子を伺う

元太「おい?どうしたんだ?コナン…?」

コナン「あっ、いや…」

すると通学路に位置する家電製品屋からテレビの音が聞こえてきた。…のニュースです。今朝6時頃、東京都〇〇市の花畑公園で何者かに銃で頭部を撃たれた遺体が通行人によって発見されました。被害者は大阪府大阪市に在住の大阪府警の刑事、織田正也さん38歳と判明し警察は、財布や高価な物が盗られていない事から顔見知りの恨みや仲間割れの犯行だとして捜査しています…』

元太「おいなんだよー花畑公園って東京じゃねーかよ」

光彦「ええ」

歩美「大阪府警の刑事さんってゆうから大阪の公園で殺されたのかと思った」

灰原「だからあんなにびっくりしていたのね」

四人が話している間、コナンは一人ポケットから携帯を取り出し10メートル後ろの曲がり角に入ると電話をかけた

プルルルツプルルルツ

《よう!工藤どないした?》

服部のまわりには誰もいないことが容易に想像できた

コナン「服部、ニュースみたか?」

服部「ん?大阪府警の刑事はんが殺されてしもたやつか?」

コナン「ああ…」

服部の話し方と態度で知り合いの刑事ではないことが分かり少し安心した様子だった

服部「なんや？気になることでもあるんか？」

コナン「いや、そうじゃなくてただ顔見知りの刑事かと思って」

服部「はは、俺のことが心配で堪らんよって電話してきたんやな？」

コナンは真面目な顔から呆れた顔に一変した

コナン「バーロ……んなわけねーだろ」

本当は正義感が強く内心は弱い服部を心配していたコナンは凶星を言われ少し照れながら返した

服部「んま、なんか詳しくゆうことわかったら連絡しいや？」

コナン「ああ、んじゃっ」

そう言うとお互い電話を切る

歩美「ねえ、誰と電話してるの？」

真剣に電話をしていたコナンは隣でまっていた少年探偵団に気づかず思わずびっくりする

元太「お前学校に携帯もってっちゃいけねーんだぞ？」

何も言い返せないコナンは二人に苦笑いをしながら流し学校へ向かう
灰原「なにかわかったの？」

コナン「いや、別に？」

灰原は服部に電話したことを解っておりコナンから応答された言葉で知り合いの大阪府警の刑事じゃないことを理解した

闇へのお誘い（後書き）

少年探偵団は子供ならではの冗談や会話をして楽しそうに登校していった…

これが闇からのお誘いということとは知る筈もなく、運命が変わっていくことにも気づかずに…。

闇への訪問（前書き）

コナン達が学校で給食を食べている頃…

別所では刻々と黒の組織に近づいていっていた

闇への訪問

大阪府警察庁

織田を知る者たちは冷静さを他所に悲しみに満ちていた

織田の友人A「正也…！正也…！！」

ダンドンと机を叩く仲間

織田の友人B「なんであいつが殺られなきゃなんなかったんだよ…」
悔しさを露にする仲間たち

この事件は東京で起こったために大阪と東京で合同に捜査することになった

もちろんあつてはならないが、特に他の殺人や仲間割れと比べたら銃を使用している他は何も変わった点はないのに何故警察庁内がざわめき本庁と連携をとるかということとなったのは二時間前の事だった

本庁・警察庁刑事部捜査一課強行犯三係

いつも通りの朝を迎える捜査一課の面々

突然一本の電話が鳴り出した

プルルルプルルルッ

目暮「はい！目暮！」

松本「松本だ今大丈夫か？」

深刻な低い声で電話してきた松本警視正

目暮「か…管理官！どうかされましたか？」

松本「ちよつと皆を連れて来てくれ」

電話を切り目暮は白鳥と高木と佐藤と千葉を連れて松本警視正の待

つ部屋へ行った

闇への訪問

コンコン

ノックをする

目暮「お待たせしました。目暮です！」

松本「入れ」

ソファーに誘導され全員松本警視正と対面になり座る

目暮「管理官、どうされました？」

不思議そうにしている捜査一課の先頭にたち警部が聞く

松本「ああ、今朝の大阪府警刑事の殺害の件なんだが…」

白鳥「何か問題でも？」

一同が真剣な眼差しで松本警視正を見る

松本「被害者の男性は昨夜11時頃に花畑公園で銃殺されて即死した」

「大阪府警、服部本部長と遠山部長の調査中だったそうだ」

高木「調査といますと…？」

松本警視正の言葉で何かを悟った様子だった

松本「ああ…潜入捜査をしていたらしい」「凶悪犯罪グループの仲間に溶け込み情報等を掴みとり悪事を暴き逮捕するために」

目暮「それは日本の犯罪グループですか？」

松本「いや、詳しいことは私も調査の張本人である大阪府警もわかっていない」

「ただ凶悪な組織的グループで皆が全身黒のスーツ等を着ていることから“黒の組織”と呼ばれているらしい」

全員「黒の…組織…」

詳細がわからないせいか日本にもこんな組織があったのにびっくりしているせいかみんな啞然としていた

佐藤「つまり、その刑事が潜入捜査しているということが組織にバレてしまったということですか？」松本「そうだ…服部本部長の話によれば昨夜10時頃に有力な情報を掴んだと電話があったらしい。詳細はまだ確定ではないから確信をもってから報告をするということだったらしい」

全員、切なく悔しい顔をして話続ける松本警視正を真っ直ぐ見て話を聞いていた

闇への訪問

帝丹小からの帰り道

コナンと灰原を先頭に元太、光彦、歩美が横に並んで歩く

元太「腹へったなー」

光彦「さつき給食食べたばかりじゃないですか」

いつもの決まり文句に呆れ果てる一同

歩美「あれ？そういえば今日、仮面ヤイバーゲームの発売日じゃない？」

元太・光彦「あー！ー！ー！ー！ー！ー！」

元太「忘れてたぜ…俺今日学校休んで朝から並ぼうと思ってたのによー」

仮面ヤイバーゲームは世間に凄まじい人気を誇っているため並ばずに購入することはまず困難であった

コナン「そのゲームって決まった店にしかないんだろ？」

光彦「ええ、ここの近くだと三つ先隣の町の駅前にしかないんです」

「前に調べたらそこのお店の開店時間が10時で500個の早い者勝ちらしくて…もうきつとないですよね」

悲しい顔をして元太と歩美に話しかけた

歩美「うん…残念だったね」

しよぼんとする三人を見たコナンと灰原

灰原「あら？行ってみなきゃ分からないんじゃない？」

「今日は平日で大人も子供も仕事や学校があるんだもの、まだ望みはあると思うけど？」

灰原の言葉に三人は少し元気になり

光彦「そっか！そうですよね！」

歩美「哀ちゃんの言う通りだよ」

元太「じゃあ早速いつて見ようぜ」

闇への訪問（後書き）

何も知らない少年探偵団…

また刻々と迫る闇の中へ自ら訪問してしまっている事を…。

真実への扉（前書き）

その頃、大阪府警と本庁の刑事たちは合同で捜査を開始し始めていた

そんな事は知らずに期待を膨らまして三つ先の隣町へ駆け出している少年探偵団達…。

真実への扉

元気になった三人を見てコナンと灰原も嬉しそうに笑う

電車で向かうこと1時間やっと着いた

駅を出て一目散にゲーム屋へ向かう

歩美「コナン君、哀ちゃん早くー」

走って向かう三人を後ろから歩いて追うコナンと灰原の目に意外な人物が映る

灰原「ねえ、」

コナン「あん？」

灰原「あれ高木刑事と千葉刑事じゃない？」

コナン「え？」

まさかこんなところにいる筈がないと言わんばかりの態度で灰原の见ている方向を見る

その先には木の茂みから微かに見える高木刑事と千葉刑事の姿があった

コナン「あれっ？本当だ」

「あんな所でなにしてた？」

コナンと灰原を不思議がらせた高木刑事と千葉刑事は公園で探し物をしていた

興味を持ったコナンは高木刑事と千葉刑事がいる場所まで走り出した
その後を灰原もついていく

高木「なにもないよな」

少し疲れている高木刑事に声をかける

コナン「高木刑事っ！」

その声にびっくりして顔をあげる

高木「コナン君!？」

「なにしてるんだい？」

コナン「そのゲーム屋さんでゲームを買いに来たんだ！」

「今日発売の仮面ライダーのゲーム」

この言葉を聞いて隣の人物は黙っているわけがなかった

千葉「コナン君も買いにきたのか」

嬉しそうに興味を持ちながら作業を中断して高木刑事とコナンと灰原がいる場所へ近づく

コナン「コナン君もってことはまさか千葉刑事達も買いにきたの？」
「仕事中にゲームを買いにきたんじゃないかと横目で笑いながら冗談で聞く」

高木「いや、違うよ、僕達は列記とした警察官！」

千葉「もちろん現場捜査だよ！」

どや顔で言い放つ二人の刑事

だがその態度には流石、もろともしないで流し疑問を問いかける

コナン「現場捜査って…なにか事件でもあったの？」

それもそのはず今朝のニュースでは大阪府警の刑事という言葉に気をとられ犯行現場の場所や市町村をまともに聞いていなかったのだ

真実への扉

いつも警察と同じくらいの情報力を持つコナンなのにこんな大きな事件を知らないのかと不思議そうに返す

その一言にコナンの思考回路は完璧になった

コナン「まさか、あの犯行現場ってここなの？」

高木「ああ」

ふと横の看板をみると【花畑公園】と記載されており良く見ると奥の方にブルーシートとイエローテープがはってあり更に詳しく追求する

コナン「犯人って解ったの？」

高木「いや、それが…」

隣にいた千葉刑事の方をチラッと見ると物探しに再び専念する様子を確認してからいつも何かと協力してくれていつの間にか事件を解決してくれるコナンに一部始終を語り始めた

高木「殺害された織田正也さんは大阪府警からある組織の中に潜入捜査中だったらしいんだ」

少し顔色が変わるコナンと灰原

コナン「えっ？組織…」

そんなコナンと灰原を他所に淡々と話し続ける

高木「ああ、有力な情報を掴んだとここで組織の連中に警察だとバレてしまって殺害されたらしいんだ」

「マスコミには秘密なんだけどその織田正也さんのいつも持っているカバンが見つからないことからその中に有力な情報となる資料がはいっていてそれをその組織に消されてしまったと推測しているらしいんだ」

高木刑事の話の聞きだんだんと顔色が悪くなっていく二人は共に同

じことを思っていた

高木「それで暗闇だったし組織の人が何かミスをしてこの公園内に何かを忘れていつていないかなと思って探していたんだ」

灰原「その組織の正体は解ってるの？」

微妙に震えながら高木に聞く

高木「いや、まだ大阪府警も本庁も捜査中で詳しいことは何も。ただ組織の特徴は…」

最後の一言にごくりと唾を飲む二人

そんな様子は尻目に淡々と喋り続ける

高木「全身黒のスーツを着ているらしい」

まさかと思っていたコナンと灰原の表情は完全に真っ青になり言葉を失っていた

真実への扉

コナン「おい、灰原…」

灰原「ええ…」

お互い言いたいことは同じで二人とも驚きを隠せずに行った

一方ゲーム屋さんからでてきた元太、光彦、歩美はコナンと灰原がいないことに気づき辺りを探すと50メートル先の木と木の間からコナンと灰原の立っている姿が目に入りその場所へと向かっていた元太「おい！コナン、灰原、なにしてんだよー」

コナンが振り向くと元太、光彦、歩美が後ろにいた

光彦「あれ？高木刑事じゃないですかー」

歩美「こんなところで何してるの？」

コナンはともかく元太達にまで事情を話すとややこしくなりそうと思う高木刑事は話をそらす

高木「いやーちょっと」

この間にもコナンと灰原の頭の中ではどうして大阪府警の刑事が潜入捜査をしていたのか？警察の潜入捜査、つまり大阪府警が既に厄介な情報を持っているかもしれないのにどうして他の大阪府警刑事は無事なのか？まだ確認中なのか？あともう一つ、なぜあの黒の組織がこんなに堂々と警察関係者を殺したのか？という疑問にかられていた

その様子をみた元太、光彦、歩美は問いかける

歩美「コナン君、哀ちゃんどうかしたの？」

その問いかけにようやく我にかえる

コナン「ん？あっいやっ…」

拳動不審なコナン

意外な接点

光彦「灰原さん、大丈夫ですか？」

怯えて震えている灰原に話しかける

灰原「……………」

灰原の体は硬直し顔が真っ青になっていた

その様子をみかねた高木刑事はさすがに疑問に思った

高木「どうかしたかい？」

コナン「ううん、なんでもないよ！」

無理に笑顔を作り灰原を支えて促す

元太「お前、まさか…また何かたくらんでんだろ？」

光彦「その顔は何か事件ですね？」

「高木刑事と千葉刑事もいるし…」

ふとあたりを見回す光彦

光彦「あれ？ここの公園って…」

更に横にある看板を見つけた

光彦「花畑公園…！え？まさかここって今朝のニュースでやってた

…」

元太、歩美もその看板を見る

歩美「えー！？もしかして大阪府警の刑事さんが殺されちゃった公園！？」

元太「おい！どうゆうことだよ！？コナン！」

もはや隠し通すのは無理だと思ったコナンは怯えて言葉も出せない

灰原をチラ見した後には事件の概要を説明した…

灰原（あの子達に話しちゃだめ！話した時点で黒の組織に関わってしまうことになるのよ！？どうしてわからないの！？工藤くん…！
！）

そんな灰原を尻目に淡々と話すこと15分、高木刑事から聞いた事件の概要と黒の組織の存在を話した

意外な接点

元太「その組織ってやつは何なんだ!？」

元太達にはもちろん高木刑事と千葉刑事にも知らせることのできないコナンはそこだけはとぼけて返した

コナン「それは分からねえな」

光彦「じゃあ何であんなに顔が真っ青になっていたんですか？」

痛いところを突かれたコナンを高木刑事が庇う

高木「まあまあまあ、これは警察の仕事なんで…君達は危険だからもう家に帰りなさい」

帰宅を進められ納得できない元太達はしばらく高木刑事と言いつつ
ていた

その隙に30メートルくらい離れた公園内のトイレに移動し電話を
かけ始めた

ピッポッパッ

ブルルルッブルルルッ

《おう、どないした?》

電話相手は大阪に住む色黒の探偵

心なしか少しばかり焦った声をしていた

コナン「いま大丈夫か？」

服部《ああ…大丈夫やで》

このしゃべり方と態度で近くに和葉がいることが容易に想像できた
コナン「今朝のニュースの事んだけど殺害された織田さんは俺達
が追っている黒ずくめの男達と接点があったらしい」

あめ…そのこじなめやん…
服部

と何か別の情報を知っていきそうな服部は2、3秒沈黙のあと語りだ
した

服部《すまんすまん、和葉がやかましゅうてな…》

そういうと本題に入り始めた

意外な接点

服部《今朝のニュース見て大滝はんに電話したんや》

《それでなんや拳動不審やさかいどないしたか問い詰めはったらさつき電話で教えてくれはつてな》

《いまそっちに電話しよか思ってたとこなんや》

コナン「どついう事だ!？」

目を見開いて話を聞き出す

服部《それがその織田正也つちゅう刑事を黒の組織の中に潜入捜査させたんは俺の親父らしいねん》

コナン「それは本当か!？」

更に目を見開いて驚く

服部《ああ、大滝はんの話によると俺の親父と和葉の親父さんとその織田正也つちゅう刑事で手を組んで組織を探ることになったんやて》

《そんで織田正也から俺の親父んとこに有力な情報を掴んだと連絡がきてな、その直後に殺されてしもたらしいんや》

コナン「お前の親父さんは何で組織を知ってたんだ？」

服部《なんや大滝はんの話によると一週間前の工場爆破事件があったやろ?そんでたまたま通りかかった姉ちゃんが全身真っ黒なスーツに身を包んだ怪しい奴らがそのへんうろちよろしてたんをみたんやて》《そんで興味持った姉ちゃんが後ついてたら杯戸港あたりで姿を消してしもつたんやて》コナンはよくそんな怪しい奴らについていったなということとよく奴らがそれに気づかずいられたなということにビックリしていた

服部《その姉ちゃんが警察に事情を話に来たんは爆破事件が夜だったこともあつて事件の次の日の朝や》

《その担当をしたんが大滝はんでの、すぐに親父んとこに相談しにいったらそうゆうことになりはつたんやて》

コナン「そういう事だったのか…」

意味深な言い方で応答する

服部《なんや他になんかあるんか？》

それに疑問をもった服部は問いかける

コナン「いやっな…組織の連中がその織田さんを刑事だと知らなかったのならともかく知っていたら何故他の警察関係者は狙われずに無事だったのかと思ってよ」

服部《なるほどなー既に織田正也が情報を伝えていたかもわからんからな》知らないんとちゃうんか？》

コナン「ああ…」

服部《ほなまた何か分かったら連絡すんで》

コナン「ああ、サンキュー服部…」

意外な接点（後書き）

何かを気がかりにするコナンは電話を切り皆の元へ戻ると先程、灰原の様子が心配で博士に連絡してたため博士がビートルで迎えに来てくれた

意味深な関係（前書き）

少年探偵団はビートルに乗り込み阿笠邸へと帰った

その同時刻頃、別所ではまだ途方にくれているコナンに対し着々と準備が進められていて漆黒の闇がコナンを包み込むのは時間の問題であった

意味深な関係

その頃・黒の組織アジト

薄暗い部屋でパソコンの前にジンが座りその横にウオッカが座り話し込んでいる

ジン「回収した資料はどうだ？」

ウオッカ「へい、それが組織関係のものは特にありませんでしたぜ」
ジン「そうか」

ウオッカ「ところで兄貴、例の織田正也の件なんですけど…」

ジン「なにか問題でもあったか？」

ウオッカ「問題というか…回りの察どもは処分しなくてもいいんですかい？」

ジン「その必要はない」

既に警察が密かに動き出していることを組織は知っていた

それを心配してあの時織田正也だけじゃなく組織に関わっていた人間を全て片付けておけばよかったんじゃないか、また今からでも遅くはないんじゃないかと言わんばかりの言い方でジンに問い詰める
ウオッカ「で、でも兄貴…」

ジン「あの方の命令だ」

この一言で何も言えなくなるウオッカ
数分間沈黙が続く

このやり取りを部屋の外の廊下で聞いていたベルモットは切なそうな悲しい表情をしたあと不適な笑みを溢した

大阪府警

服部平蔵の部屋にいる遠山銀司郎と大滝悟郎は例の事件と黒の組織

のことを話していた

遠山「ここ何件か起きていた事故や事件は黒の組織絡みとみていいんやな？」

未解決の捜査資料を見ながら問いかける

服部「ああそうや」

ここ一週間くらい調べ続けていた服部は自信満々に応える

服部「殺害方法や被害者の人物像など全てが一致する」

遠山「わかった」

一通り話し合いが終り間を見計らって大滝が二人の間を割るように入っている

大滝「平ちゃんに言っとききました」

服部「そうか…悪いな」

大滝「いえ…」

淀んだ空気が流れた

意味深な関係

遠山「大変なことにならないいんやけど」

そう言うのと遠山と大滝は部屋を出る

服部「手筈通りに宜しゅう頼むわ」

遠山と大滝の背中を見ながら言った

横目で服部を見、無言で立ち去る遠山に対し

大滝「また何かあったら電話します」

と言い放つ、その通り今朝服部平次から電話をもらい問い詰められ

一旦電話を切り服部平蔵に助けを求めたのは言うまでもない

しかしいつもなら無駄に正義感が強く熱く事件が起こると探偵気取りで何にでも首を突っ込む息子を守るべく、適当に誤魔化すのだが今回はそうではなくありのままの真実を息子へ報告をするように大滝に指示したのだ

そんな父親にはとてつもない思い入れがあったのだ

阿笠邸

阿笠邸に到着した少年探偵団。もう暗くなってきたことだし夕食をたべたら家にかえるように促した博士、だが
歩美「だめ！今日はみんなで作戦会議をするの」

車の中で今朝の事件の概要と黒の組織が関わっていることを聞いた

博士は

博士「しかし…親御さんが心配するのでは」

光彦「じゃあ今日は博士の家に泊まります！」

明日は学校が休みだったために更に盛り上がる三人

元太「さんせーい！！博士がとうちゃんに電話してくれれば心配しなくてすむだろ？」

博士「そ、それはそうじゃが…」

コナンからもっと詳しく組織の事を聞きたかった博士とコナンにどうゆうつもりなのか問い詰めたかった灰原は顔を曇らせたがこんな盛り上がっている三人にもはや反対はできなく博士は三人の親御さんに今日は泊まると電話をかけて灰原とともに夕食の準備にとりかかる

余裕の笑み

灰原「ほら、できたわよ」

夕食のカレーを運んでみんなを席につかせるように促す

みんなのカレーを運びおわった灰原は

灰原「ちよつといいかしら？」

怒ったような呆れた顔をしてコナンを地下室の入り口付近まで呼び出し連れていく

何もわからないどころかあの行動に対して全く気にとめていなそうな顔をしているコナンに既に元気を取り戻した厳しい濁りが飛び交う

灰原「あなた一体どうゆうつもり？」

コナン「なにが？」

全然わかっていないコナンに更に怒る

灰原「あの子達に組織のことを話した時点で深く関わりあってしまった事になるのよ！？」

コナン「ああ、別に大丈夫だよ」

逆に馬鹿にされたようなのんきな態度をとられて灰原の怒りは頂点に達した

灰原「あなたあの子達を巻き込むつもり！？どうしてそんなに組織に対して危機感がないの！？あなたと私だけの問題じゃなくなってしまったのよ！？」

凄まじい剣幕で怒鳴られたコナンはびっくりしたがちゃんと説明することにした

コナン「巻き込んでるつもりはねーぜ？」

「俺もできれば巻き込みたくはないし」

灰原「今更なにゆってるの？」

呆れ返る灰原の態度を見てコナンはいつもの余裕の笑みをみせはじめた

満面の笑み

コナン「ただでさえ事件となれば力になりたがるあいつらのことだ」
「組織という言葉と俺達の尋常じゃない態度をみて黙っているわけがない」

訳がわからず更に問い詰める

灰原「だからって…」

横に割り込むようにして話を続ける

コナン「俺等が下手に誤魔化して興味を持つあいつらが変に足を突っ込みでもしたら元もこうもない」

「だったらちゃんと説明してあいつらなりの意見を聞いて危険なことには踏み入れさせずにちゃんと保護下に置いとけばいい話だろ？」

灰原「あのねえ、そんな簡単な話じゃ…」

呆れるような言い方で意見する灰原の言葉をまた横から割り込むように

コナン「大丈夫、なんかあったら俺があいつらを守ってやつから」

灰原「あなた、彼女を守り私にも守ってやると言い更にあの子達も守るって…一体何人守るつもりなのよ」

横目で睨みながらどこか不満そうな灰原

コナン「そうだな、まあいくらでも守ってやるよ」

「心配すんな！絶対に死なせやしねーよ」

灰原「あなた自分の体がもたないわよ」

コナン「大丈夫だよ！俺は不死身だからよ」

と言いながら皆の元へ戻るコナン

自信たっぷりの満面の笑みでいつもと同様自分のことより人の事を考えて発言した一言に灰原は何も言い返せずにただたち尽くしていた

灰原（工藤くん、いくら不死身でも人間の世界には限界というもの

が存在するのよ？
(

満面の笑み（後書き）

この交えたコナンの発言と灰原の思いが後に多大な苦痛となることは灰原にさえ予想することができなかつた

不安な想い（前書き）

時間はコナンに考える暇を与えず
恐ろしい程早く進んでいく

不安な想い

次の日・毛利探偵事務所

今日も学校が休みのコナンは昼下がりの一時をソファーに寝っ転がり満喫していた

蘭「コナン君、私出掛けちゃうけど一人で大丈夫？」

玄関の前でコナンに話しかける

コナン「うん大丈夫だよ！いつてらっしやい」

（たくつ、小学生じゃあるまいし）

と小学生の姿で思いながらコナンは連日園子と学校の出し物について話し合っていることを知っているため今日もその打ち合わせだろうと思ひ、出掛けることに特に気をとめていなかった

先程まで事件と組織のことを考えていたコナンは疲れているせいか眠りについた

米花デパート駐車場

薄暗く人気のない駐車場にぼつりと誰かをまっけている蘭がいた

蘭「ここでいいんだよね…？」

不審に思いながら待つ蘭が今ここにいるのは昨日の出来事だった

小五郎はパチンコについてコナンは阿笠博士の家において誰もいない毛利探偵事務所に突然電話がかかってきて蘭がでると、声をかえていきなり『工藤新一』を監禁したということだった工藤新一を助けたければ誰にも言わず明日の14時に米花デパートの駐車場へ来いという脅迫電話がかかってきていたのだ

危険な想い

不安で堪らない蘭の背後から一人の女性が近づいてきた

その気配に気づいて振り向く

蘭「あなたですか？電話してきたの…」

女は不適な笑みを浮かべている

蘭「新一、新一はどこですか？」

怪しい笑みにこの人が電話してきた張本人だと理解した蘭はあわてふためく様子で尋ねた

女「はい、これ」

そう言うと女は一枚の封筒を差し出す

蘭はその中身を開けて中の紙を広げるとその内容は招待状だった

蘭「15日、土曜日の朝9時ナイトバロンパーティーに特別に招待する。杯戸港を出発する豪華客船にのり思う存分に楽しめ」

「友人、家族、親戚だれを連れてきても構わないが皆黒の服に身を包んでくること」

蘭が読み上げる

女「彼、そこにいると思うわ」

蘭「新一が！？だって監禁されているんじゃない」

女「だからそのパーティーに監禁されるのよ」

また不適な笑みを溢す女

蘭は意味がわからず途方にくれている

女「私も詳しいことはよくわからないわ。まあそこに行けば彼に会えるわよ… 少なくとも小学生の彼には…」

蘭は最後の一言が聞こえなく聞き返した

蘭「えっ？」

女は蘭に背中を向けて歩き出す

女「きつと楽しいパーティーになるわ」

そついうと女は姿を消した

暗闇の男爵（ナイトバロン）

その同じころ工藤邸のポストにも怪しい手紙が届いていたそれを阿笠博士が取りコナンに連絡をした
プルルルツプルルルツ

《もしもし？》

眠りについてすぐ電話で起こされたコナンは眠気眼で電話にでる
博士「おう、新一。なにやらポストに差出人不明の工藤新一宛で手紙が届いていたぞ」

コナン《え？》

このタイミングでの怪しい手紙にお互いに嫌な予感を感じていた

コナン《すぐにいく！》

そう言うとコナンは電話を切り阿笠邸へと走っていった

阿笠邸に着くと一目散に手紙を手に取り中を確認する

コナン『15日、土曜日朝9時にナイトバロンパーティーに招待する！？』

手紙を読み上げる

博士「ナ、ナイトバロンというと…」

コナン「ああ、父さんの…」

というコナンは携帯を取り出し父親に電話をかける

プルルルツプルルルツ

電話に出ない、次に母親の有希子に電話をかける

プルルルツプルルルツ

有希子《あら、新ちゃん？》

コナン「母さん、父さんは！？」

凄い剣幕のコナンにびっくりする

有希子《どうしたの？そんな慌てちゃって》

コナン「いいから、近くに父さんいるか！？」

有希子《優作なんか知らないわ！ふん！》コナンはこんな時にまで
喧嘩している夫婦に呆れ果てた
コナン（おいおい…）

不可解な暗闇の男爵（ナイトバロン）

毎度と同じように喧嘩をしている夫婦にコナンは冷静さを取り戻した
コナン「父さんが電話に出ないんだけど、緊急事態なんだ！」

有希子「優作なら最近、私の事ほったらかして仕事に専念してるけど？取り込み中かなんかじゃないかしら？どうかしたの？」

コナン「ああ、俺んちのポストに差出人不明の手紙が入っていて中を見たら工藤新一へナイトバロンパーティーの招待状が入っていたんだ」

有希子「あら！面白そうじゃない？また仮装とかするの？」

コナン「いや、それが全員黒の服に身を包んでくるように記載されていて…」

有希子「あらっそれも楽しそうね！」

子供のようにはしゃぐ母親をみてコナンはもはやあきれかえっていた
コナン「全然楽しそうじゃねーよ俺を小さくした奴等も黒づくめなんだぞ？」

意味が分からなそうにしている有希子にコナンは「昨日起きた事件と黒の組織の関係を全て話した」

話すこと15分

コナン「ということになってて、この招待状を出したのが何かを企んでいる黒づくめの男たちじゃないかと思ってたんだ」

有希子「考えすぎよ」 優作はあれでも一応世界的に有名な推理小説家だから優作のファンとかが真似ることもあるのよー？ねえーそれより新ちゃん、そのパーティー私もいつていいーい？」

コナン「ハハハ」全然俺の話きいてねーだろ？」

有希子「そんなことないわよ！可愛い一人息子の新ちゃんがすっごく心配よ」だから私もついていくの！」

コナン「んまあ、招待状には誰を連れてきてもかまわねえってゆう
しいけど…」

有希子《やったあ〜じゃあ今週の土曜日ね!》

そつゆうと有希子は一方的に電話を切った

コナン「はあ〜」

物凄く疲れたコナンは深くため息をした

降り掛かった悪夢

電話が終わった様子のコナンに質問した
博士「何と言った？」

コナン「あん？ああ考えすぎだよー」

壁の後ろに隠れて話を聞いていた灰原が歩き出しリビングへ向かう
灰原「その手紙、あなたにもきたのね」

突然の声にビツクリした二人は灰原の方を向く

コナン「え？あなたにもってまさか！？」

灰原「ええ、私宛にもきたわ」

そう言うのと封筒を片手にコナンに見せるように出した

あまりの真実に言葉がなくなるコナンは辛うじて質問した

コナン「おま…それ…いつきたん…だ！？」

灰原「さつきよ、博士があなたの家に郵便物を取りにいつている最中にあの組織の嫌な感じがして玄関から外を除いたら誰もいなくて、微かにポストの蓋が動いていることに気づいて外に出てポストを確認したらあなたと同じ手紙が入っていたわ」

「まあ、私の場合はメッセージ付きだったけど」

コナン「メッセージ付き！？」

灰原は封筒から中の紙を取り出しコナンと博士に見せるようにして読み上げる

灰原『シェリーの作った毒薬で小さくなった名探偵はナイトバロンパーティーにて消滅』

この言葉に衝撃を受けたコナンは灰原の元に近寄り手紙を奪い悔しがり強く握りしめた

コナン（くっそ…）

そうこの手紙の内容からするとこれは黒ずくめの男たちの仕業であ

り何を企んでいるのかという疑問に加え工藤新一が江戸川コナンになつた事とシェリーこと灰原哀がここで暮らしていることがバレていることに対して恐れと強い憎しみを感じていた

すると突然阿笠邸のチャイムが鳴った

ピンポン

小さな訪問客

博士が静かに外を確認しようとする

「博士！」

「あれえ？博士も留守なのかな？」

聞き慣れた声だし博士が玄関を開ける

光彦「あつ！いました！」

博士「なんだ、君達か」

安心した博士の横を通り嬉しそうに入ってくる元太、光彦、歩美

元太「あつコナン！お前こんなところにいたのか！」

歩美「さつきコナン君とこころいつたら誰もいなくてまた一人でどっか行っちゃったのかと思っただ」

コナンと灰原の異様な空気に感じた光彦は二人に近寄る

光彦「また何かあつたんですか？」

コナンと灰原は顔を合わせた後にコナンが口を開く

コナン「実は…」

真剣な眼差しで事を話始める

もちろん灰原の手紙に記載されていたメッセージは伏せ、この事件は確実に黒の組織関係で昨日の少年探偵団作戦会議と同様、容易に危険で大変なことになっているということをしっかりと説明した

元太「でもよー何でコナンなんだ？」

詳細を知らない少年探偵団には当たり前前のようにこの疑問符が浮かび上がる

光彦「コナン君が警察関係者だからじゃないですか！？」

「頭のいいコナン君はいくつも事件を解決していますから！」

歩美「そっか！その組織の人達がもしかしたら警察の人達からコナ

ン君が捜査をお願いされていると思ったのかもしれないね？」

光彦「ええ、既に何かしらの情報を掴んでいるだろうと思った黒の組織はコナン君をはじめ警察関係者を呼び集めてその豪華客船を爆破するつもりなんですよ」

まるでゲームのように面白楽しく推理する光彦と歩美

コナンは光彦の満更間違つてもいなそうな推理と歩美の可愛いらしい仮説に向き合う半面、心の中では

コナン（小学生にそんな危険な捜査を依頼する警察なんて世界中どこを探しても見つからねーよ）

と突っ込みを入れていた

コナン「そ、そうかもね？アハハハッ」

光彦と歩美もコナンを見て微笑むのに対し元太は何処か悔しそうに元太「お前、調子にのってんじゃねーぞ？」

とふて腐れた感じでコナンに言った

コナン（おいおい、マジかよ）

とこれから先が少し不安になるコナンであった

小さな訪問客（後書き）

それから特に何も起こらずに数日が過ぎ、ナイトバロンパーティー
前日の夜となった

時刻は19:30

場所は毛利家自宅

迫りくる漆黒の時（前書き）

特にいつもと変わらぬ夜だったのだが…

この人の衝撃の告白で空気がかわった
そしてコナンの運命も…

迫りくる漆黒の時

コナンと蘭と小五郎は蘭の作った夕食を美味しくたべていた

小五郎「おい、コナン！野菜も食べるよ？」

コナン「たべてるよー」

食べる手がとまり何か悩んでいそうな顔をしている蘭にコナンは疑問を抱く

コナン「蘭ねーちゃんどうしたの？」

招待されたパーティーの日時が明日に迫り不安の色を隠せない様子の蘭

蘭「う、うん…」

小五郎「なんだ？言いたいことがあるならはつきり言え」

この言葉に後押しされ蘭が口を開く

蘭「コナン君とお父さん…」

小五郎とコナンが蘭の方を向く

蘭「明日、私に付き合ってくれない？」

何かありそうないつもとは違う蘭の言い方に戸惑ったが

コナン「あつ明日僕、ちょっと用事が…」

黒づくめの男たちを捕まえるチャンスだと思ひ断ろうとすると

蘭「新一が…」

自分の名前を言う蘭に気をとられ中途半端に途切れた

下を向き悲しい表情で話す蘭

蘭「新一が…監禁されちゃうかもしれないの」

コナン「え…？」

意味が分からず戸惑う

蘭「昨日、女の人に呼び出されて米花デパートの駐車場にいったら手紙を渡されて…」

コナン「えっ!?!」

驚くコナンを後に蘭は引き出しから例の封筒を取り出す

蘭「これ…」

小五郎「なにになに?」

手紙を読もうとする小五郎、コナンは自分宛にきた招待状と同じ物ではないことを祈る

小五郎「15日、土曜日朝9時にナイトバロンパーティーに特別に招待する!?!」

コナンは一瞬にして凍りついた

灰原はともかく蘭のところに来ていたなんて恐ろしいと言う他なにもなかった

蘭「その女の人が新一がこの豪華客船で監禁されるってゆってたの小五郎「どうゆうことだ?」

蘭「よく分からないけど…新一に電話してもでないし本当に何かあったのかも…」

小五郎「警察に電話して…」

蘭「だめ!?!」

「警察に電話したら新一が殺されちゃうかもしれない」

蘭はこの一週間悩み続けてきたのだ

愛する人の安否確認ができず誰にも相談ができず助けを求める事もできずに

愛するものの辛さ

パーティーには誰を誘ってもいいということと“ナイトバロンパーティー”を調べたらどうやら毎年やっているパーティーで一般人が普通に出掛けることのできるイベントということから園子と和葉を誘ったものとうとう前日に限界がきて小五郎とコナンに打ち明けたのだ

それを聞いたコナンは驚きを隠せなかったが冷静を装い蘭をなだめるように

コナン「蘭ねーちゃん、大丈夫だよ！」

「新一兄ちゃんはその弱くないよ？」

蘭「うん…分かってるけど」

泣きそうな蘭

コナン「僕も一緒に行くから安心してよ！」

蘭「本当に！？ありがとう…！」

少し元気を取り戻す

小五郎「なんだよ、小学1年生のガキも一緒じゃあ余計にこの俺が心配だつづつの」

「よし！探偵坊主には色々世話になってるからな…俺もついてっ
てやるぞ」

蘭「お父さん…ありがとう！」

コナン（おっちゃん…、サンキュー）

照れ隠しでご飯を一口气食いして喉につまらせ水をがぶのみしてむせる小五郎をみてコナンと蘭は笑っていた

ただコナンの心の内では蘭に迫った女がベルモットだということが予想され蘭を巻き込んでまで一体何をするつもりなのかと怒り、この一週間事件と黒の組織のことを考え続けていたために蘭への連絡

が疎かになっていたことから蘭がこんなに心配してくれていたことに感謝と反省の態度をみせた

愛されるものの傳さ

夕食の後片付けが終った蘭はお風呂に入ろうと自分の部屋に着替えをとりに行く

プルルルツプルルルツ

突然鳴り出した携帯

着信画面をみると“新一”という文字がでていた蘭はすかさず通話ボタンを押す

蘭「もしもし！？新一！？」

新一《よお！蘭》

蘭「よお！蘭じゃないわよ…」

「心配：心配したんだから！！」

そう言いながら泣きだす

新一《わりいわりい、さつきコナンから事情は聞いたよ》

蘭「コナン君から？」

新一《ああ、心配してくれてたみてーだな》

蘭「そうよ！何よ…？悪い！？」

素直じゃない蘭は開き直ったかの態度で新一にはむかう

新一《でもまあ、もう大丈夫そうだな！》

《その招待状のことなんだけど俺のここにも届いたぜ》

《だからただのイタズラだから気にすんな》

蘭「え？そうなの…？」

新一《ナイトバロンパーティーってのは毎年恒例の豪華イベントらしいじゃねーか》

《ただでそんなとこいけんだ、もっと喜べよ？》

と博士から調べて教えてもらった情報をもとに話をすすめる

蘭「うん…新一は？新一も行くよね？」

新一《あゝ、俺か？俺は…》

毛利探偵事務所前の歩道

コナン「俺は事件が片付いて行けたら行くよ！」

携帯を片手に蝶ネクタイ型変声期で新一の声に変えて蘭と話す

蘭

寂しそうな蘭の声に精一杯元気づけようとする

コナン「んまあ何かあったらまたいつでも電話してこいよ！出れね

ー時もあつけど絶対かけ直すからよ！」

蘭《うん、ありがと》

コナン「んじゃまた」

蘭《うん、またね》

互いに電話を切ると蘭は安心した様子でお風呂場へ行き、コナンは蘭のいる毛利家自宅へと戻った

愛されるものの傳さ(後書き)

“絶対かけ直すから”

さらっとゆった強く重い言葉は不運にもこれから起こる災難であっ
けなくかき消されてしまうとは今の二人には知るよしもなく着実に
その時が迫ってきてるのであった…
漆黒の暗闇の男爵が…
ナイトハロン

前触れ

その頃・ある暗闇の一室

夜にも関わらず電気をつけずにパソコンのライトだけに照らされ電
話をする男がいた

男「ああ、明日の準備はどうだ？」

「そうか、手筈通りに頼む」

電話の相手と話している様子が伺えた

「その件は問題ないだろう」

「ああ、では明光を祈って…」

というとき男は電話を切り微笑んだ

ナイトバロンパーティー当日

毛利宅に園子と和葉が訪れた。既に支度済みのコナンと小五郎は昨
晩借りていたレンタカーに皆を乗せて一旦阿笠邸へと向かう

阿笠邸の前まで来るとビートルに乗り込もうとしている博士をはじ
め元太、光彦、歩美、灰原がいた

一週間ほどまえに手紙の件をコナンは電話で服部に話していた

それを聞いた服部は『よっしゃ！俺もいったる！』と張り切っていた
そんな服部からメールが届いた

ピピピ

コナン（ん？服部だ）

携帯を開いてメールを確認するコナン

『工藤へ、俺はもうすぐ着きそうやで〜ほな、はよう来いよ〜！服
部』

コナン（はやすぎだろ？まだ集合時間まで一時間もあらず？）

と張り切りすぎる服部に呆れ返るコナンは博士の車に移動して博士
と少年探偵団とともに杯戸港へ向かった

警告

昨晚蘭から事情を聞いたあと阿笠邸へと電話を入れ灰原が受け取り事を説明した

灰原も蘭の元へ手紙が、それも直接きたことに驚き戸惑っていた灰原に明日の予定を話し博士に伝えとくようにと促し電話を切ったあとに

小五郎と蘭に博士達もついてきてくれることになったというように話し今日ここでこうして落ち合うことになったのだ

灰原「彼女のそばにいないくていいの？」

ビートルに乗り込んだコナンに問う

コナン「ああ、少なくとも向こうに着くまでは安全だよ」

はしゃぐ三人から浮くように二人で小声で話す

光彦「あ！またコナン君と灰原さんコソコソしてますうー」

元太「おい！せっかく豪華客船に乗れるんだからもっと楽しくはしやごうぜ」

と明らかに目的を忘れているような三人は考えすぎて“楽”という言葉が見えないほど悩んでいる様子の二人に振った

コナン「おいおい！今日は遊びじゃねんだぞ？」

歩美「でもナイトバロンパーティーって毎年恒例でやってる豪華客船パーティーなんでしょ？綺麗なお姉さんとか宝石とかたくさんいたり飾ってあるんだらうなあ〜！」

そんなものではないことを教えようと

灰原「綺麗なお姉様方に見とれて命を落とさなければいいけど」

純粋な心を持っている子供たちが羨ましくちよつと過激な一言を放つ

コナン「おいおい、お前なに小学生1年生に熱くなってるんだ？」

横目で苦笑いしながら言う

漆黒の入港

光彦「い、命を落とすってどうゆうことですか？」

怯える三人に手を差しのべた

博士「冗談じゃよ、ほれもうすぐ着くからしっかり座っておれ」

コナン（ハハハ）

それから20分後

杯戸港豪華客船前

高さ80メートル近くある巨大で黒光していて所々に金が散りばめられている船の目の前には入船時刻を待つ行列ができていた

和葉「うわ〜めっちゃ豪華やな〜」

園子「本当！うちのパーティーと同じくらいの豪華さね！」

と財閥のお嬢様は言う

こんなに楽しそうなのも当たり前だ

和葉と園子は蘭から豪華客船の招待状が当たったからみんなで行こ

うとしか言われていなかったのだ

そんな中蘭は辺りを見回して新一を探していた

蘭（新一…やっぱりいないよね）

事件が片付いたら行くという言葉に少しでも望みをもっていた蘭は

やはりいつも同様に来ていないという事実に変更して悲しみを実感した

コナン（蘭…）

その様子を伺ったコナンも自分がこんな姿なのをまた悔しく思い豪華客船への行列へ向かう

コナン（待ってるよジン、ウオツカ…）

（ぜってーおめーらの悪事を暴いて“APT-X4869”の解毒剤を手に入れてみせるからな）

今まではこの江戸川コナンの姿でジンやウオツカ、黒の組織を捕まえることは無理に近いと思ってたコナンだったが今となっては蘭を

危険な目に合わせようとしている連中を憎むコナンにそんなことは通用しなかった

漆黒の出航

係員「ナイトバロンパーティーにお越しのみなさまは受付開始いたしましたのでこちらでお願いしまーす」

明るい感じの20代位の女性係員が皆に呼びかける

受付開始とともに長蛇の列はだんだん減りコナン達の番になる

係員「大人5名様に子供5名様ですね」

ノートに皆の名前を記載する小五郎

コナン（あれ？そーいや、服部のやついねーな？）

今頃気付いたコナンは辺りを見回した後にノートを覗き込むが姿も名前もなかった

携帯を取り出し電話をかけるがでなくメールで既に到着し中に入った事を伝えた

受付が終了決められた自分の部屋へと向かう一同

漆黒の出航（後書き）

この入り口を跨いだ瞬間

コナン達の生死は既に確定された

予想外の展開（前書き）

部屋の鍵を受付から受け取った皆は自分の部屋へ入り荷物を整理して豪華な部屋でくつろぎはじめていた

予想外の展開

園子「うわ〜綺麗な眺め」

自分の部屋の窓から海を見渡す

和葉「ほんまやな〜えらい贅沢やで」

蘭「服部君もつれてくればよかったのに〜」

和葉「いーのいーのあんなやつ」

10日程前から服部は全然かまってくれずふてくされている和葉は本当は服部と一緒に来たかったが女のプライドというものがあるために誘えなかった

一方他の部屋は大人は二人まで、高校生は三人まで、子供を含めば五人までと言う決まりだったために、蘭と園子と和葉の他、小五郎と博士と元太と光彦と歩美、後に有希子と服部がくることからコナン、服部、有希子、灰原という部屋割りになった

70

灰原「あなたのお母さんいつくるの？」

コナン「さつきこつちついたって言ってたからそろそろ来ると思っけど」

「そついや、服部のやつなにしてんだ？」

灰原「彼もまだ着かないの？」

コナン「いや、一時間前にもう着いたからはやく来いつてメールがきたんだけどこつちに到着してから電話とメールしても繋がんねんだ」

「つたく！」

と身勝手な服部にきれいているコナンを不安そうに見つめる灰原は彼に限ってそんなことはない、いや彼だからこそ危険とも言える最悪の事態を予想していた

まさか…ね
灰原

一方…

小五郎「なんで俺がガキ三人と一緒に過ごさなきゃいけないんだよ」

博士「仕方なからう、部屋割りがこうなってしまうんだから」

小五郎「うーんお前等ギヤーギヤー騒ぐんじゃねーぞ？」

既にビール片手に子供達を邪魔者扱いしている

元太「俺達は今日、遊びにきたんじゃねーから騒がねーよ」

小五郎「あん？」

光彦「あつ！だめですよ、元太くん…」

歩美「そうだよ、コナン君と約束したでしょ？」

三人供つれていく代わりに他のみんなには内緒にしておけと言われた三人は危うく約束を破ってしまうところだった

悪魔の再会

ピンポンパンポーン

放送が鳴り響いた

『この度はナイトバロンパーティーにお越し頂き誠にありがとうございます。只今より、パーティーに関する説明をいたし、毎年恒例の開会ゲームを行いますので三階のプライベートルームまでお越しください』ピンポンパンポーン
一同は指示された部屋へ向かう
その30メートル後ろには不適な笑みを浮かべる女がいた

ナイトバロン豪華客船内

無線で話すジンがいた

ジン「例のターゲット入船完了」

男《ご苦労、引き続き頼む》

奥から走ってきたウオツカが息を切らして話しかける

ウオツカ「兄貴、大変です」

ジン「どうした？」

ウオツカ「それが……」

といいながら左斜め下の通路に目をやる

ジンもその方向を向くとニヤリと笑い呟く

ジン「シェリー……会いたかったぜ」

その先には皆とプライベートルームに向かう灰原の姿があった

ウオツカ「どうしますか？兄貴」

ジン「様子をみながら放しておけ」

ウオツカ「解りました」

「あと、シエリーの隣にいる眼鏡のガキなんすけど、兄貴がトロピ
カルランドで処分した工藤新一ってガキに似てないっすか？」
ジン「工藤新一？俺は殺った奴の名前と顔は忘れるたちだ」
そう言われたウォツカは変装をして灰原の後をつけた

真つ黒の再会

プライベートルームに到着した一同は辺りを見回した

小五郎「すげえー人の多さだな」

政治家や大手企業の社長をはじめ有名作家や芸術家、芸能人にスポーツ選手らが立ち話をしていた

小五郎「なーんかこれだけ真つ黒だと葬式みてーできこちねーな？」
歩美「あ！あれ女優の池内ゆかりじゃない！？」

【池内ゆかり（25）七歳の頃から天才子役と称されてきて今ではアカデミー賞をとるほどの実力家。映画やドラマをはじめバラエティや歌手活動と幅広い世代に愛されている人物】

光彦「本当です〜！実物もさすが、綺麗ですね〜」

元太「おっばいでつけえな〜！」

と小さい三羽のカラスのような格好ではしゃいでいる三人を不安かつ呆れた眼差しで見つめるコナン

蘭「あれ？あそこにいるの目暮警部じゃない？」

その言葉に驚き蘭の見る方向をみると、黒服に身を包んだ目暮警部、高木刑事、佐藤刑事がいた

小五郎「警部殿ー！」

小五郎が目暮の方に呼び掛けるとそれに気付いた目暮たちがコナンたちの方に近づく

目暮「おお〜毛利君！」

目暮警部と高木刑事と佐藤刑事も驚いていた

小五郎「皆さんお揃いでどうされたんです？」

目暮「それはこっちの台詞だが…」

顔馴染みの皆を引き連れた小五郎を見て思わず呟く

そういうとポケットから二人を除く皆がよく知っている例の封筒を取り出した

灰色の積木が崩れる時…

目暮「この招待状とやらがきてな…」

コナンと灰原、そして博士、小五郎と蘭が驚く

コナン「目暮警部！それどうしたの！？」

慌てて聞く

目暮「一週間ほど前に自宅に届いてな」

「差出人不明の手紙だったから不審に思いこのナイトバロンパーティーとやらを調べてみたんじゃ…」

高木「それで今捜査中の黒づくめの男というのとこの招待状に記載されているナイトバロンすなわち暗闇の男爵というのと黒服での参加に何かあるんじゃないかと思つて捜査しにきたんだ」

喋りすぎた高木刑事を睨む目暮警部と佐藤刑事

その視線に気づき慌てて謝る高木刑事

コナンの頭の中では今までの可能性のある推理が大きな音と共にくずれおち真つ白になっていた

コナン（黒づくめの男たち…どうゆうつもりだ！？）

それを隣で見っていたさすがの灰原も頭の中がこんがらがっており蘭は自分と同じ手紙が目暮警部の元にも来ていたことに疑問と不安が交差していた

そして間もなくして照明が暗くなり幕を閉じているステージに無数のライトが照らされ開会式が始まった

『ようこそナイトバロンパーティー、漆黒の金岸船へ…』

そういうと幕が開きナイトバロンの仮面を被った一人の人物が中央にたっていた

コナン（ナ…ナイトバロン！？）

灰色の積木が崩れる時…（後書き）

目の前に現れた見覚えのあるナイトバロンを見て驚きを隠せずただ
啞然とし言葉を失ったコナン…
その直後に有希子がやっと到着しコナンの元に現れた

闇雲の会話（前書き）

母親、有希子も優作の考えたナイトバロンのあまりの酷似にステイジを見入る

二人は開会式が終わるまで無言で見ていた

その頃……

闇雲の会話

とある船内の一室

狭い一室で外に聞こえるか聞こえないかの声で話す二人の男性がいた

「この企画なかなか面白いよ」

「ありがとうございます」

「まさか我々の中に一般人を招き入れ、別で事を進めているとは…」

「はい、今回は少しばかり招き入れた客に手強い者もいますが、まあ問題はないでしょう」

「灯台もと暗しということだな」

「恐縮です」

このやりとりをまた不適な笑みを浮かべる女が外で聞いていた

この話に夢中になっていた女は背後から来る気配に気づかなかつた
「なにしてる？」

女は驚き振り返るとそこにはジンがいた

ジン「そこでなにをしている、ベルモット」

冷静を装うベルモットはこう言いながら消えて行く

ベルモット「秘密。 A s e c r e t a w o m a n w o m a
n…」

ジンは去り行くベルモットを鋭い眼差しで睨む

男二人が話すその部屋にノックを入れジンもその部屋へとはいつて
いく

三階・プライベートルーム

ナイトバロンパーティーの説明とゲームが終盤を向かえようとして
いる頃、部屋の隅っこには二人の男性がいた

一人の年輩の男性は真面目に話を聞く中でもう一人の若めな男性は長い説明と興味のないゲームにイラつきを感じはじめ片足を揺すりはじめていた

黒の悪魔と白の盗賊

快斗「ったくよくあの気味わりい顔で何分喋りやがんだよ」

寺井「まあまあ坊つちやま、ここにも何か手掛かりがあるかもしれ
ませんし…」

そうここにいたのはあの有名な盗賊、怪盗キッドこと黒羽快斗と助
手の寺井だった

コナン達同様に奇妙な招待状で招かれていたのだ

快斗「俺が捜し求めているものは親父を殺したやつらとパンドラのみ
だ！」

寺井「盗一様を殺したやつらとあの招待状の送り主には少なからず
何か接点があるはずですよ」

想定外の情報に驚く快斗

快斗「本当か!？」

寺井「ええ、黒の格好をしていることと暗闇の男爵ことナイトバロ
ンというのは盗一様がよく口にされておりました」

快斗「仮にこの招待状を出したやつが親父を殺したやつらだとした
ら一体やつらは何のために俺を招き入れたんだ？」

「手紙をだすことはあっても手紙をだされるとは……」
下を向き無我夢中に考える

寺井「誠に恐縮ですが、この寺井にも解りかねます……」
と力をなくしている

その姿を見た快斗はゲームが終わったこともあり部屋へ戻り休息を
しようと促す

そろそろと会場を後にする黒の集団

その集団に紛れ人混みの中からこちらを監視しているウオッカの姿
にコナンは気づかないわけがなかった

コナン（来やがったな…）

何かを一瞬感じとった灰原に対してコナンはもう少しだから頑張っ
て冷静を装えと促した
コナンは灰原を支えながら更に辺りを警戒すると意外な人物が目
飛び入った

黒の戦士

コナン「あれ？あれは…」

普段と違う雰囲気醸し出しているのにも関わらず流石、コナンは一目でその人物が誰だか分かった

コナン「怪盗キッド…!?!」

まさかの人物に思わず声をあげてしまったその言葉に反応した二人の人物がいた

園子「え!?キッド様!?!どこどこどこー!?!」

男「怪盗キッドだと!?!どこだー!?!」

とコナンの前に寄る園子と謎の男

コナンは慌てて撤回した

コナン「あつ!人違いだった…アハハハハッ」

男「なんだよ、おどかしやがって」

「…中森警部!?なにしてるの?」

そのコナンの呼び声とやり取りを30メートル先で横目で呆れた顔で見守る怪盗

快斗(?!?なんだ〜名探偵か…)

(ん?中森警部まで?なんであいつらこんなところなんだ!?俺は予告状なんてだしてねーぞ?)

寺井「坊っちゃん…?」

快斗「ちよつとわりい、先に部屋もどつててくれ」

そういうと怪盗キッドこと黒羽快斗はコナンの近くまで走り寄りこちらを先程から目を離さずに見ている名探偵にジエスチャーでこっちにこいとプライベートルームの裏の物置まで呼び出した

その合図を受け取ったコナンは博士に伝える

コナン「博士ちよつとわりい、みんなを頼む」

博士「あ、ああ…」

コナン「すぐ戻るから!」

と言いつち怪盗キッドに呼ばれたプライベートルームの裏の物置に
向かう

そのやり取りを見ていた灰原は走り行くコナンの後ろ姿を横目で睨
みながら何か言いたそうな顔をして皆と部屋へ戻る

崩れたポーカーフェイス

人目を気にしながら物置へ入る快斗に続いてコナンも警戒しながら入る

快斗「よお〜名探偵！」

の言葉と同時に今までの警戒心漂う快斗とコナンとは違い、いつものおちゃらけで和やかな空気に変わった

コナン「おめえ、こんなとこで何してんだ？」

快斗「ちよつとな〜おめーは？」

「つつかよ、なんで中森警部がいんだ？」

いつも秘密主義のキッドに拗ねる

コナン「このパーティーの招待状をもらったんだってよ」

快斗「しよ…招待状!？」

まさか中森警部も自分と同じ招待状で呼ばれたのではないかと思った

コナン「どうかしたか？」

快斗「誰に貰ったんだ!？」

コナン「差出人は不明だよ」

「んま、俺らもだけどな」

快斗「え？おまえんとこにもあの招待状がきたのか？」

快斗が二代目怪盗キッドをやっているということをかぎつけた父親を殺したやつらが快斗を誘き寄せたのだとばかり思っていた快斗は完全にポーカーフェイスを忘れて驚きを隠せない様子だった

コナン「お前もってことは…まさかおめーもそうなのか!？」

快斗「……………」

コナン「おい!どうなってるんだよ?」

コナンも自身、又は灰原と親しくしている人物だけを誘き寄せようとしていると思っていたためにいくら親交があるとはいえ世間ではキッドとコナンは敵同士と報道されていることから黒ずくめの男たちがキッドを呼び出すということは到底考えにくく、不安が募るば

かり
だつ
た

怪盗になった理由

数分の沈黙の後にコナンが口を開ける

コナン「なあ、キッド……」

快斗「なんだ？」

コナン「可能な範囲で構わねえからお前が怪盗をやってる理由を教えてくださいねえか？」

快斗「……」

数秒の沈黙の後に快斗が語りはじめた

一方部屋へ戻る一同を後ろからつけるウオッカ……

灰原はそれに気づいていた

ウオッカ
灰原

(このままじゃみんなが危ないわ……)

(また……また……)

心の中で叫び続ける灰原の脳裏にはこのままじゃ宮野明美(姉)の二の舞になってしまふと悲痛な思いで想像する蘭がいた

逃げてばかりではいけないという思いから少しずつだけでも蘭と仲良くしようとしている灰原

いまここで、私のせいで本人をはじめ恋人である江戸川コナンこと工藤新一や父親の毛利小五郎、親しくしている少年探偵団の悲しむ顔を想像するとしてもたつてもいられなくなり灰原はその場を走り出した

博士「あ、哀くん？」

歩美「哀ちゃん！？」

和葉「どないしたん！？」

突然走り出した灰原を心配して慌てておいかける博士
そのあとをウオッカもつけていく

エレベーターに乗り込む灰原は“閉まるボタン”を急いで押して五階のボタンを押す

エレベーターの前にきたウォッカは上に点滅するボタンを見て階段でかけあがる

四階で人を乗せ五階についた灰原は部屋へ戻ろうと飛び出す
それと同時にウォッカも息を切らし五階へ到着した瞬間!!!!

九死に一生

女「すみませ〜ん！」

ウオツカは強引に呼びとめられた

女「お腹すいちゃったーんですけど〜売店のあ〜る場所ってわかーりますか〜？」

黒い帽子を深く被り変な日本語で質問する女へ返答せざるを得なくなつた

ウオツカ「一階の突き当たりの通路の左側っす」

女「ありがとうございます〜す！」

そうゆうと女は手を振り去つて行く

ウオツカは無駄な邪魔がはいつたと舌打ちをし灰原の追跡を再会しようとするが既に灰原の姿はなかった

階段の下で上を見ながら微笑むFBI捜査官、ジョーディ・スターリングがいた

怯えた灰原は自分の部屋へ直行し部屋に入りドアを閉め鍵をかける
と息を切らし座りこんだ

落ち着いてきた灰原が視線を部屋の奥の方にやると灰原たちの部屋へ居座る誰かがこちらを見ていた

灰原「だれ!？」

思わず叫ぶ

逆光でシルエツトしか見えない灰原に黒のスーツをきた者が近づき
灰原は九死に一生の状態だった

現実逃避に目を瞑る灰原：

「…どないしたん?ちっこい姉ちゃん」

大阪弁の聞き慣れた声に目を開けた灰原の目の前にしゃがんで様子を伺う服部がいた

服部「血相かえて入ってきてどないしたんや？」

だんだんと冷静になる灰原

その後博士がきて少年探偵団や蘭達も部屋にはいつてきた

博士「哀くん大丈夫かの？」

光彦「どうしたんです？灰原さん」

蘭「なにかあった？哀ちゃん……」

皆が心配して様子を伺い灰原はもうウオッカがないことに安心し落ち着きを取り戻した

九死に一生（後書き）

漆黒の闇と純白の光はもうすぐ交える…
いや、既に重なり合っているのかもしれない

衝撃の告白（前書き）

“我々は神であり悪魔でもある”

どうか【悪魔でもあるが神でもある】にはなりませんように

衝撃の告白

その頃プライベートルームの裏の物置では今後の予定がたてられていた

快斗が父親の死後二代目怪盗キッドになった訳、宝石などを盗んでは返すこと、今日なぜここにいたかを全てコナンに話し、コナンも今日のパーティーの差出人の黒ずくめの男たちに毒薬を飲まされ幼児化した事、そのために黒ずくめの男たちを追い悪事を暴こうとしていることを話した

快斗「なるほどな〜で、どうする？」

コナン「恐らく今日ここに俺達を呼んだのは黒ずくめの男たちの仲間のベルモットというやつだ」

「ベルモットは前に一度蹴りをつけたにも関わらず今日俺達を呼んだのはたぶん…危害を加えようとしてるんじゃないやねえと思うんだ」

快斗「はあ〜？どうゆうことだ？」

コナン「お前も招いているということは何か俺等とお前に接点があるはずなんだ」

快斗は意味不明といわんばかりの顔でコナンを見る

コナン「例えばお前の父親の死の真相がこの黒ずくめの男たちに関わっていて…」

さすがに言っていることがわからず口を出す

快斗「俺の親父は黒ずくめの男とかいうやつらに殺されたのか？」

コナン「いや…」

快斗を見ながら真剣な眼差しでもったいぶるコナンに何かを悟った快斗「おい、まさか…」

コナン「ああ、まだ断定はできねーがたぶんお前の親父さんは生きていると思うぜ」

推理とはいえまさかの告白に嬉しさがこみあげ、同時に何も言わず

いきなり事故死としていなくなった父親に怒りを感じていた

再会

コナン「そうなると思うと…」

快斗はコナンの声に我へとかえり耳を向ける

「こつちから出迎えてやるまでだな」

いつもの自信満々の何かを企んでいる笑みでそついう

「コナンちゃん？」

と物置の外から声が聞こえた

コナンは声の主に気づきドアを開ける

コナン「おい！母さん」

有希子「あ！いたいた！もお！すぐどっかいなくなっちゃうんだから」

少し天然な有希子は開会式が終わった直後に姿が見えなくなっていたコナンを捜していた

快斗「あれ？」

有希子のほうを見てとつさにでた一言

有希子「あら？」

快斗を見て言った

見つめ合っている二人を不思議に思うコナン

有希子「もしかして…」

快斗「…お久しぶりです」

意味深な会話に更に不思議に思うコナン

コナン「おい…なんだ!？」

有希子「あつ、ほら、優作の友人の…」

コナンの言葉に我に返る有希子

快斗「黒羽快斗です」

コナンに始めて名乗った本名

有希子「快斗くんのお父さんの黒羽盗一さんって世界的に有名なマ

ジシャンで私、昔マジシャンに修業にいったって話したことあるでしょ？その黒羽盗一さんのところに修業しにいった時にまだ小さい快斗君が私にマジックしてくれたのよね〜」

快斗「はい、その節は」

と今も昔も変わらぬ美貌の有希子に挨拶をする快斗

コナン（なんだなんだ!?!）

（母さんとこいつそんな昔から知り合いだったのか!?!）

なぜか悔しそうにするコナン

有希子「盗一さんね、とても厳しくて…まだまだ修業がたりないからって教えてくれなかった瞬間移動のマジックを念を押してようやく教えてくれたのよ？できたときはもお、本当に嬉しくて…ウフフ」と世間話をし始める有希子

快斗「あ、アハハ」

適当に相槌を打った

有希子「ちよつと寝ないでこっち（日本）にきたから眠くなっちゃった〜」

あくびをしながらそう言う

有希子「仮眠とろーっと！んぢゃコナンちゃんも早く部屋に戻るのよ〜」

そう言うと早々と部屋に戻る有希子

2つのテレポート

快斗「おまえの母さんちよと抜けてんな」

「てか、おまえの母さんだったとはな。世間はせめえな」

笑いながら少しばかり嬉しそうにする快斗に対しコナンは下を向き黙ったまま何かを考えていた

快斗「おい？なにしてんだ？名探偵」

コナン「まさかな…」

怖い顔をして何かを考えている

快斗「あん？なんだ？」

コナン「おい黒羽…」

と始めてよぶ本名と同時に前代未聞といってもいいくらいの推理、いや衝撃的な言葉を発しはじめた

快斗はコナンの顔をみてコナンがこれから話し始める事は平常心では聞いていられないくらい恐ろしいことだと予想がつきゴクリと唾をのむ

コナン「お前の親父さん…生きてるぜ」

快斗はコナンの力のある表情をみて父親は本当に生きているかもしれないという思いが確信に変わった

快斗「どうゆうことだ!？」

コナン「母さんの言った瞬間移動のマジックってやつは、確か俺が小学生の時に幼なじみと喧嘩してその場を和ませて仲直りをさせるためにはじめて人に披露したマジックなんだ…」

快斗「それで？」

コナン「その時、俺の記憶が正しければそのマジックは“昨日”できるようになったばかりだって言ってたんだ…」

「それが小学五年の終業式の時だから今から六年前…おまえの親父さんが事故死したとされてるのが今から八年前…どう考えてもおかしい」

快斗は真剣な表情でコナンの話を聞いている

揃ったパズル

コナン「昨日”できるようになったってゆう言葉が俺の聞き間違いや思い込みだとしてもあの母さんがそんなスゴ技のマジックができるようになったのを誰でもいいからすぐ人に披露しない訳がない」

「おまえの親父さんが事故死してから瞬間移動のマジックを披露するのに約二年の時間がある」

「二年もの間母さんができるようになったマジックを披露しないとするのはまず考えにくい…例えばまだ練習中だったとしても誰もが魅了してしまう瞬間移動というマジックをやりたがる筈だ」

快斗「…ということとは」

コナン「ああ母さんは黒羽盗一というマジシャンが事故死したとされてから黒羽盗一にマジシャンを教わっている」

「殺されたところかおまえの親父、黒羽盗一は死んでいない」

快斗「じゃあ…なにか？」

「お前の母さんは何か知っているということか!？」

コナン「何かを隠しているというものにとって、今のは客観的にみれば母さんのミスだがあれはわざとそう言ったんだ」

快斗「はあ!？もつと分かるように言え!意味がわからねえ!」

勿体ぶるコナンを怒鳴り散らす快斗

コナン「要するに…何かを知っているというより、全てを知っていると…聞いたほうがいいだろう」

「お前の親父さんの行方不明の真相やそれに関わっている黒ずくめの男たちの正体、そして今日俺達がここに呼ばれた訳をな」

揃ったパズル（後書き）

そう言い放ったコナンの心中では
どうか最愛の母親がこの黒ずくめの男たちに関わっていないで欲しい…また、間違っても仲間なんかではないでくれと願うばかりだった…。

沸き上がる黒ならぬナイトバロン（前書き）

と同時に母親が組織に関わっていても関わっていなくても必ず自分が暴いてやるという思いでいっぱいだった

沸き上がる黒ならぬナイトバロン

1503号室

窓の外をみている灰原とテレビをみている服部、さらにホットドッグを頬張る元太と何か作戦を考えている光彦と歩美の姿があったそこにやつとコナンが帰ってきた

コナン「あれ？おめーどこ行ってたんだ？」

寝っ転がっていた服部はコナンの帰宅をまっていた

服部「よお！くど…やつと帰ってきたな」

とコナンに近寄り部屋の外にできるように促す

コナン「あんだよ？」

服部「えらい情報はいつてきたで」

そう小声でコナンに言う

コナン「なんだ!？」

顔色が一変しその話に飛び付く

服部「さっきお前を待ったたらなぜか俺の目の前を親父が横切ったんや」

コナン「おまえの親父が？」

服部「ああ和葉の父親とおったんやけどえらい怖い顔してってな、気になってもうてしまてつけたんや」

「そしたらナイトバロンつちゅう格好したやつと落ち合ってたんやよろしゅう頼むとかなんとか言ってたんや」

コナン「ナイトバロン!？」

服部「ああ、せやからなんかある思てそのナイトバロンの格好したやつをつけていってみたら四階の三つ目の曲がり角を曲がったと同時姿消しはりやがってたな…」

「たぶんその辺りの部屋のやつなんやろけど…せやかてぎょうさん部屋があるさかい」

コナンはその話を聞き、四階へ駆け出して行く

二発の弾丸

コナン（四階の三つ目の曲がり角…）

（四階へ降り立つにはエレベーターか階段で一ヶ所ずつしかない上に降り立つ場所が同じ位置だからここからだな）

四階の入り口に降り立ったコナン

はじめに右へ曲がり次に左へ曲がりもう一度左へ曲がるそうするとすぐ左には縦に並んだ部屋が二つに突き当たりに一つ右側の奥に部屋が一つと右側の一つ手前にはまた曲がり道の廊下がありそこを除くと対面で部屋が四つあった

コナン（左に曲がってすぐ姿を消したとなると…普通このすぐ左の部屋と思うだろうがこの船の部屋のドアは全て内開き…）

（いくらBGMが流れていたとしてもこの扉の閉まる音や閉まる様子はわかるだろう）

（そう考えるとこの範囲から扉の閉まる様子や音が聞こえるのは左の奥と突き当たり、更に右側の部屋となり可能性があるのはもう一度右へ曲がったこの四部屋となる）

コナンはその四部屋の前を歩き出す

そうすると右奥の部屋から誰かがでてきた

コナンは迷子のふりをしながらその人物に目を向けるとよく知る人物がいた

コナン（あれ？）

赤井（ん？このボウズは確か…）

FBI捜査官、赤井秀一がいた

赤井もコナンに気づき話かける

コナン「赤井さん！？」

赤井「やっぱり君か」

「こんなところでなにをしているんだ？」

コナン「赤井さんこそ……」

と二人は何かを悟り理解し不適な笑みを浮かべた

強化されたシルバー・ブレット

船内のある一室

その赤井とコナンが喋る様子を監視カメラで映像に映し

男「フフフ…辿り着いたようだな…」

「たった一つの真実というやつに」

映像の光で微笑む顔がライトアップされた江戸川コナンこと工藤新

一の父親、工藤優作がいた

優作「さあ、新一おまえのお手並みを拝見しよう」

「あまり追い詰めないでよ？」

と後ろから優作に歩み寄る有希子の姿があった

優作「ああ、問題ないさ」

(我々を欺く二発のシルバーブレット…)

四階1401号室

コナンは赤井から部屋へと誘われオレンジジュースをご馳走になり
ベッドへと腰かけていた

赤井「君たち少年探偵団と阿笠博士が近頃そわそわしていたのはこ
うゆう事だったのか」

コナン「うん」

「でも赤井さんが二人いたとは…」

そう、赤井秀一はキールこと水無怜奈に峠で打たれて死亡したはず
なのに今どうしてここにいるのか？

赤井秀一には双子の弟、赤井響一がいたのだ

響一は赤井同様に銃の腕前や洞察力を抜群に持ちながら世に名は伏
せているが天才的マジシャンである

あの峠で水無怜奈に打たれたのは赤井響一だったのだ

いや、打たれる前にマジックで等身大の人形を用意し水無怜奈には人形を打たせたのであった

水無怜奈もそれには気づいていた様子だ

少々訳ありで仲間のFBI捜査官には赤井秀一は死んだということにしているらしい

だが銀行強盗の事件やデパートの事件での捜査官や組織による赤井秀一目撃は弟の赤井響一に頼んだみただった

そのおかげで今日ここにこうして組織壊滅をしに来れたという訳らしい

放ちはじめた銀の弾丸

コナン「弟の響ーさんを赤井秀一としてわざと捜査官や組織に目撃させたのはなぜなの？」

赤井「いくら二卵性の双子でも顔や背格好に多少の違いはあるんだ」「長年ともに信頼し捜査を行ってきたものだけに真相は見える…敵はもちろんだが味方でもこの俺を恐れているものにとっては例え初対面の人間にわかったとしても既に困惑しているため違いに目をくれようとせずに思い込んでしまう」

もう少しで全てがわかりそうな顔をしているコナンに止めの一発で刺激する

「その人物こそが俺のターゲットだった」

コナン「赤井秀一が生きていると恐れたそのターゲットは自らこの場に赤井さんを選んでしまった」いきなり目付きのかわったコナンが後に続く

コナン「壊滅させようとして呼んだのにも関わらず自らが壊滅に導かれようとしているのにも関わらずに…」

互いに微笑む二人の姿、この彼らこそ救世主と呼ぶのにふさわしいだろう

赤井「水無怜奈が入院していて保護にあたっていた時、コロンバインの花が届いただろ？」

「あれをみてまさかと思ったんだ」

コナン「そうだよ、白のコロンバインの花言葉は“あの方が気がかり”」

「あそこであんな行動をとったのはやむを得なかった」

赤井「ああ、ボスにとっては九死に一生だったと思うよ」

コナン「赤井さんの前であんな事したらこんな結末になるのは目に見えているよね？……バーボン？」と問いかける

赤井「ああ、さぞかしお怒りだっただろう…高校生探偵、工藤新一のいる目の前であんな大胆な贈り物を届けるなんてな？」
と問い返す

この二人には既に結末の絵が描かれていた

放ちはじめた銀の弾丸（後書き）

そして二人は互いに会ったことを伏せそれぞれのやるべき場所へと
向かいはじめた

失った希望（前書き）

この誰にも読めない赤井秀一をただ一人だけ知り尽くしている者が
いた
ただそれは絶対的な希望に繋がる者だった

失った希望

2205号室

FBI捜査官ジヨデイ・スターリングとアンドレ・キャメルが何やら会議をしていた

ジヨデイ「…というようになってるわ」

「くれぐれも警戒を怠らないように、かつ信頼性も失わないように」
キャメル「わかりました、しかし…」

ジヨデイ「…今更悔やんでも仕方がないわ」

「これが事実でそれがボスの本性…」

「今更悔やむことといったら、それに気づかなかった私たちの実力を悔やむべきね…」

ここ一週間の調査の結果や過去のコロナバイン贈呈の件やそれらしき行動からして黒の組織のボスはFBI捜査官のボスでもあるジェームズ・ブラックが浮上したのである

この事実には他のFBI捜査官たちはもちろん長年付き添ってきたジヨデイやキャメルは絶望していたのである

共に同じ場所で戦う仲間と思っていたのにこんな身近に捜し求めていた人物がいたという事実には悔し涙をこらえ捜査にあたっていたキャメル「もう少し早く気づいていれば、赤井さんは死ななくて済んだのに…」

一番組織を追っていた赤井に対し悔しい思いと申し訳なさに、こらえていた涙が溢れだした

ジヨデイ「いえ、シユウは生きているわ」

「きつと今も私達以上の情報をつかみ独自に捜査にあたっているわ」
キャメル「え！？でも赤井さんは…あの時水無怜奈に撃たれて…」

「そのあとデパートや銀行で見かけた赤井さんは似ていたけどどこか違っていたから…」

ジヨデイ「ええ、あれはシユウではないわ」

「でもシユウが考えた作戦よ」

キヤメル「どうゆうことですか!？」

ジヨデイ「…それがシユウだから」

赤井秀一が死ぬはずがないと信じ続けたジヨデイの元には自ら手にした情報が舞い込んでいたのだ

今までに何度も生還を果たしたこと、あの日撃たれにいった訳、そしてデパートや銀行で赤井にそっくりな弟、赤井響一をジヨデイや組織の目にさらした訳を

取り戻した希望

信じているからこそ、大切に思っているからこそ導き出せた真実であつた

ジヨデイ「きつとシユウはもう既に組織へ手が届こうとしているわ」「それをフォローしながら私達の目的も果たすわよ」

キヤメル「わかりました、赤井さんに恥じないように頑張ります」二人は気合いをいれて捜査にあたりはじめた

船内喫茶店

三階にある窓から海が一面できる洒落た感じの喫茶店にコナンと服部と灰原、それに元太、光彦、歩美がいた

コナンが駆け出していったあと服部もその後を追おうとしたのだが中から出てきた灰原に呼び止められコナンに話したことを灰原にも話したあとに二人は四階にいったのだがコナンはいなくコナンを捜しに喫茶店付近をうろちよろしているところに本人が現れ、丁度コナンと灰原を捜しに出っていた好奇心旺盛な三人も合流しここでお茶を飲みながら話していた

服部「例のやつ見つかったか？」

コナン「いや、三部屋に絞り込めたは絞り込めたけど」

服部「そうかー親父は何話とつたんやるなあ」

灰原「少なくともこの招待状を出した人物や黒の組織に関わっていることは確かだね」

光彦「まさか…服部さんのお父さんがボスだったりとか!？」

服部「んなわけあるかい!あの親父は頑固で気難しい人間やけど犯罪は絶対にせえへん」

「それだけが俺の尊敬しているところや」

歩美「へえ〜何かかつこいいね!」

コナン（犯罪はしねえって当たり前だろ…ましてや警察官でもあん

だからよ)

とほとした顔をしているコナン

元太「なんか俺、はらへっちったー」

「すいませーん！」

と大声で手を振り店員を呼ぶ

灰原「まあ、彼らがいる以上これより深くは入り込めないわね」

と三人に視線を向け、特に元太を見ている顔はもはや呆れていた

探偵団ならぬ探検隊

光彦「…そうゆうわけで今回こそコナン君より先に事件解決しまし
よう！」

歩美「そうだね！情報はだいたい掴んだし」

元太「とりあえずその服部つてゆうえらいやつを尾行してナイトバ
ロンの格好してるやつを見つければいいんだろ？」

光彦「ええ…では作戦通りにいきますよ。何かあったら探偵バッジ
で報告してください」

小声で怪しい会話をしている三人

コナンたちはまずジンに接近しようと頭をひねっていたために危な
い三人の会話に気づいていなかった

こっそりとコナンたちがいる喫茶店をあとにする三人

元太「よし！脱出成功」

光彦「じゃあまず僕は服部さんのお父さんが怪しい会話をしていた
という地下の倉庫裏にいきます」

歩美「じゃあ歩美はナイトバロンがいなくなっただってゆう四階にい
くね」

元太「俺はこの招待状を出したやつを突き止めるために、うん…
とりあえず怪しいやつらに声をかけてみる！」

三人は光彦のパンフレットの地図をみながら楽しそうに早々事を進
める

光彦「ではまた後ほど」

そういうと三人はそれぞれ散らばり自分の目的地へと向かった

四階1405号室付近

小さい真つ黒の衣装に身を包む女の子が一人でぼつりと周りを警戒
しながら歩く

歩美（コナン君が言ってた部屋はこのあたりだから）

ガチャガチャと一つ一つの部屋のノブをこつそり回していくが全室に鍵がかかっている開かなかった
歩美（空いてるわけないよね〜）

地下倉庫裏

光彦（えっと…確かこのへんですね）

薄暗い部屋の中をペンライトで照らし歩く光彦の姿があった

光彦（何か手掛かりになりそうなものが落ちたりしていればいいんですけど…）

と！！その時奥の方から誰かが歩く足音がこちらに向かってきた

危険な探検

とっさに近くにあったボックスの中へ隠れる光彦

コツコツ コツコツコツ

二人以上の歩く靴の音がした

「タイムリミットまであとどれくらいだ？」

『あと丁度、十五時間です』

「いまが12時ちょっと前だからだいたい朝方の三時というところか」

「その時間はみなぐっすり眠っているころだろう、では深夜一時頃に我々は用意してあるボートで姿を消すよ」

『わかりました。準備しておきます』

「その二時間後に夜の綺麗な海を照らす最大の花火をどかーんと一望できるな」

「君たちはどうするんだ？」

『私達は心配いりません、万全の準備ができております』

「そうか、では手筈通りに頼むよ」

コツコツコツ

一人の男が歩いて行く

『私達が見るのはそんな汚い景色なんかじゃないさ』

残った男が歩いて行く男を睨みながら呟く

その頃の光彦は恐ろしい会話を聞いてしまい硬直していた

光彦（まさか…最大の花火って……ば…爆弾！？）

冷や汗をたらず光彦

二階機器管理室

走りながらナイトバロンを捜す元太がいた

元太「あゝ疲れたぜ」

「ったくよおゝナイトバロンどこにいやがんだ!？」

走りながら通路を曲がると長身の黒ずくめの男にぶつかった
ドンッ

元太「いてえ〜」

「なんだお前は」

鋭い眼差しで見つめる銀髪の男がいた

元太「わりわりいい人捜ししててよ〜」

「あっそうだ！ナイトバロンの格好した怪しいやつみなかったか？」

「ナイトバロンに何の用だ？」

元太「いや〜俺等少年探偵団やっててよ〜」

「変な招待状が届いたんだ！それでコナンが黒ずくめの男たちの正
体を暴くぞってここまで来た…ん……だ……アアア〜」

ついつい喋りすぎた元太が焦り誤魔化そうとするが、時既に遅し銀
髪の男が元太の目線に合うようにしゃがみ込んだ

オレンジ色の贈り物

「コナンっていうのは江戸川コナンか？」

いきなり問いかける男に対し

元太「あ…ああ」

戸惑いながら返答する元太

「お前の友達か？」

元太「そうだけ！俺とコナンと光彦と歩美と灰原は少年探偵団だけ
！」

男は笑みを浮かべて呟く

「灰原… フフツ… シェリー」

元太「どうしたんだ？」

男は元太をみて言った

「お前の友達の江戸川コナンにこれを渡しておけ」

男はそうゆうとポケットからペットボトルを取り出した

元太「なんだ？ジュースか？」

オレンジの綺麗な色をした水を見て思わずそう聞いた

「ある意味ジュースだ」

「いいか？飲んでは大めだぞ？」

「江戸川コナンに渡せ」

そうゆうと男は去っていった

元太「なんだよケチだな、ずりーなコナンだけ」

「どうせなら人数分渡せよ、チツ」

グチグチ言いながらエレベーターに乗り込み五階のボタンを押す

1501号室

蘭（新一まだこないのかな… って動きだした船になんか乗れないよ
ね）

（やっぱりまた口だけだったかな）

寂しそうな顔をして海を眺める蘭

園子「蘭？ご飯たべないの？これすごくおいしいよ」

そっぴいなながら和葉とルームサービスの昼食をたべている園子
和葉「これ何やる？ホタテみたいやな」

「めっちゃおいしい〜蘭ちゃんもたべよう？」

蘭「う、うん」

青い恋と赤い恋

園子「なになに？またあの推理オタクのこと考えてんの？」

和葉「推理オタクってあの蘭ちゃんの彼氏やる？」

「呼ばなかつたん？」

蘭「ううん、呼んだんだけど……」

園子「女房より事件が優先なんだってさ」

和葉「はあ？なにそれ！？うちが一変渴いれたるかー？」

蘭「しよ、しょうがないよ推理オタクを好きな私も悪いし、新一はそうゆう人だつて知つてて好きになつたんだから……」

和葉「なんか切ないな……」

蘭「うん…和葉ちゃんがちょっと羨ましい！」

和葉「なんで？」

蘭「だつてなんだかんだ言つても服部君は和葉ちゃんにべつたりでどこにでもついてきてくれるでしょ？」

園子「そうそう！さっきもいつの間にか部屋にいたしね！」

和葉「だれが？」

蘭「誰つて服部君が……」

和葉「どこに？」

園子「え？まさか気づいてなかつた!？」

「哀ちゃんが飛び出して部屋にこもつた時に服部君哀ちゃんを心配してしゃがみこんで様子伺つてたじゃん!？」

和葉「ええー！?!平次が!?!ここにおるん!?!」

蘭「本当に気づいてなかつたんだ…つきり喧嘩してたから気づかないふりしてたのかと思つた……」

あの時和葉がいた場所からは部屋のドアが丁度死角になつていて平次の姿がみえていなかったのだ

そうと知つた和葉は部屋を飛び出し1503号室に向かつた
ドンドンドン

和葉「平次！平次く？」

ドンドンドン

その後を蘭と園子もついてきた

隣の部屋からその声に反応した小五郎がでてきた

小五郎「なんだ！？事件か！？」

蘭「違うよ、お父さん服部君しらない？」

小五郎「あん？大阪の探偵坊主か？きてんのか？」

和葉「あーもう話にならんわ」

小五郎「はあん？」

酔っぱらっていてまともに歩けない小五郎は今の和葉にとって邪魔
そのものだった

闇の行方不明

三階・喫茶店

灰原「はあくあ、なんか私眠くなっちゃった…部屋に戻って寝るわ」
「ついでにみんなもつれて…」

先程までそこにいた三人の姿がなかった

灰原「みんなは!？」

その言葉にハツとするコナンと服部

コナン「元太!？光彦!？歩美!？」

服部「おいおい、まさか…」

三人がいたテーブルの下に何か落ちているのを見つけた服部

服部「これは!？」

灰原「吉田さんのパンフレットね」

「さつき部屋で私達の似顔絵をかいていたから」

皆が持っているのと同じパンフレットの表紙には少年探偵団の似顔絵が書いてあった

その中身を見るコナンはある箇所を発見した

コナン「ん？船内の地図…」

「なにか丸がついてあるぞ!？」

服部「地下の倉庫裏に一つと四階に一つとその脇に書いてあるんや不気味な絵はなんやるな？」

灰原「ナイトバロン…」

コナン「ああ三人は俺達の話参考に自分達で作戦を考え解決しようとしている」

「ったく、大人しくしてろってゆったのに!!!」

三人は三手に別れ服部は地下の倉庫裏に灰原は四階にそしてコナンはナイトバロンがいそうと思う場所を隈無く捜しに行く

三人がエレベーターのほうに向かおうとしたら蘭と和葉と園子がエレベーターから降りてきた

和葉「平次！」

服部「和葉！三人の少年探偵団たちを捜せ！」

和葉「なんなん！？」

いつもながらいつの間にかいなくなるあの三人を怖い顔をしながら懸命に捜そうとしているコナンと服部と灰原を見て和葉と園子は当たり前だが意味不明だった

蘭「コナン君？どうしたの？」

コナン「元太と光彦と歩美がいなくなっただんだ」

「たぶん……」

とそれ以上は蘭に言えなかったが蘭自信もこのパーティーでの脅迫をされたために絶対安全なパーティーではないことを振り返り三人がもしかしたら危険なめにあっているかもしれないと思い和葉と園子に言い聞かせる

蘭「とりあえずみんなを捜そう？」

園子「そうね、いくら少年探偵団でもまだ小学一年だし心配ね」

和葉「ほなうちらもいくで！」

既にエレベーターに乗り込み上にいく灰原とコナンに加え階段で下に行く服部

蘭と和葉と園子は三階を捜すことにした

闇の行方不明（後書き）

蘭（どうか、三人とも無事でいて）

新一が来なく監禁できないために三人を危険な目に合わせようとしているのかと思う蘭は必ず自分が身代わりになっても助けだそうと決意をしていた

気配（前書き）

それはコナンや灰原、服部も同じ思いだった

気配

四階

エレベーターで四階まで灰原を見送ったコナンは灰原に、何かあったらすぐに連絡をしろと言いエレベーターに戻り二階のボタンを押した

灰原（二階：機器管理室および関係者がいる場所：もちろんジンやウォッカもいるわ：工藤君：）

コナンにも危険が迫る中一刻も早く三人を見つけ出そうと思いきり出す灰原

例のナイトバロンが消えたという部屋付近

灰原（ん？あれは：）

1408号室の前の廊下に何かが落ちていた
見覚えのある形と色のものを拾おうと近寄る

灰原（これは：！！探偵団バッジ！）

（きつと、吉田さんのだわ：！！）

拾い自分のポケットに入れながら1408号室を覗む

と！突然背後から嫌な気配がした灰原しか感じとることのできないあの組織の気配だった

動けない灰原は震える手でなんとか探偵団バッジでコナンに連絡しようとするが

灰原（（！！））

薬を染み込ませたハンカチで口と鼻を塞がれ気を失う灰原
気を失わせた人物は灰原を抱き抱えどこかへ消えた

地下倉庫裏

ライトなしで薄暗い通路を歩いていく

服部「おい！元太君に光彦君に歩美ちゃん？おるなら返事せえやー」

「おい！ここは子供の遊び場ちゃうでーはよう出て…」
薄暗い通路に誰かいるのがわかった

服部「だれや!？」

思わず突っかかる

その言葉に反応し服部のほうにヒールを鳴らしながら近づくと
カツカツカツ

服部「だれやと聞いとるんや!」

女は不適な笑みを浮かべながら口を開けた

女「シャロン…私の名前」

服部「シャロンやと!？」

女「ベルモット…これが私のコードネーム」

女はそういうと顔が丁度光にあたりライトアップされた

服部「コードネームって…まさかおまえ、黒ずくめの男たちの仲間か!？」

ベルモット「ええ、そうね」

服部「くそっ！子供たちはどこや!？」

初めてみせた曇り空

服部は辺りを見回し武器になるようなものを見つける

ベルモット「警戒しないで、あなたと対立するつもりはないから安心して」

服部「じゃあ何でそこにおるんや！」

ベルモット「保護してあげたのよ？もつとありがたく思ってた？」

服部「保護やと！？子供たちはどこや！？」

ベルモット「痩せてるガリ勉君ならそのボックスで気を失っていったから一階の救護室に連れていったわ」

「あなたもはやく退散するべきね…ここはとても危険だから」

服部「ハハツ味方してるつもりかいな」

「光彦君を助けてくれたんは感謝する、せやけどなこんな危険でぎょうさんよだれがでるくらい情報が埋まつてる場所から退散しろゆうのは俺にとっちゃ死ぬまでここにいろと言われてるのと同じやねん」

ベルモット「好きにしてちょうだい」

「時間が許す限り…」

服部「ああ、お言葉に甘えて」

ベルモットはムツとした顔で去っていった

二階機器管理室

怪しげな雰囲気を醸し出している見るからに危険なエリア

ここは関係者以外立ち入り禁止だ

コナン（あいつら一体どこにいった！？）

（…ん？元太！？）

二階の窓から斜め下をみるとぼとぼ歩く元太の姿があった

コナンはとりあえず元太の元へ向かった

二回目の投与

コナン「おい！元太！！お前一体どこいつてたんだよ！？」

元太「ハハハ…わりいわりい」

「おいコナン、そんな息切らして大丈夫か？」

コナン「ああ、それより光彦と歩美…」

元太「はいこれ飲めよ！」

コナン「ああわりい」

そういうと元太がもっていたせいとか何も警戒することなく喉が乾いていたコナンは飲み干した

コナン「元太、わりいなくなっちゃった」

元太「ああ、いいよ別に」

「俺が買ったんじゃないし」

コナン「えっ？」

元太「さっき貰ったんだお前のこと知ってる兄ちゃんに」

コナン「俺のことを知ってる兄ちゃん！？」

といえば快斗と赤井くらいしか心当たりがないが赤井にはさきほどジューズをご馳走になったからまたくれるというのは考えにくく快斗もそうゆうガラではないために途方にくれる

元太「そうだぜ！おまえだけしか貰えねーでよ、ケチな兄ちゃんだぜ」

何かをよんだコナンの顔色が変わった

コナン「おい！このジューズどこでどうゆうやつに貰ったんだ！？」

元太「うんと…二階の曲がり角でぶつかった兄ちゃんは、真っ黒な服に黒い帽子を被ってて…背が高くて、髪がながかったな」

コナン「髪の毛…何色だったか覚えてるか？」

まさかとは思ったコナンは恐る恐る聞く

元太「灰色みたいなシルバーみたいな…銀髪だったな」

コナンは顔が真っ青になりその場で崩れた

コナン（おいおいおい…全部飲み干しちゃまったじゃねーか！？この中身は一体…）

元太「どうしたんだ？コナン？」

コナン「……………」

元太「変なやつだなー」

ピピピッピピピッ

元太「ん？探偵バツジか」

『みなさん！！大変です！爆弾です！この船に爆弾が仕掛けられています！！！！』

やばい時間

コナンの耳にもその大きな声が入りその事態に我に返った
コナン「光彦！本当か！？いまお前どこにいるんだ！？」

光彦『いま一階の救護室です』

コナン「わかった！すぐに行くから動くんじゃねーぞ！？」

そう光彦に告げると今は何ともない体を後に回しとりあえず救護室
に向かう

三階レストラン街

和葉「ここにもおらへんで」

園子「食いしん坊のガキんちよのことだからここはどこかにいると
思ったけどさすがにいなかったわね」

蘭（元太君、光彦君、歩美ちゃん…どこいったんだらう？）

和葉「ほな次、上行くで」

三人はエレベーターのほうに戻ろうと走る

蘭「あれ？」

園子「どした？いた？」

蘭「あ、ううん」

何かに見とれている蘭に気づかず和葉と園子はエレベーターのほう
に走って向かった

一人その場に立ちすくむ蘭

その視線の先には

蘭「新…！？」

と思われる人物が喫茶店の椅子に座り蘭に背を向けた状態でした
その場に近寄り後ろから顔を除く

そこにいたのは怪盗キッドこと黒羽快斗だった

これから動き出そうとお茶でリラックスし気合いを入れているところによく知る人物に似ている女の子が顔を覗いてきた

快斗「え！？な…なんですか？」

蘭「ごめんなさい…人違いでした」

期待を胸に膨らました蘭はガツカリと悲しい顔をする

快斗「い、いえ」

（あーびっくりしたぜ！この子ね、しかし青子じゃなくてよかったな、あいつがいたら言い訳しようがねえからな）

蘭「あの〜」

快斗「は、はい？」

蘭「前にどこかで会った事ありませんか？」

真剣な眼差しで問いかける

快斗「…それは……」

切なる想い

快斗「ナンパっすか？」

蘭「い…いえ、本当にどこかで会ったような気がただけで」

慌てて誤解を解く蘭

快斗「ああ、そうっすか？」

「残念ながら僕は会った事はありません」

（この姿ではねーもんな？）

蘭「そうですか、いきなりすみません…失礼しました」

そうゆうと切ない顔をしながら走り去っていった

快斗「……………」

走り去る蘭をみて快斗もなぜだか悲しくなった

一階救護室

コナン「光彦、どこいったんだよ!？」

扉を開けて早々怒鳴り散らすコナン

光彦「すみません…今日こそコナン君より先に手柄をあげようと…」

「それより！大変です!」

光彦は地下の倉庫裏に行った際に遭遇した出来事をコナンと元太に話した

コナン「お前それ誰が話していたか見たか!？」

光彦「いえ…男の人というのは声でわかりましたが、ただ一人の男性はどこかで聞いたことのあるようなないような…」

元太「なんだよそれ!」

光彦「そういえば元太君！歩美ちゃんはどうしたんですか？」

先程から連絡がとれないコナンだがこの二人がどこにいるか知っているとばかり思っていたために光彦の言葉に啞然とした

コナン（まさか…やつらの手に!？）

その時コナンの携帯が鳴る

ブルルルツブルルルツ

コナン「はい？」

「え？あ…うん！」

電話の主は赤井秀一だった部屋に來いと電話だったようだ

コナンは赤井に言われた通り二人を連れて赤井の部屋へと向かった

白銀の盾

1405号室

椅子に座る赤井とベッドに腰掛けジュースを飲む歩美、薬で眠らされて
いる灰原の姿があった

歩美「お兄さん、コナン君の知り合いなの？」

赤井「ああ」

歩美「もしかして探偵さん？」

赤井「探偵ではないな」

するとドアの外からノックが聞こえた

赤井はドアに近づき鍵をあけた

そこにいたのはコナンと元太と光彦だ

コナン「赤井さんどうしたの？」

そうゆうと部屋にはいるコナンの目に歩美と灰原の姿があった

光彦「歩美ちゃん！無事だったんですね？」

元太「歩美、探偵団バツジで連絡しろよな！」

歩美「ごめんね」

コナン「赤井さん、どうゆうこと？」

赤井「この子達が部屋の前でうるついてたもんでね」

「ここは危険だからこの部屋で迎えがくるまでまっているようにい
つたんだ」

「まあ、茶髪の女の子は少々わけありで薬でねてもらったが…」

コナン「危険って…？」

まさかとは思ったコナンの予想が的中した

赤井「ああ、向かいの1408号室は例のボスの部屋だ」

「近くで監視しているつもりだろう」

コナンは向かいの部屋のほうを睨み赤井に少年探偵団が遭遇した事
を話した

コナン「…それで飲んじゃったんだ」

赤井「君は体を調べた方がいい」

「爆弾のほうはなんとかかなりそうだ…その前に解決を祈るが」

コナンも爆弾を止める前に全てを理解し解決に導きたかった

少年探偵団は灰原をかかえ部屋に戻り

赤井は部屋をでてどこかへ向かった

白銀の盾（後書き）

部屋についた少年探偵団をなかなか戻ってこない博士が心配して様子を見に来た

託した命（前書き）

そしてコナンは博士にも一部始終を話した

託した命

博士「まさか、また毒薬じゃ!？」

コナン「まあ…もしそうだったら博士、あとは頼んだぜ?」

博士「そんな!?! 哀君にゆって調べてもらったほうが…」

灰原「大丈夫」

ベッドに横たわる灰原が起きた

コナン「お前、おきてたのか?」

灰原「ええ」

「水状の毒薬なんてテレビの中だけ」

「少なくとも黒の組織の人間がそんな毒薬を作るとは思えないわ」

「だいたい子供なんかに渡したらあなたの手に届く前にペットボトルが空になることくらいジンにだって予想がつくわ」

コナン「じゃあ何なんだ?」

灰原「さあ、それは分からないけどあなた以外の人間がもし飲んでしまったとしても問題のない薬でしょうね」

コナン「なんだよそれ?」

「おめー科学者だろ?」

「だいいち元太を殺すつもりだったかもしねーじゃねーか」

灰原「それはないわ」

「小嶋君は江戸川コナンしか知らないしジンに会っても危険な人物だと分からないくらい組織に無関心」

「ましてや組織があなたを狙っているならあなたからあの世へつれていかれるでしょうから」

灰原の言い分に納得したコナンは下を向き薬のことや組織が考えている事、そして両親のことから組織に関わっている人物、ジェームズ・ブラックのことまで考えていた

はぐれた天使 (Angel)

そんな中また灰原は二度寝をし博士はその隣に座りコナン同様考え込む

今の一連の流れの会話を聞き逃さなかった元太、光彦、歩美の思考回路は混乱を招き共に動揺していた

光彦「コナン君、毒薬をのんでしまったんでしょうか…?」

歩美「黒の組織ってなんか人間離れしてる?…ジンってお酒の名前だよな?」

元太「おれ殺されちまうのか…?」

三人は噛み合わない会話をぶつぶついいながら固まっていた

すると突然部屋のドアが開いた

バンツ

入ってきたのは園子と和葉だ

和葉「平次!?!」

園子「博士!?!」

息を切らしハアハアしながら慌てて入ってきた

和葉「なんや?子供達みつかったんや!」

コナン「あ、連絡するの忘れてた…ごめん」

園子「それより蘭みなかつた!?!」

博士「蘭君、一緒じゃないのかね?」

和葉「今度は蘭ちゃんが迷子や!子供たち見つけて気づいたら今度は蘭ちゃんがおらんのや」

コナンと灰原は顔を見合わせまさかと言わんばかりの顔で二人に問いかけた

コナン「最後に蘭ねーちゃんみたのはどこ!?!」

園子「えっと…確か階段おる前だから、三階の喫茶店の前よね?」

和葉「そや、走ってる時やから」

灰原「回りに誰かいなかった？」

園子「近くにはいなかったけど喫茶店のほうをみてたわね」

和葉「もしかしたら知り合いがおったかもしれんな？」

捕まる天使 (Angel)

コナンは驚きを隠せないながらも必死に考えていた

コナン (知り合い…? 赤井さんか? いや…)

(蘭が子供たちを捜すのより優先して会いにいつてしまう人物…)

(…!!まさか…)

コナンは何かを閃き部屋を飛び出していった

そのすぐ後を灰原も追う

二階フロア

蘭 (元太君も光彦君も歩美ちゃんもどこいったんだよ?)

(園子も和葉ちゃんもいないし…)

二階の食堂付近やフロアをふらふら歩く蘭

蘭「ん？」

立ち止まる蘭の目の前には関係者以外立ち入り禁止の札がたっている薄暗い通路があった

蘭 (三人の事だからもしかしたらこうゆうところ入ってっちゃったかも…)

(子供を捜しているんだし関係者以外立ち入り禁止って書いてあるけど大丈夫よね…怒られたらちゃんと謝ろう!)

そう心に決めロープをくぐり奥へ進んでいく

奥へ続く通路の両側には部屋が四つありその奥に階段がありそのまま奥に部屋が対面で二つあった

蘭「元太君? 光彦君? 歩美ちゃん?」

「いないのかな…」

蘭は恐る恐る闇が濃くなる奥へ進んでいく

すると向こう側から誰かが歩み寄る靴の音がした

蘭は身の危険を感じとっさに近くの掃除用具入れに隠れる

最愛なる名探偵登場

コツコツコツ

蘭（関係者の人かな…？）

掃除用具入れに入る蘭の目の前を体つきがいい男が通る

コツコツコツ

蘭（あれ？あの人どこかで…）

と油断した蘭は足元にあったデッキブラシを蹴ってしまいデッキブラシが倒れた

ガタガタンツ

男（（！？））

黒のサングラスをした男はその音に気づき進路を変えて蘭のほうに迫る

蘭（見つかった…！！）

終わりだと思った蘭はとっさ的に目をつむった

「っしっ！」「っ」

と、突然耳元で聞こえた声に口を覆う手

ガチャ、ギイー

掃除用具入れの扉が開く

蘭はその声に反応し目を開けたがさきほどまでかすかに光が差し込んでいた掃除用具入れは真っ暗で目の前も壁に覆われていた

男「なんだ？なんか倒れたのか？」

「ねずみか…？」

「ウオツカ！」

掃除用具入れを覗く体つきがいい黒のサングラスをした男に女が話しかけた

ウオツカ「ベルモット？」

ベルモット「ジンが呼んでるわ」

ウオツカ「兄貴がですかい？」

そういうとウオツカは掃除用具入れの扉を閉めてジンの待つ部屋へと走っていった

少し外の様子を伺い間もなく掃除用具入れから出てきた

蘭は薄暗い中で助けしてくれた人の顔を見た

蘭「え？新…！？」

そこには最愛の人物が薄暗い中で黒いスーツを身に纏い立っていた

名探偵ならぬ白の怪盗

新一「あぶなかつたな」

「遅くなつてわりいな、蘭！」

ビックリした蘭の顔はすぐに豊かになりどこか嬉しそうにしている
蘭「ううん、でも新一なんでこんなところにいるの？」

新一「あ、ああ…船にのつた途端にまた事件の電話がかかってきて
ーさっきまで手こずってたんだ」

「んで、蘭を探そうと思つたらここに入っていく蘭が見えたから後
を追つて、そしたら変なやつが来るのが見えたからこの掃除用具入
れに隠れたところに蘭も入ってきたつてわけ！」

蘭「でもどうやって助けてくれたの？」

新一「あ、ああそれか？丁度真横に扉と同じくらいのミラーがあつ
たから扉の前へ斜めに置いて掃除用具入れを映しだした後ろに隠れ
たつてわけ」

蘭「そうなんだ？…ありがとう」

笑顔で蘭にそう言われた新一の姿をした怪盗は少し照れていた

新一（んまあ、ミラーなんていつも持ち歩いてるけどなー）

それを階段の影に隠れて聞いているベルモット

敏感な怪盗はそれに気づかないわけはなく蘭を先に部屋にいつてろ
と促した新一は蘭を後ろから見送つたあとに喋りかけた

新一「どうゆうつもりだ？ベルモットさんよお」

ベルモットは新一の目の前に姿を表し近寄る

ベルモット「あら？さすがね」

「工藤新一ならぬ黒羽快斗君？」

追加された剣

二階エレベーター内

蘭を捜しにエレベーターで二階に降り立ったコナンと灰原

灰原「最悪の事態を考えるならここね」

コナン「ああ」

二人は扉が開くと飛び出していくようにエレベーターを降り、右側の曲がり角から飛び出してきた人物とぶつかった

コナン「おわっ！！」

転び転がるコナンに手を差し伸べる

服部「いててて…すまん工藤…」

コナン「なんだ服部か」

服部「なんだちやうで面白い情報がまた入ったで」

灰原「それより彼女がいなくなったの…今は彼女を捜すことを優先してくれる？」

服部「彼女って…工藤の女か？」

灰原「ええ、」

服部「またなんで？」

コナン「恐らくここにいるキッドを俺と見間違えて…蘭の事だから後を追ったりしたんだろう…危険な目にあってなきやいいが…」

服部「キッド？怪盗キッドか？そいつこんなところでなにしてんや？だいたい何で工藤の女がそいつについていったら危険な目に合うんや？」

灰原「彼も訳ありで黒の組織を追っている様よ」

「何日もの間会えなく、今まで連絡をよこさなかった彼を見かけた彼女が工藤新一にそっくりな彼の後についていけないわけないわ」

服部「そらあかんわ…ほな行くで！！」

三人は再び走り出した

突き止めた漆黒

三人が関係者以外立ち入り禁止の札がかかった通路の目の前まで来ると驚いたことに蘭がでてきた

コナン「蘭ねーちゃん!？」

蘭「あ!コナン君!！」

「元太君と光彦君と歩美ちゃん見つかった!？」

コナン「あ、うん」

蘭「よかった」

笑顔を見せながら言う

灰原「どこにいったの？」

蘭「もしかしたらこうゆうところに入っちゃったのかと思って捜してたら新一がいて…」

服部「工藤が!？」

蘭「うん」

コナンはやっぱりなという顔をしていた

蘭「そしたら危ないところを新一が助けてくれて…」

コナン「危ないところって蘭ねーちゃんどうかしたの？」

蘭「三人を捜してたら男の人が歩いてきたからとっさに掃除用具入れに隠れたんだけど私が物音たてちゃって…」

「そしたら偶然新一もその掃除用具入れにいたみたいでなんとか危機一髪って感じで」

灰原「その男の人って？」

蘭「うん、どつかで見たことある人だったなー体格が良くて黒のサングラスをしていて…」

コナン（ウオツカ!！）

ウオツカ
灰原

コナン「その男の人どこにいった!？」

蘭「さあ?たぶん階段を登る音がしたから上に行ったと思うけど…」

服部「その…工藤どこにいったんや？」

蘭「新一はまだ調べたいことがあるからってまだ奥にいますと思う」

コナンはその言葉を聞くと走り奥へと入っていった

服部「おいけど…」

コナンの後を服部も追いかけていく

遂に訪れた最悪劇

蘭「ちょっと、どうしたの!？」

「コナン君?服部...」

灰原「あなたの友達二人ともあなたがいなくて心配してるわ、早く部屋にもどつてあげて?」

灰原に促されるまま部屋に戻ろうとする

蘭「うん...哀ちゃんは?」

灰原「私は江戸川君のあとを追うわ」

蘭「でも...」

心配そうな蘭に灰原が言い放つ

灰原「大丈夫よ」

「江戸川コナン...いや工藤新一を信じて?」

灰原の意味ありげな言葉は今の蘭の状況では真実ではないが解釈でき蘭の心にその言葉は大きく響いた

蘭「うん、解った」

と走り部屋に急いで戻る蘭とそれを確認した灰原はコナンと服部の後を追った

立ち入り禁止区域階段下

新一「組織の目的はなんですか?」

ベルモット「...目的?そうねー」

と不適な笑みを浮かべ新一を見つめているベルモットをよそに背後から一人の男が近づいてきた

ジン「ベルモット、なにをしてる?」

ベルモット「ジン...!？」

ベルモットにあつてはならない計画ミスがこんな所で発生してしまい動揺を隠せなかった

新一（ジン?名探偵を小さくしたやつだな?）

ジン「おまえは…」

新一を見て言う

ベルモット「ちょっと…ジン？私の計画の邪魔しないで頂戴？」

と新一の影になり顔を見させまいとするベルモット

(工藤新一の姿をした黒羽快斗が危ないわ)

三人は終始無言で立ち尽くす

数秒がたち黒羽快斗の身の危険を感じたベルモットは携帯を取り出した

ピッポッパッ

純白の煙

((?!?))

その携帯のプッシュ音は数メートル先の走るコナンの耳にも届いた
コナン「な…七つの子！」

服部「なんやて!？」

灰原「近いわね」

そういうと音の鳴った方へ急いで走り行くが

コナン「うっ…」

突然止まり胸を抑えるコナン

((ドクンッ!!))

コナン「うあっ…」

服部「どないした!？」

尋常ではないコナンをみて灰原は一瞬で事を察した

灰原「工藤君!？まさか!？あの薬…?」

服部「おい、ちっこい姉ちゃん、どうゆうことや?」

灰原「まずいわ…」

灰原の頭の中ではまず江戸川コナンが工藤新一になるうとしていることは研究者であり毒薬を作った張本人であることから容易に予想がついた

次にこうなるとすればあの時コナンが飲んだと思われる水状の薬のせいでまさかジンが解毒剤を渡したとは到底思えずなぜその薬で元の体に戻ることができようとしているのか更に今ここ、黒の組織の人間がいるかもしれないとここでまたそこに黒羽快斗の工藤新一と一緒にいるかもしれないところで工藤新一が二人になってしまった場合、工藤新一本人はもちろんだが黒羽快斗にも危険が迫ってしまうということを考えどうしようもできずにいた

コナン「う ああー!」

((ドクンッ!!)) ((ドクンッ!!))

服部「おい工藤しつかりせい!!」
その騒ぎを耳にしたジンが近づいてくる

灰原（!!）

嫌な気配を感じ取った灰原は硬直し言葉も発する事ができずにいた

灰原（逃げて……工藤君、服部君……）

気配はだんだん濃くなり曲がり角から人がでてきた

コナン「ぐあああ……!!」

灰原「逃げて……!!」

シュルシュル……ボンツ……!!

とっさに出た灰原の精一杯の声とコナンの苦しむ叫び声、そして何かが飛んできてコナンと灰原と服部を包む白い煙幕がもくもくと三人を隠していた

東の高校生探偵：復活

煙幕は次第になくなり煙がなくなるとそこには灰原と服部と元の姿に完全に戻った工藤新一と自分が着ていた服を新一に着せて悠々と白の衣装に身を包んだ怪盗キッドがいた

ベルモット（怪盗キッド…）

ジンの後ろで拳銃を構えていたベルモットは怪盗キッドの素晴らし
いマジックに少し感動していた

ジン「白の衣装はルール違反だぞ？」

「バンツ！！バンツ！！！！」

ベルモットのほうをチラ見したあとにキッドに言い放つと同時に拳銃を上
に二発撃った

キッド「それは申し訳ございません」

「目立ちたがり屋なものでね」

ベルモット「サイレンサーも無しに撃つたら誰かがくるわよ？」

ジン「ああ、俺としたことが…」

と笑いながら呟く

その通り、今の銃声を聞いたFBI捜査官のジョディとキヤメルが
かけつけた

ジョディ「手をあげなさい！撃つわよ！」

ジン「まだお前らの出番じゃねんだな」

そういうとジョディに向けて発砲する

バンツ！！

弾はジョディの腕をかすった

キヤメル「大丈夫ですか！？」

ジョディ「ええ、どうってことないわ」

この騒ぎをかけつけ上からウォツカとコルンとキャンティも降りて

きた

服部「おい、えらいことになったで？」

灰原「あれ!？」

気づくと新一とキッドの姿はなかった

灰原「工藤君とキッドがいないわ？」

服部「こんな時に…どこいきよつた!？」

と奥の方で灰原に向かって手招きしている人物がいた

横の脇道を通りこちらに來いとジエスチャーで伝えていた

用心深い灰原だがなぜか言われるがままに向かつていった

腐りかけた心

服部はどうか自分も黒ずくめの男たちと戦おうと頭をひねっているところに後ろから足音が聞こえた

ジヨデイ「ボス!？」

ジエイムズ「まあまあ、落ち着いてくれ
と休戦を促した

キヤメル「……………」

ベルモット「なんのつもり？」

ジエイムズ「まあ、そうゆうな」

「じきに決着はつく…いやもうついている」

「今更争わなくとも…」

「!!!バンツ!!!!」

といきなりジエイムズを撃ったベルモット

ジヨデイ「ベルモット!？」

これにはさすがのジンも驚いていた

ジン「どうゆうつもりだ?ベルモット」

ジエイムズ「…き、君には今まで良くしてきたじゃないか!？」

そう、ベルモットとジエイムズ・ブラックは切っても切れない縁で
結ばれているはずだった

昔、ジエイムズ・ブラックには七子という可愛がる娘がいた

その娘とベルモットが顔から容姿まで瓜二つだったためにジエイムズはベルモットをお気に入りとして組織に採用した

ベルモット「あんたのわがままにはもう、うんざり」

ジエイムズ「わ…悪いと思っただからその美貌をプレゼントしたじゃないか」

ベルモット「よくゆうわ!そんなの綺麗事にすぎないわ」

シャロン・ビンヤードは昔、最愛である夫を自らの手で殺してしま
った

アメリカの大女優である彼女はその事態に戸惑い古い友人であるジ
エイムズ・ブラックに相談したのだ

その時に助けてやるから私の力になれと言われ組織に入れさせられ
たのだった

戻せない過去

工藤新一が飲まされた薬A P T X “ 4 8 6 9 ”と同じ作用を持つ薬を飲み若返ったシャロンは、娘のクリス・ビンヤードとして今まで通してきた

始めの頃は助けてくれたお礼にと心を痛めながらもなんとか業務をこなしてきたシャロン

ベルモット（Angel…）

だが、いつしかこのままでいいのかこれでいいのかと悩むようになっていた

それは蘭の存在が影響させていた

そんな時に組織のボスの座がジェイムズ・ブラックではなくなったのだ

しかし引退した訳ではないために組織にどことなく首を突っ込んでくる

組織のボスという名称がなくなっただけで中身はボスと変わりないどころか昔より行動が激しくなっていた

これ以上こんなジェイムズの元でこんなやつのために危険を犯し更に人の命を弄ぶのに嫌気がさしていたベルモットはついに止めをさしてしまったのだった

二階上

そこには工藤新一と怪盗キッドこと黒羽快斗がいた

新一「いいか？俺が合図したらだぞ？」

先程練った作戦を今実行しようとしていた

快斗「おっけーい」

すると新一は薄暗い部屋の扉を開けた

ギーッ…

新一「だれもいねーな？」

辺りをキョロキョロ見回しても誰もいなく手掛かりになりそうなものもなかった

新一と快斗はここでなにをしているのか？それは自分達にもよくわからないが少なくともこの黒の組織に関わっている自分達の父親こと工藤優作と黒羽盗一を見つけ出し潔白と真相を証明したかったのだ

驚愕：

次の部屋に来た二人は部屋を目の前にしてゴクリと唾を飲んだ曇りガラスから部屋の中に人がいるのがわかったからだ

快斗「次は俺が行く」

新一「気を付けろよ？」

いくら父親だからといってここまでくると信用はできなかった

快斗「ああ」

ギー…

ドアを開ける快斗の目の前にはパソコンの目の前に座る一人の男がいた

快斗「誰だ!？」

男は回転椅子ごと体を快斗の方へ向けた

その男はナイトバロンの仮面を被っていた

快斗はその男を睨む

男「なかなか似合ってるよ？」

その声と言葉に快斗は啞然とした

仮面を被っていても分かった

それは八年振りの再会なのだから…

すると突然二階の方から声が聞こえた

「新一いー!!」

バンツ!!!バンツ!!!バンツ!!!

蘭の呼ぶ声と銃声の三発の音がした

新一の顔は真っ青になり快斗のいる部屋のドアを離れ廊下にでる

「らーん!!!?」

すると左の通路の隅っこで元太と光彦と歩美が座り込んでいる姿が

目に入り新一は思わず足を止めた

光彦「あ…あ…」

歩美「ううう…」

元太「ひ、ひえー」

そこには拳銃を構えた三人の姿があった

拳銃から煙が出ていることと三人の表情から今の三発の銃声はこの

三人のようだ

新一「お前らなにやってんだ!!?」

光彦「ご、ごめんなさい…」

歩美「でも…」

元太「俺らも力になりたかったから」

新一「そうじゃねえ!その拳銃はどうした!?!」

光彦「ら、蘭さんがいなくなっただって…コナン君と灰原さんのあと

を追って僕たちも捜そうとここまでできたらいきなり銃の音がして…」

歩美「近くにあった部屋に隠れたら…この拳銃があつて…」

元太「丁度三つあつて…それで…」

と下を向き弱々しく新一に言う

…そして決意

だったが、すぐに三人は真っ直ぐ新一を見上げた

光彦「ここにいる組織は凶悪犯罪グループです！誰かを助けようにも拳銃なしでは殺られてしまいます！だから…だから皆が助かれればそれでいいと思っただんです！！」

歩美「そうだよ！歩美達が捕まっても正当防衛になるもん！！」

元太「俺も皆が助かるならそれでいいぜ！！」

と力強い眼差しで新一に言い寄る

新一「おめーら…」

確かに危険ではあるがここまでできて引き下がる三人でないことは新一も承知済みでありここまで一生懸命な三人を引き返させることもできなかった

新一「おめーらはそこで中にいる快斗を見張っとけ！」

光彦「わかりました！」

そついうと新一は二階へ急ぐ

元太「かいと？つてだれだ？」

歩美「わからないけど…」

光彦「とりあえずここで待ちましょう」

駆け出して行く新一

蘭の呼び声が聞こえた二階へ駆け降りる

バンッ！！バンッ！！！！

また銃声が聞こえた

新一「蘭！？」

更に足を急がせる

新一（蘭… 蘭になにかしたらただじゃ済ませねえ！！）

と、その時目暮警部と高木刑事と佐藤刑事と大阪府警服部平蔵と遠山銀司郎の姿が目に入った

遂に辿り着いた漆黒の入り口

新一「め、目暮警部!？」

思わず足を止め、また走り出そうとしたその時

目暮「来るんじゃない!!!」

バンツ!!!バンツ!!!

ウオツカが目暮に向け発砲し目暮警部が倒れた

新一は慌てて駆け寄る

高木「警部!？」

佐藤「しつかりしてください!!!」

新一「目暮警部!？大丈夫ですか!？」

新一が目暮を支えふと目線を上げるとウオツカが倒れていた

新一「え!？」

ウオツカは背中を撃たれて即死状態だった

ウオツカの背後には拳銃の先から煙を出しウオツカに向けて構えていたジンがいた

服部「なんやなんや？仲間割れか!？」

するとこの事態に先程まで本庁の刑事の後ろにいた服部平蔵が皆の前に顔を出した

服部平蔵「ジン？話が違うやろ？」

服部「お：親父!？どないなってるんや？」

皆がこの状況に絶句していた

それもそのはず長年連れ添った相棒ウオツカを撃ったジンに突如現れ意味深な言葉を口にする大阪府警本部長、服部平蔵：

この中で驚きのない者はただ一人、推理が確信に変わった瞬間だった

新一「そうゆう事ですか…服部本部長」

いつもの笑みで語りかける

服部「おい、工藤!! どうゆうことや!？」

西の高校生探偵ならこの場の雰囲気を読めない筈はなくまさか自分の父親がと思う服部の目には涙が滲んでいた

高木「く、工藤君?」

佐藤「……………」

キヤメル「ジヨデイさん、一体…?」

ジヨデイ「しっ!」

ベルモット(……………クールガイ)

今までジンに慕ってきたキャンティとコルンも驚きを隠せなかった

遂に辿り着いた漆黒の入り口（後書き）

新一は親友を目の前にして

これから話し出す事実はあまりにもショックが大きすぎるために
気を使った

苦しい想い（前書き）

新一「服部…お前は向こう行ってる?」

服部「いやや、絶対に動かへんで!」

新一「じゃあ最後までしっかり聞いてるよ?」

そうゆうと東の高校生探偵工藤新一は語り始めた

苦しい想い

新一「2週間前に起きた工場爆破事件で怪しい人影をみた一人の女性が大阪府警を尋ねてきましたよね？」

「それは黒の組織の人間の仕業で不運な事にもアジトがバレってしまった」

「それが警察に行き渡り焦ったあなたは裏を読み女性の情報を得た振りをしてそこへ潜入捜査として刑事を派遣させた」

一同が銃を構える手を少し引き真剣に工藤新一の話を聞こうとする新一「しかしそれは一警察官としてではなく組織の人間としてやったことですよ？服部本部長？」

服部平蔵は握りこぶしを作りグツと握った

佐藤「じゃ、じゃあ大阪府警に駆け込んだ女性も潜入捜査した男性が銃殺されたのも服部君のお父さん…服部本部長の仕業だったの！？」

新一「服部本部長もまあ、仕方がなくやってしまった事だったと思います」

服部「どうゆうことや？」

新一「花畑公園で銃殺された男性は服部本部長がジンに命令を下しスナイパーたちにやらせたつてとこでしょう」

キヤメル「なぜそんなことを！？」

新一「組織に…自分が長年開発し続けてきたプロジェクトに危機が迫り出したから」

「昔はそうではなかったが、最近ではあの方という組織の人物の思考が変わったせいか一般市民を巻き沿いにするようなあと一歩で正体がばれてしまいそんな悪事ばかりをしてきていたために警視庁内で組織の存在が明らかになりつつあった」

「それを危険に感じたあなたは組織のボスであるジエイムズ・ブラックと手を取りこの企画を提案しある人物に提出した」

服部「ある人物って誰や？」

闇の男爵（ナイトバロン）登場

新一「この船内に奇妙な招待状を出し警察関係者に現在捜査中の黒ずくめの男達の匂いを醸し出し警察関係者、及び組織に関係のある人物全員を誘き寄せ皆殺しにしようとしている者…それは……」
下を向きつつむく新一を服部は真っ直ぐ見ている

：

『パチ、パチ、パチ』

新一（（！？））

突然後ろから手叩きをする者が歩み寄る

新一は後ろを振り返るとそこには父、工藤優作と母、工藤有希子と蘭がいた

新一「蘭！！？」

蘭「新一……」

服部「工藤、頑張れ？」

新一は父親を睨む

優作「さすが我が息子…なかなかの推理だったよ？」

新一「父さん…！どうし……」

優作「だがな新一、お前の推理は間違っている」

「それではまだまだ探偵にはなれない」

新一は確信していた推理への間違いを指摘され絶句する

新一「えっ…！？」

優作「私とジエイムズは昔からの知人である、更にベルモットことシャロン・ビンヤードは友人であり有希子の親友でもあるそして初代怪盗キッドの黒羽盗一は有希子の師匠でもあり私の親友だ」

「最後にジンこと黒澤陣も私の友人だ」

ジヨディ「そ…そんな？」

高木「一体どうゆうことですか？」

目暮の腕の傷を抑えながら高木が口にした

新一「ジンが…父さんの友達…！？」

優作「ああ、そうだ」

「私はある件でこの黒の組織のボスの座に座った、もちろん世界的マジシャンが世間から姿を消した八年前に」

「盗一も私の案に賛成し共に行動してくれた」

「友人であるシャロンにも盗一に持ち掛けた案と同じ事を伝え同意してくれた」

「もちろん陣も…いや、陣と共に練った作戦だな？」

とジンに微笑みかけた

ジン（……………）

ジンは目を反らしつつ向く

あの日の真相

新一「ある件って!?!?…一緒に練った作戦って!?!?…俺の体を小さくしたのも…まさか父さんの仕業だったのか!?!?」

佐藤「体を小さくした…?」

皆が訳のわからない顔をしながら目の前にいる親子を見守った

優作「さつき蘭君にも話したんだが、トロピカルランドでお前の体を小さくしたのはジンだがその命令を下したのは私だ」

予想外の事実には啞然とする

新一「どうゆうことだ!?!?ちゃんと説明しろ!?!?」

有希子「新ちゃん、落ち着いて?」

ここへきてようやく有希子も口を開き始めた

有希子「優作は好奇心旺盛で何でも首を突っ込みたくなる新ちゃんを心配してやったことなのよ?」

新一「俺を…心配して?」

有希子「そうよ?高校生探偵工藤新一として世間に名前を知られるようになって恐る犯罪グループもいるけど良いように使われてしまうことだってあるのよ?」

「可愛い息子をそんな危険な目に合わせたくないじゃない?」

新一「だからって!?!?」

新一は両親を強く睨み付けた

優作「まあ、それもあるが…一番は邪魔だったからだ」

服部「なんやて!?!?」

熱血で友達思いな服部が思わず口を挟む

優作「私と盗一と陣とシャロンは八年前からあるプロジェクトを進めてきた」

「それは反黒の組織としてこの組織と組織が進めているプロジェクト

トを潰すこと」

新「潰すこと...?」

銀の揺れる過去

優作「私は八年前に知人であるジエイムズに組織への加入を薦められた」

「その時にこのグループを放っておいてはいけないと思い、入る振りをして完璧に潰ぶすことを考えた」

「だが流石に一人では難しくシャロンと盗一、そして陣にも協力を促し賛成してくれた」

「シャロンは人使いが荒くその上利用することしか考えていなかったボスを下ろすことに同意し盗一は自分を破滅に追い込んだ組織も必要としているパンドラを捜し当て破壊することに同意してくれた」

「そして陣にも陣なりの理由があった…元々好きで組織で活動している訳ではないことを知っていたから容易に賛成してくれて共にプロジェクトを進めてきてくれた」

ジン（……………）

銃を置きその場に座り込んだジンは何処か寂しそうな顔をしていたその様子を皆が見入りついに服部が口を開けた

服部「その…ジンの理由ってなんや？そもそもなにが目的やったんや!？」

優作もジンの様子を伺いながら話そうとすると…後ろの部屋から少女が姿を現した

灰原「シエリーこと宮野志保を脱退させること」

その隣には父親、宮野厚司もいた

ジン（シエリー…）

新一「は…灰原？」

服部「脱退させるやて？」

灰原「ジンには幼馴染みの同い年の女性がいたそうよ」

「元々その女性がこの組織に加入していてジンは止めていた立場だった」

「だけどそこにいるどうしようもないFBI捜査官のボスに殺されたのよ」

新一「殺された…?」

彼女との繋がり

灰原「ええ、ボスの命令で暗殺を試みた彼女は騙され捜査中のボスに捜査官として殺されたわ…その理由は組織に相応しい人物ではなかったから」

「その事件は暗殺を試みた彼女が悪いとなりボスであるジェイムズに罪はないとして公にはなっていないようだけど」

ジョディ「ま…まさかジンは…」

灰原「ええ、それを調べあげたジンはその彼女の敵を取るためと彼女に似ていた私を同じ目に逢わせないように守るべく組織へ入りジェイムズへの復讐を考えた」

「自分の生き甲斐にもなっていた最愛の彼女を失ったジンはジェイムズにも同じ目に遭わせてやりたくジェイムズが一番大切な物を消そうとした」

「それを徹底的に調べた結果、不老不死の薬を作り出そうとしているプロジェクト」「更に七子という娘の存在からこの組織に纏わる物に関係性を抱かしてきたこと」

「そしてお気に入りというベルモット」

「この3つに目をつけたジンは組織ごとジェイムズの元から消し去ってしまおうと考え極秘に個人でその計画を進めてきたわ」

新一「まさかお前今までそれを知ってたのか!？」

灰原「そんな訳ないでしょ?なぜ私が命の危険を晒してまであなたの元にいったのかそれじゃ説明がつかないじゃない」

新一「…ならなんで!？」

…
灰原「その彼女というのは私の母、宮野エレーナの従姉妹の娘だったのよ」

ジン「宮野エレナの従姉妹の娘……!?」
驚きを隠せないジンは思わず立ち上がり宮野厚司と灰原に近寄った

哀する者への捧げ

宮野「すまない…私がつもつと言い聞かせていけば…こんな辛い目に
会わなくて済んだのにな？」

と泣きながらジンに言う

ジンの頭の中では何故彼女が組織にいたのか、何故その彼女と宮野
志保は似ていたのかという理由が明らかになると共に宮野厚司がこ
んなに彼女を思い、自分を思ってくれていたこと、なのに自分はジ
エイムズの命令だったためとはいえ宮野明美を暗殺してしまったこ
とを悔やんでいた

ジン「いや、彼女は好きで組織にいたんだ…組織で仕事をしている
時の彼女は必要とされていると嬉しそうに言っていた…なのに…俺
こそすまない…」

宮野「明美も好きで組織にいて自分で選択して死を選んだんだ…こ
の志保を助けるために」

灰原「え？」

ジンは宮野厚司の目を真つ直ぐに見た

宮野「ジエイムズが明美を暗殺しようとしていることは明美自身も
知っていた」

「承知の上である場所にいったんだ…、明美の瞳には君が悪い人と
いう風には映っていないかったようだ、それどころか君を信じてあの
道を選んだんだ」

「赤井君にも頼んだようだが…」

「それに君も理由なく明美を殺さなかっただろう？志保のためにや
ってくれたことだな？」

そうゆうとジンは崩れ落ち泣いていた

その様子を見た一同は心に大きな穴を開けて苦しんだ

そう、こうゆう事情があったジンは宮野明美を暗殺し宮野志保を守
つたのだ

下された使命

幼い頃からシエリーを知るジンにとって唯一の存在の姉が暗殺されてしまったら組織に反抗することは分かっていた

そしてA P T X “ 4 8 6 9 ” をポケットに入れているということを確認しあの日牢屋に閉じ込めたのだった

このA P T X “ 4 8 6 9 ” という薬は温めずに体内に入れると人は死んでしまうが温めてから体内へ吸収させると幼児化となる薬だったのだ

それを知っているジンはあの日牢屋に暖風を送り込み更にポケットでシエリーが知らずと温めている“A P T X 4 8 6 9 ” を用意し薬の研究に没頭していたシエリーを閉じ込めたのだ

そして死のうと薬を飲んだシエリーの体は幼児化となり脱出しその後シエリーがいなくなったのを確認してからウォッカに牢屋を開けさせたのだった

灰原（お姉ちゃん… ジン…）

ジンを見上げ何と言ったらしいのか分からない顔をしていた

新一「俺に飲ませた時も温めていたんだな？」

優作「そうだ」

あの日、偶然トロピカルランドで出会った新一とジンとウォッカと思われていたが新一が蘭とのデートでトロピカルランドに行くことを知っていた優作がジンに頼んだのだった

いつも通りにジェイムズが指揮をとり拳銃密輸の件を金で買い占めようと取引している現場に新一を誘き出すためにわざと新一と同じジェットコースターに乗り怪しい雰囲気醸し出せた

偶然にもジェットコースターで殺人事件が起きてしまい不覚にも顔から容姿まで新一に覚えさせる事ができた

優作はジンとウォッカの行動に興味を持たなく危険な行動をしない

様ならこんなことをするつもりはなかったのだがその願いは儚く散り興味津々とジンとウォツカについていった新一は優作の思惑通りにされてしまったのだった

だがそれは好奇心旺盛な息子でも幼児化となれば今よりは多少安全な世界で暮らせるだろうという愛する息子へ父親の最大の愛情だった

愛しすぎた結末

けれども新一はそんな父親と母親を許すことはなかった

新一「かといって殺人を何度も繰り返してることにはかわりねえ…」

「母さんも母さんだ！なんで…なんでだよ!？」

優作「もちろん投降するつもりだ」

「自分の罪は自分で償うべきだからな」

有希子「私は…新ちゃんのためにもみんなのためにも優作が犠牲になつたとしてもこのままじゃいけないと思つたから…優作の意見を尊重して…」

とその瞬間…、

バンツ！パシュツ！カキンツ…

今までのやり取りを黙って見ていたキャンティは信頼していたジンを見損ない消失した悲観と行き場を失つたどうしようもない混乱から所持していたライフルでジンを狙い撃つた

優作「陣!！」

ジヨデイ「伏せて!!！」

だが不運な事にもここには神出鬼没な彼がいた

新一「快斗!！」

キヤメル「!？」

高木「か、怪盗キッド!？」

キャンティの弾を上手く交わしその悠々自適な姿で皆の元へ降り立った

キッド「遅くなつてわりいな？名探偵!」

新一「サンキュー快斗?」

狙つた獲物は逃がさないキャンティは邪魔をされ更に怒り狂いもう一度ジンへと構えるが

バンツ！！！

その銃声は皆がいる空間に鳴り響いた

今まで撃って撃たれてきた銃声の音とは違いどこか寂しそうな辛そうなの……

だけど精一杯の勇気が込められたような音だった

愛しすぎた結末 Last

その弾はキャンティの心臓を貫き即死とさせた
優作「キャンティ…？」

皆が弾の飛んできたほうを見るとそこには

新一「光彦!？」

そうあの三人が立っていた

快斗と盗一が和解し親子に戻りそれを見届けた三人は快斗と盗一の
後に続き二階へ降りた

今までの話を聞いていた三人はキャンティがジンを狙い殺害しよう
としていることに気づきそれを阻止しようと狙い撃ったのだ

光彦「あ…あ…」

そしてこの騒ぎを嗅ぎ付けた警察関係者の招待客がこの場に集まっ
てきた

蘭を捜している園子と和葉、酔いが覚めた小五郎と皆を心配してい
る阿笠博士に警視庁の中森警部、大阪府警の大滝吾朗が駆け寄りこ
の状況に足を止めた

園子「が、がきんちよ?」

博士「光彦君!？」

中森「か…怪盗キッド!？」

新一「三人共銃を置け!!!」

三人を捜査に加えさせたのを初めて後悔し自分へも怒鳴る新一…

それをみた灰原も絶句していた

新一に言われた光彦はくずれ落ち銃を離した

だが友達思いで正義感が強く年齢とは反比例の知識が豊富な残りの
二人は自暴自棄に銃を撃った

バンッ!!!バンッ!!!

新一「おい!!?」

絶句しながらもこの数ヶ月間毎日のように三人と関わっていたために元太と歩美の考えることくらい予想がついていた一番近くにいた灰原は二人が真っ直ぐに銃を構えて撃った瞬間覆い被さるようにして弾を止めた

愛しすぎた結末 THE END

拳銃の使い方に慣れていないどころか使ったことがないためと光彦が一人だけ犯罪者になってしまふという危機感から形振り構わず思うがままに銃を構え撃ち放った二人

灰原のおかげで幸いにも銃口の先にいた工藤優作とジンは無傷だったが止めに入った灰原本人の左腕に元太の撃った弾が右の脇腹に歩美の撃った弾が当たってしまった

新一「灰原ー！？」

博士「哀くん！？」

蘭「哀ちゃん！？」

服部「あかん！！」

ジン「シエ…シエリー！？」

ベルモット「そんな…！？」

キッド「…！？」

灰原はぐつたりとその場へ倒れ込んだ

優作「おい！しっかりしろ！？」

宮野「し…志保…！！？」

有希子「救急車…優作、救急車…！！」

新一は駆け寄った灰原を抱えながら自分を憎み悔しそうに歯を食い縛っていた

新一（くそっ…！！）

（ぜってえ、ぜってえ助けてやるからな！？）

とそこへ赤井秀一とCIA諜報員の本堂英海が現れ駆け寄った

赤井「…！？」

英海「大丈夫！？しっかりして？」

「今運んであげるわ」

赤井秀一が密かに協力をしてもらっていた本堂英海

今回の事件が起こった時から全て二人で協力しあってきた

赤井がこの船に乗る際にも英海は陸で情報を入力しては赤井へと送りこの一大事に赤井は陸にいる英海に応援を要請したのだった

赤井は灰原を抱き上げ船出口へと向かい英海が呼んだ救護班の船へと乗り込み陸へ向かう

赤井（絶対に助けてやるからな？）

（…そうゆう約束だったな？）

霞む目をなんとか開けて抱いている者の姿を確認した

灰原（赤井…秀一…ライ… お姉ちゃん…）

新一（赤井さん…頼んだぜ？）

（灰原…本当にすまねえ…）

新一の様子を見た蘭は灰原を心配するとともに深く傷ついていた

親子の悲劇

優作「ジエームズやウォッカやキャンティはもう……」

と首を横に振る優作

有希子「もう少し早く来てくれていれば……」

優作「死人は出したくなかったが……」

高木「警部も乗りましょう？」

目暮「いや、私は大丈夫だ。それに今は哀君を優先してあげなければいかな？」

佐藤「警部……じゃあここで安静にしてください」

そうゆうと目暮を寝かして傷口を縛った

ようやく落ち着いてきた元太と光彦と歩美が口を開けた

元太「ご……ごめんなさい……」

光彦「高木刑事、僕を捕まえて下さい……」

歩美「哀ちゃん！？哀ちゃん……」

と泣きながらそれぞれの思いを口にする三人

佐藤「とりあえず三人の処分は事が落ち着いてから決めるからそれまでは大人しくして下さい！」

そうゆうと三人は黙り込みその場に座った

服部「さてと、ここからは家の番やな？親父？」

と服部平蔵に問いかけた

和葉「どうゆことや？平次？」

そこに和葉の元へと現れた父親こと遠山銀司郎が和葉に言い聞かせる
遠山「お前は向こうにいつてなさい」

和葉「え！？なんで？なんでこないなとこに平次のお父ちゃんもう

ちのお父ちゃんもおるん!？」

服部「おい、和葉よう聞け？」

「こいつとお前んちの親父はグルや！」

和葉「はあ？平次なに言つとん？」

服部の目には再び涙が浮かび上がった

服部「俺んちの親父とお前んちの親父は、

新一「それはちげーぜ服部？」

新一が服部に口を挟む

…凶悪犯罪組織の…」

親子の情熱

服部「なんやて？」

新一「和葉ちゃんのお父さんは何も知らずにおめーのお父さんについていた、だからこの事実には心底驚いているだろうぜ？」

服部は遠山の顔を見ると凶星だと言わんばかりの顔をしていた

新一「そして確かにおめーのお父さんは黒の組織の一員だ」

「だが、それは仕方がなかったんだ……」

服部「おい、工藤！お前どないしたんや！？」

「殺人はどないな理由があるうと絶対にやらかしたらあかんことやつて言うつとつたやないか！？」

新一「ああ、そうだけ？殺人はどんな理由があるうと絶対にしちやならねえ…… だけど俺のお父と一緒に自分の最愛の息子をなんとしても助けたかった…… 例え、自分が犠牲になったとしても……」

蘭「新一？どうゆうこと！？」

和葉「どうゆうことや？」

服部「工藤？どうゆうことや？」

新一は服部平蔵を見ると服部平蔵は新一に向かって頷いた

新一「お前の親父さんは五年前に些細な事でジェイムズ・ブラックと知り合った」

「頭の良い息子、服部平次を是非将来うちに入れたいとのことだったようだ、お前の親父さんはつきりFBI捜査官に任命されたのかと思えば二つ返事でジェイムズ・ブラックに返したんだ」

「だがそれは組織への加入だと告げられもちろんお前の親父さんは断った、だけど一度頷いちゃったからどうにも撤回できなくそれで自分が入る代わりに息子は勸弁してくれてことになったみてえだ」

服部「なんやて…!？」

家族への愛情

「ジエイムズ・ブラックからしてみれば元々お前の親父さんが欲しかったみてえだからわざとカマかけて落としたんだろうけどな？」

服部「ほんまか？親父？」

服部平蔵「…ああ」

服部「なんでや？なんで入ったんや！？」

服部平蔵「……」

あまりのシヨツクの大きさに服部平蔵は言葉にできないほどの痛みを抱えてただ立ち尽くしていた

そんな服部平蔵に代わり優作が口を開けた

優作「当時まだ小学校六年生だった君を殺されるのはもちろん、妻や息子に嫌な思いをさせられるのはとても考えられないだろう？」

「そしてそんなジエイムズ・ブラックと知り合ってしまったということが世の警察官達にバレでもしたら即クビだ、まだ育ち盛りの君を見捨てる訳にはいかなく仕方なく組織にはいったんだよ？」

「せめてもの償いで静香さんとは離婚し、君を育てるために仕事に専念したんだ…、静香さんも分かってくれたみたいだ」

「君のお父さんはジエイムズに今回の事件が何事もバレることなく使命を果たせたら退散していい、また私もそれ以上は首を突っ込まないと言われ今日まで我慢してきたんだ…」

「これが終われば全てが終り楽になると…な」

服部は涙を流しながら言う

服部「そんな…ただの言い訳や…!!」

新一「なあ、服部？おめーがもし同じ立場だったらどうする？」

服部「俺が…同じ立場に…遭遇してもうたら…ヒック…ヒック…」

和葉「平次…」

新一「おめーも同じことをしただろ？俺も多分…お前の親父さんと同じだ」

蘭「新一……」

服部「工藤……」

優作（新一……）

有希子（新ちゃん……）

新一「だから例え世間が許してくれなくてもお前だけは許してやれよ？ いや……むしろ家族を助けてくれたことに感謝しなきゃならねえな？」

八年の想いの果て…

服部平蔵「いや…あかん使命を果たす前にバレてもうた」

和葉「せやかてそのジエイムズつて人は亡くなってしもたんやる？」

遠山「ボスは亡くなつてもまだ幹部や他の構成員がいるんやる、なにされるかわからへんな…」

和葉「そんな…!？」

とそこに微笑む優作が緩和した

優作「大丈夫です、心配いりません」

「私はこの今日という日に備えるために八年もの時間を費やしてきたんですよ？」

「この船に乗る前から既に他の構成員たちは処分しています、黒の組織の人間はここにいるジンとウオツカ、ベルモットにキャンティとコルン、そして盗一と服部さん、私で最後です」

和葉「なんや〜よかつたな、平次？」

平次「ああ…」

そうゆうと父親のほうを見る服部

その視線を受けて服部平蔵も息子を見る

服部平蔵「平次、すまなかつたな？」

平次「アホ、謝んなや、ありがとな親父…」

その二人を見て心配していた新一はこの親子なら大丈夫だと微笑んだ

ドーンッ!!ドーンッ!!!!

といきなり凄まじい音と共に揺れる船

八年の想いの果て…（後書き）

そうここからが新一に降り掛かる本題だった

更なる危機を背負いどう立ち向かうことができるだろうか？

最後の試練（前書き）

誰もが予想せずこれで終わったと思った瞬間だった…

港につけばまた1から工藤新一としてやり直そうと思っていた…

いきなり優作から告げられた真実に多少パニックになっている蘭だが新一を信じて全て受け入れてあげようと想う時だった…

最後の試練

小五郎「な、なんだ!？」

有希子「キヤー!？」

服部「工藤!！」

服部の呼び掛けで一同が窓の外を見た

すると反対側の棟の一部、六階の音楽鑑賞室の辺りが燃えていた

新一「爆発!？」

優作「そんなはずは…?」

蘭「どうなってるんですか!？」

服部平蔵「ジエイムズの命令で六階と三階と地下室に爆弾が仕掛け
てあつたんだが…」

ジヨデイ「なぜ爆発したの…!？」

キヤメル「ジヨデイさん…」

優作「ジエイムズには爆弾を爆発させるように見せかけるために設
置していたんだがさきほど爆弾解除したはずなのに…なぜだ!？」

ジン「ん？」

と辺りを見回すジン

それに気付いたベルモットも辺りを見回す

ジン（!）

ベルモット（!）

ジン「コロン…?」

ベルモット「コロンがないわ…!」

新一（!?!）

優作（!?!）

服部（!?!）

キッド（!?!）

「まさか…」

階段を駆け上がる四人

新一「父さん！爆弾はどこに設置したんだ！？」

優作「今爆発した六階の音楽鑑賞室と三階のエレベーター前の電話

ボックスと地下室の第三倉庫の机の下に仕掛けた」

服部「よっしゃ俺は地下室に行くで？」

キッド「じゃあ俺も地下室に行く」

新一「頼んだぜ？」

「俺は六階の様子をみてるから父さんは三階へ行って」

優作「わかった！新一、頼んだぞ？」

新一「任せとけ！」

と言うとそれぞれ散らばった

漆黒へ光を照らす天使

二階では不安と心配の色が隠せずにいた

服部平蔵と黒羽盗一は設備のチェックで二階上へ行きFBI捜査官のジョディとキャメルは五階と四階の客室へ走り避難を促しに行く高木刑事と佐藤刑事は目暮をその場に残し二階と一階の客室へ避難を促しに走る

遠山と中森は船内のスタッフに呼び掛け協力と避難を促しに行った博士と小五郎は宮野厚司の指示を受けて共に救命ボートなどの救命器具等の手配へ回った

二階に残ったのは蘭と園子と和葉と有希子と目暮警部と元太と光彦と歩美とベルモットとジンの十人

それにウォツカとキャンティとジェイムズの三人

蘭（新一…絶対、皆を守って！お願い！）

和葉「平次…」

有希子（優作…頑張って…！）

沈黙に包まれたこの空間に一言飛び交った

ベルモット「まさかジンが善人だったとはね？」

ジンを見て苦笑うベルモット

ジン「最後まで分からない奴だったが生憎にも味方だったとは…世

話の焼けた女だぜ」

ベルモット「あら、それはそっちでしょ？」

ジン「フツ…残念ながら俺は善人なんかじゃねえよ」

「強いて言うなら偽善者…かな？」

と腰を下ろしながら不適な笑みを浮かべて言う

ベルモット「……」

無言になるベルモットはジンのほうに歩み寄る

ベルモット「…まあ、いいんじゃない？どっちにしろ守ったんだか

ら…人の命も、思い出も…」

ジン「……………」

下を向き真面目な顔になるジン

ベルモット（人の命を救うのに理由なんていらナイ…）

（そつよね？…Angel?）

蘭のほうを向き微笑むベルモット

探偵史上最悪の危機

地下室

服部「暗くてよう見えへんな？キッド、あつたか？」

キッド「なんかここに…」

「あつたあつた！」

二人は設置された爆弾を見つけ解除の確認をする

服部「あん？どないなつとんや？」

キッド「地下室の爆弾は解除されてるな」

三階

エレベーター前の電話ボックスに到着した優作は爆弾の解除の確認をする

優作「解除されてるな」

と危機管理室へ連絡を入れる

優作「こちら工藤優作…爆弾解除の確認は全てとれていきますか？」

黒羽盗一が応答した

盗一「はい全てとれていきます…六階音楽鑑賞室も全て…」

優作（！？）

六階

新一「くそっ…」

そう言いながらムンムンとする六階の通路を走り火元となり一番燃えている場所に辿り着く

新一（ここが一番燃えてんならここに爆破装置がある筈だな…）

（この程度の爆破なら爆発装置までは飛び散らねえから痕跡が…）

（！？）

と頭の中の線を切られるという信じ難い事実遭遇した

新一「装置が…ない？ってことはまさか…」

とその目に映ったのは自家製爆弾だった

新一は別所を探すと鑑賞室のロッカーの中から組織が仕掛けたと思われる爆弾が見つかった

新一「そ…そんな…ってことは…！？」

顔色が真っ青になる新一…

それもそのはず先程爆発したと思われる自家製爆弾は近くに酒樽の破片が落ちていたことから酒樽の中に隠されていたと推測できた
しかもその酒樽は今、二階から六階に来る時に通った階段からだけでも二度も目にしたのであった

一つ目は三階のフロントの前、二つ目は四階と五階の階段の踊り場
ナイトバロンパーティーでは主にお酒で盛り上がるパーティーだったためにインテリアとしても酒樽を置いておくことは不自然なことではなかったせいに新一も勿論、流石に確認などしていなかった

とそこへ優作が駆けつけた

黒の中の闇の仕業

優作「新一!？」

新一「父さん、厄介な事になってるぜ？」

優作「ああ、確認済みだ！」

「とりあえずいつ爆発してもおかしくはない状況だ、この規模からすると最低でも30箇所には仕掛けているだろう…こうなるとコルンの発見よりもまず無関係の人間の救出と関係者の救出の順に避難させることが優先だ!！」

新一「ああ、そうだな」

と走り出す二人…

そう、行き場を無くし目の前で最愛の彼女キャンティを射殺された意外にも組織の中ではかなり用心深いコルンは元々何かのためにと仕掛けて置いた爆弾を爆破したのだ

そうなる和我を忘れたコルンがいつ全部の爆弾を爆破してもおかしくないとされ新一と優作に緊張が走る中、アナウンスが流れた

ピンポンパンポーン

『この度は多大なご迷惑とご心配をおかけし誠に申し訳ございません。皆様の人命を一番に考えたく救命器具等を身につけ一刻も早くこの船内から脱出していただきたくアナウンスを入れさせて頂いた次第です。只今海上保安庁及び救命ボートがこちらに到着いたしました。優先順位をお守り頂き脱出していただくようお願いいたします。』

ピンポンパンポーン

蘭「新一!！」

二階へ戻った新一に泣きつく蘭

有希子「優作、どうなってるのよ!？」

新一「蘭やみんなは下に行つてここから出る！母さんも早く…！！」
有希子「新ちゃんは何？優作は！？」

優作「私には責任がある、このパーティーの主催者としてもなんとかしなければならぬ」

「新一はもういいから、早くみんなと一緒に出なさい！」
と新一を脱出へと促すが

切ない決意

新一「そうゆう訳に行くかよ…?」

「一人だけで格好つけんじやねえよ?」

園子「ちょっと!新一君?蘭の身にもなつて…」

新一「蘭、ぜってえ無事に戻ってくるからもう少し待っていてくれるか?」

「まだおめーに言つてねえことがあるんだ、それなのに居なくなつたりしねえからよ?」

下を向く蘭は最後にもう一度だけ新一を信じようと決め顔をあげ照れ臭そうに言う

蘭「いつもすぐ居なくなるじゃない?」

その言葉に自信を持った新一は笑顔で返す

新一「今回はちげーよ?」

と微笑む二人は笑顔で互いを見届けた

優作「有希子、皆を頼んだぞ?」

新一と優作は爆発物の発見と処理をしに酒樽へと急ぐ

それを見た元太と光彦と歩美が立ち上がり心で何かを決めたように突然走り出した

目暮「お、おい!?!?」

その横にいた目暮は動けずただ声を出すことが精一杯だった

ジン(……………)

ドーンッドーンッ

また爆発音が鳴り響いた

新一「くそっ!今度はどこだ!?!?」

と二階のエレベーター前までくると階段から服部とキッドが上がっ

てきた

服部「おい！工藤！！」

と呼び止められた新一は走りながら事を説明した
キッド「よし、俺は六階と五階を調べてくるぜ？」

服部「ほな俺は四階と三階な？」

新一「お前らは戻れ！」

キッド「なんでだよ？」

服部「ははーん、一人だけで格好つけよ思っとるな？」

新一「そんなんじゃないよ」

服部「お前は東の高校生探偵で俺は西の高校生探偵やで？」

キッド「んでもって俺は神出鬼没な月下の奇術師、怪盗キッド」

「お前と俺らに何の変わりもない、同じだろ？」

服部「そうゆうこっちゃ！ほな解ったら行くで？」

そうゆうとまた散らばった

想う気持ちがもたらす災難

六階と五階はキッドが四階と三階は服部が地下室と一階は既に服部平蔵と黒羽盗一が搜索にあたっているため新一と優作は二階を搜索することにした

ドーンッドーンッ

また激しく爆発音が鳴り響いた

一階船出口

新一と優作を信じてそこには蘭と園子と和葉と有希子がいた
和葉「平次大丈夫やるか？」

有希子「大丈夫よ！優作を信じてあげて？」

そして出口で誘導の手伝いをしている宮野厚司と博士と小五郎の姿もあつた

小五郎「早く乗ってください！助かりたかつたら早く乗って…アワ
ワワワワッ！」

人混みに押し潰される小五郎

園子「大丈夫かな…？」

いつものドジッぷりに呆れながら心配する六人

蘭（新一…）

とやはり心配になる蘭は爆発している船の上を見上げた

蘭（！？）

「あれ？あれって…」

園子「蘭、早く乗って！」

自分達の順番がきた園子はポケッとしている蘭に乗船を促す

蘭「う、うん…」

と見間違いかともいもう一度上を見上げた蘭は驚いた

蘭（！？）

（うそ…？なんであんなとこに…！？）

有希子「蘭ちゃん？早く！」

船上員「では出発します」

と有希子が促したのも無意味に蘭は船には乗ろうとしないどころかなぜかナイトバロン号に戻っていった

和葉「ちよつまち…蘭ちゃん！？」

園子「らーん！？」

有希子「蘭ちゃん？どこ行くの！？」

とその騒ぎを見た博士と小五郎も蘭を追いかけようとするが

博士「蘭君！？」

小五郎「おい、蘭！？」

あまりの人の多さに蘭はすぐ見えなくなってしまい追いかけるのも不可能な状態だった

蘭は一目散に燃えている六階の音楽鑑賞室へ走って行く

なぜなら蘭の目には自分達を責めている三人の姿が映ったのだ

そう元太と光彦と歩美は自分達を責め最後にどうしても役に立ちたかったのだ

新一と優作のただ事ではない顔を見た三人も乗客を助けようと必死だったのだ

想う気持ちの大切さ

蘭（元太君：光彦君：歩美ちゃん…）

六階

先程より更に増す炎は六階の三分の二を焼き尽くしていた

蘭（熱い…）

「元太くん？光彦くん？歩美ちゃん？」

返事はなくムンムンと燃えている

その時その三人はというと蘭のいる音楽鑑賞室付近とは反対側のまだ被害のない映画鑑賞室にいた

元太「おい、ここも誰もいねーな？」

光彦「ええ、六階には誰もいませんね」

歩美「次は五階の確認よ」

そついうと三人は階段で五階に降りていった

五階

五階に降り立った三人は一室一室の部屋のドアをノックし人がいないか確認をする

光彦「鍵がかかっていますので開けて確認することはできませんね

…」

歩美「こんなに騒ぎになってるんだから部屋に居れば気づくよね？」

元太「じゃあ五階にも誰もいねーってことだな？」

光彦「ええ次は四階ですね」

三人は階段に向かい走ると

ダンッダンッダンッ！！ダンッダンッ！！

扉を叩くような音がした

歩美「誰かいるよ！？」

元太「どっから聞こえた!？」

光彦はエレベーターに耳を近づけた
ダンッダンッダンッ!!

光彦「エレベーターの中から音がします!」

歩美「ええ!？」

元太「おい!大丈夫かー?」

ダンッダンッ!

三人は扉を開けようと力づくで頑張った

だがもちろん爆発の振動でボタンは作動せず子供三人の力では到底開けることは不可能だった

その騒ぎを四階の階段付近で酒樽捜しをしていた服部が聞きつけ五階に駆けつけた

服部「お前ら何しとるんや!？」

光彦「あ、服部さん!エレベーターの中に人が閉じ込められています」

服部「なんやて!？」

服部も近くにあった木の枝でこじ開けようとするが開かなかった

募り果てた末に…

服部「おい、ここ五階やる?」

「おい! キッド!?!」

と六階と五階を担当しているキッドに応援をと呼び掛けるが応答はなかった

服部「くっそ…」

どうにか開けようと精一杯頑張る服部と三人

その頃、地下室と一階では爆発物の撤去が行われていた

服部平蔵「地下室は全部解いたで?」

新一「あと半分くらいです」

この時点で回収した爆弾は六個もあった

二階では新一と優作が全ての酒樽を見つけ撤去に成功していた

新一「よし、あとは…」

優作「地下室も全て解き、残りは一階で半分だそうだ」

新一「なら俺は六階と五階のキッドの所に回る」

優作「わかった、では私は四階と三階に行く」

六階

そこでは蘭がまだあの三人を捜していた

蘭「ゴホッゴホッ!」

「みんな…どこに…」

煙で咳き込む蘭はだんだんと視界が見えなくなりその場に倒れてしまった

バサッ…

蘭(みんな… 新一…)

とそこに六階の爆弾解除が全て終わった白の盗賊が現れた

燃え盛る炎の中で蘭の姿が見えたキッドは

キッド「おい!?!」

「くそっ…何してんだ!?!」

と炎の中に入り込み助けようとするキッド

ドーンッ……

その瞬間また凄まじい爆発音と共に大きく揺れる船

船は横に大きく傾き船内にいる者達は皆転がる…

六階の窓付近にいた蘭はそのままガラスのない窓に転がっていった

キッド「お、おい!?!」

と焦るキッドはなんとか立ち上がりポケットからあるものを取り出

し蘭に向けて放った

パシユッ

一つの想い a bond

五階

先程の振動と皆のおかげで運良くエレベーターの扉が少し開いた服部はさらに力づくで開けた

中には一人の老婆がいた

歩美「おばあちゃん、大丈夫!？」

老婆「ありがとう…大丈夫だよ」

服部は老婆を抱え三人を連れて一階の船出口へと走った

その途中の三階の階段で新一と会った

新一「お…おめーら何やってんだ!？」

服部「この三人がエレベーターの中で閉じ込められてる婆さん助けてくれたんや」

老婆「ありがとう…」

光彦「いえいえ…」

と少し照れながら喜ぶ三人の心境を読んだ新一は怒ることはできなかった

新一「早く、船乗場へ逃げ!」

「服部、キッドは!？」

服部「まだ中におるんとちゃうか?」

それを聞いた新一は六階へと急ぐ

ドーンッドーンッ

またここで爆発がした

今の爆発でもうほとんど船の形はなく破壊と化していた

地下室と一階の爆発物の撤去が終わった服部平蔵と黒羽盗一は優作の指示で船出口へ降り立ったが快斗と服部がまだ中にいると聞き二人の親子は息子を心配し、ままならない様子でその場に残り健闘を

祈った

そこには老婆以外の全ての乗客を誘導し終えた高木刑事と佐藤刑事、ジヨディとキャメル、遠山と中森に担がれ救出された目暮がいた

と、そこへ現場には行かなく陸で待機していた白鳥刑事がたくさん
の海上保安庁を引き連れて現れた

白鳥「警部ー？」

目暮「白鳥君！」

白鳥「遅くなりました、さあ早く警部達も乗ってください」

佐藤「白鳥君、先に警部をお願い」

白鳥「佐藤さん達は…？」

佐藤「…まだ中に探偵団のみんなや工藤君たちがいるわ…」

「この状況では助けに行く事はできないけど…でも必ずみんな無事に帰ってくる」

「だから、私達はここで待つわ」

白鳥「…わかりました」

そついうと颯爽と警部を陸に連れていく

一つの想い affection

白鳥刑事が引き連れてきてくれたおかげでいつぺんに取り残された乗客が乗ることができナイトバロン号には船出口で見守る服部平蔵と黒羽盗一、蘭の失踪にどうすることもできない博士と小五郎と宮野厚司、ジヨデイとキャメル、高木刑事と佐藤刑事、遠山銀司郎と中森銀三が固唾を飲み皆の安否を祈った

小五郎「らーん!？」

高木「毛利さん、危険です！」

先程から何度も燃え盛る船の中に飛び込もうとする小五郎は皆に取り押さえられている

小五郎「中には俺の娘の蘭がいるんだ！離せ！！」

ジヨデイ「この中に飛び込んだらお仕舞いよ！？毛利さんなら大丈夫！必ず出てくるわ！！」

「あなたが今ここで毛利さんを助けるべく中に入れば、出てこられなくなるのはあなたのほうよ！？それに…あなたが行けば毛利さんの気持ちを踏みにじる事になるのよ!？」

小五郎「……くっそ！」

(英理… すまねえ…)

とその場にしゃがみ込み悔し泣きをする小五郎

消防隊が消火活動をするが一向に落ち着かない炎はだんだんと船全体を包み込み始めた

何も知らない新一はキッドを捜しに五階の階段を登った時

ドーンッ…

新一「おわー！」

と転がりすぐに立ち上がる新一はふと窓側へ目をやった

新一（！！？…蘭！？）

爆発で傾いた建物の六階から蘭が転がり落ちてきたのだ

新一「らん！！？」

（くそっ！何であいつあんなところに…）

と九死に一生の状態を迎えた新一は悔しがり泣き叫んだ

その瞬間パシュツという音と共に転がり落ちた蘭を幕が包み込み蘭は空中で固定された

新一（！？）

「か…快斗！？」

そこには六階の窓枠から必死に蘭を助け出したキッドの姿があった

新一「蘭…」

「快斗…サンキュー…」

とホツとするのも束の間、一気に建物が崩れ始めた

最後の思い

新一（！？）

「らん！？快斗！」

六階の建物はみるみる崩れ落ち蘭を引つ張るキッドの足場はないに等しい状態だった

キッド「おわわわ」

と言いながらも流石白の戦士

蘭を引つ張る紐を固定しいつもの如く空中に飛び蘭を抱えて網を切りハングライダーをセットし空中に舞い降りた

それと同時に老婆を抱いた服部と元太と光彦と歩美もいきなり飛び出した探偵団の三人が心配で後を追いかけていたジンと途中から合流しジンに保護と誘導をされながら一階の船出口へと辿り着いた服部平蔵「平次！！」

大滝「平ちゃん！」

今まで大阪府警本部に連絡を入れていた大滝も無事に服部を迎える事ができホッとしている様子だった

それを見た新一も自分も早く船出口へと急ごうと進路を変えた瞬間ドドドドドドッ！！！！

六階が崩れ落ちた反動で五階も崩れ始めた

新一「くそっ…！？」

まともに歩く事ができない中手探りで障害物を掻き分けて脱出へと向かう

と、その時…

新一（ドクンッ！！）

「ぐあっ…!？」

また張り裂けるような痛みが胸を始め体全体を齧り始めた

新一（ドクンツッ!!ドクンツッ!!）（）

（まさか…こんな時に!？）

身動きが取れなくなった新一は五階が崩れ落ちて行くのを目の当たりにされもうだめだと思った

新一（ドクンツッ!!）（）

（蘭… わりいな…?）

とその瞬間一気に五階から三階が崩れ落ちた

ガラガラガラ…ズドドドド…ガシャンツ…

最後の願い

窓際にいた新一は丸く踞っている体のまま外へと投げ出され海面へと向かう

蘭を抱えて地上に降り立っていたキッドはその光景に新一だと気づくキッド「…おい!？」

とその時三階から自ずと海面に飛び出した一人の男性の姿が目に入った

キッド(!? あれは…)

そう、三階が崩れ始め進路を塞がれ行き場を失った優作は自ら海へと飛び込んだのだった

この騒ぎにマスメディアもへりで取材にきており今の場面は当然、全国で流れていた

陸へと向かう有希子と園子と和葉が乗っている船のラジオから信じ難い事実が言い述べられた

『六階が崩れ落ちました…さあ怪盗キッドと女性の命はどうなるの…あ!なんと只今キッドが空中に飛び込み女性を抱えハングレイドーを現し空中へと舞い降りました…流石世間を賑わす怪盗キッド、どうやら二人とも無事な様です…』

和葉「蘭ちゃんだったやるか?」

園子「でも助かったみたいだし…蘭だとしてもよかった…」

有希子「そうね」

三人に少し笑顔が戻った

だが…

『六階から五階が一気に崩れ落ち始めました!船内に残る人々の安否はどうなのでしょう?さきほど入りました情報によりますと…』

船内で取り残されているのは三人、何れも世界屈指の推理小説家、
工藤優作さんとその息子の高校生探偵、工藤新一さんに女性関係者
との情報です』

この情報にいてもたってもいられなくなる三人

園子「蘭…」

和葉「大丈夫やるか…?」

シャーロン
有希子

『おっと!?五階から誰か海に落ちたようです…あっ!?あれは工
藤優作さんでしょうか!?五階から落ちた者に続くように三階から
海に飛び込みました!!救命器具もなにもつけていないようですが
…大丈夫でしょうか!?!』

有希子「優作!?新ちゃん…!?!」

和葉「神様、お願いや…皆を助けて?」

と顔を真っ青にしながら無事を祈る三人

最後の苦しみ

その現場にいる者たちも無事を祈り助けようと必死だった

キッド（くそっ！こんな肝心な時に救命器具が燃えて使い物にならねえ！！）

蘭を抱えながらどうにか新一と優作を助けようと必死な快斗は役に立つ事ができなく腹立てる

服部「工藤ー！？」

新一が五階から落ちたという情報を聞き付けた服部が今までにないくらいの顔で海に向かい叫ぶ

服部「ちきしょう！今待つとけ？」

と服を脱ぎ海に飛び込もうとしたが

高木「は、服部君！？」

服部平蔵「平次やめんか！！」

と父親に怒鳴られ思わず振り向く服部

服部平蔵「工藤さん親子なら大丈夫や！お前は信じて大人しく待つとけ！！」

と皆が救命器具を海に向けて放つ中で服部平蔵は息子に言い聞かせたどうにも納得のいかなそうな顔をしている服部の目の前に一人の女性が海に飛び込んだ

ジヨデイ「べ、ベルモット！??」

そう海に飛び込んだのは救命器具を体にたくさんつけ救出に向かったベルモットことシャロン・ビンヤードだ

ベルモット（Cool guy… 工藤優作…）

（Angel… 有希子、待っててね？）

水深50メートル付近で新一が着ていた服を見つけたベルモットは近寄る

ベルモット（！！）

そこには体を丸くした江戸川コナンがいた
すると横から工藤優作が現れベルモットに礼を言いながらコナンこ
と新一の救出に協力し合いどうにか水面に顔を出すことができた

優作「ぶはっ！」

ベルモット「ハアハアハア……」

コナン「……………」

コナンは意識を失っていた

服部「工藤！…コナン？」

ジン「切れるのが随分早かったな……」

と服部にボソツというジン

優作「この子の応急措置をお願いします」

コナンが先に船に乗り込みジョディとキャメルが応急措置に対応した

叶った願い…そして

その様子を見ながら服部も応急措置を手伝う

優作とベルモットもなんとか船に乗り込んだ

服部平蔵「シャロン…ありがとうな」

ベルモット「フツ」

と不適な笑みを浮かべ一人皆の元から遠ざかる

ベルモット(Cool guy…)

と想うその目には心なしに涙が浮かび上がっていた

シャロン…ありがとう
優作

一方もうじき陸に着こうとしている船の上では

有希子「新ちゃん…優作…」

「…一人女性が海に飛び込みました…」

有希子(シャロン…?)

園子「神様、お願い!!」

「只今、飛び込んだ工藤優作さんと船内に取り残されていて、優作さんと新一君を助けに行った女性関係者が水面から姿を現しました

…」

和葉「やったあ…」

「おっと…? 優作さんが抱き抱えているのは…小学生くらいの男の子でしょうか? 息子の新一君ではないみたいです…どうやらこちらの間違いの様です…」

有希子「新ちゃん…?」

園子「え!? じゃあ工藤君は?」

和葉「皆を助けに行つてそれっきりなんちゃうん!？」

と何も知らず戸惑う二人に

有希子「あ…！新ちゃんはまだ助かってたみたいよ？」

思わずこう言った

和葉「なんや…よかった」

園子「これでみんな無事ね！」

と喜ぶ三人の尻目のナイトバロン号では緊急事態が起こっていた

守られた真相

ドーンッドーンッズドドドドッ

一気に崩れ落ちたナイトバロン号と未だに意識を戻さないコナンと蘭博士「早くみんな船に乗れい!!」

その掛け声でみなが一斉に船へと乗り込んだ

蘭は小五郎に抱えられコナンは優作に抱えられて

服部（工藤…しつかりせい!!）

と心配ままならない顔をしている服部に優作が安心を促した

優作「新一なら大丈夫だ！必ず助かる！」

と服部に言い聞かせる優作自身も本当は心配で堪らなかつた

ズドドドドバーンッガラガララッ…

ナイトバロン号から用意してもらった船に移った一同はナイト

バロン号が破壊されていく様子を目の当たりにした

歩美「そういえば…コロンって人は？」

ジョディ「彼は…たぶん、残念だけど…」

と悲しそうな顔をする探偵団の三人

光彦「コナン君は大丈夫でしょうか…？」

先程からコナンの安否が気になって仕方がない

優作「コナン君は大丈夫だ、気を失っているだけだ…だから安心していいぞ？」

今日ここへ来る前から江戸川コナンが工藤新一だと知っている人物は工藤優作、有希子、阿笠博士に灰原、服部に怪盗キッドそれにジーンにベルモットである

そして今回の事件で工藤優作が明かした真相により新たに江戸川コ

ナンが工藤新一だと知った人物は…今のところいない

工藤優作が皆の前で明かした事実には江戸川コナンの名前は出てこなかったのだ

新一は幼児化していたのかと思わせる発言はしたが到底、人間が幼児化することなど考えられない。同はこの大惨事によりそのモヤモヤはなくなり、それどころかいきなりコナンが消えて新一が登場したり、いつの間にかコナンが再び現れているのにも気付いていなかった

ただ新一は別だが…

貫く偽装

高木「そういえば、工藤君は!？」

佐藤「まさかまだ中に!？」

優作「あつー! 新一は先に船で陸に戻って待機しているようです」

ジヨデイ「なんだ、よかつたわ」

キヤメル「ええ…」

優作を横目でみながらベルモットとジンが不思議そうに小声で問いかけた

ベルモット「まだ隠さないといけないの？」

ジン「今回の事件でバレたと思うけど？」

優作「ああ、人間が幼児化するというのは到底考えにくいことで人をパニック状態にしてしまう恐れがあるために組織との関係がなくなったとしてもむやみに人に言えることではないから…」

「今回の事件では私は工藤新一と江戸川コナンの名前を同時に出したりはしていない…だからこの大惨事で皆の頭からこの件は消滅するだろう…」

ベルモット「そうゆうことねー」

ジン「早く元に戻れるといいけどな？」

優作「ああ、そうだな？」

と言つ優作の顔は多少曇っている様子が伺えた
ベルモット(…………)

陸では既に到着した有希子と園子と和葉が皆の帰りを待っていた

園子「あつー! 来た来た! あれじゃない?」

和葉「ほんまや! 平次?」

有希子「新ちゃん? 優作?」

と呼び掛ける有希子の前に優作が降り立った

優作「ただいま」

有希子「おかえり！新ちゃん大丈夫？」

優作「有希子、新一がコナンということはまだ皆にはバレてない」

「だからこのまま別々の人間として通すぞ？」

有希子「う、うん」

よく訳の分からない有希子だったが納得した様子だった

園子「蘭〜!？」

蘭に駆け寄る園子は意識の戻らない蘭を見て泣き叫び始めた

小五郎「蘭を早く病院へ！」

蘭とコナンは待機していた救急車で既に灰原のいる杯戸中央総合病

院へと運ばれていった

個々でのやるべき事

杯戸中央総合病院

手術中のランプがついた扉の前には赤井秀一が立っていた
本堂英海はC A I 諜報員としてやるべき事があるために先に病院を
出た

すると外から二台の救急車が来るのが見えた

その様子を伺っている赤井は担架で運ばれて降りてきた人物に驚く

赤井（あれは…！？）

そこにはコナンと蘭の姿があった

その事態に思わず飛び出して行く赤井

小五郎「しっかりしろよ！蘭！？」

園子「らーんー！？」

優作「今着いたからな！もう少しの辛抱だ！」

有希子（新ちゃん…しっかりして！？）

その後ろから用意された車で救急車のあとをついてきたジヨディと
カメラ、博士と探偵団の三人と服部と和葉も病院内へと入って行く
服部平蔵と遠山銀司郎と大滝吾朗、それに黒羽盗一と快斗と中森銀
蔵は杯戸港に残り事情聴取等を受けていた
ジンとベルモットは組織のアジトだった場所へ行き全てに終わりを
告げようとしていた

光彦「コナン君しっかりしてください！」

元太「おい！コナン！目え覚ませよ！？」

歩美「コナン君…」

泣いている歩美の肩に博士が手を添えた

博士（新一… 哀君…）

と、そこに出入口から赤井秀一が出てきた

ジョディ「シュウ!？」

赤井「一体どうしたんだ？」

キヤメル「赤井さん…」

久しぶりの赤井の再開に嬉しく思う二人はこの最悪な事態を赤井に明かした

赤井「……」

赤井も流石に同様を隠せなかった

免れた小さな弾

手術室から手術を終えた執刀医達が出てきた

丁度手術室の前まで戻ってきていた赤井と灰原の安否を心配した博士と光彦と申し訳ない気持ちでいっぱい元太と歩美も来ていた

博士「先生？容体は…？」

歩美「哀ちゃんは無事ですか!？」

先生「ええ、心配は要りませんよ」

「元々、腕と脇腹に銃弾が当たってしまったていましたが急所は逸れていましたし、正確な応急措置のおかげで出血も最小限で抑えられましたので二、三日安静にしていれば多少傷口が痛みますが、元の生活に戻れますよ」

赤井「そうですか…ありがとうございます」

光彦「よかった…」

皆安心して胸を撫で下ろした

今度は嬉し涙を流していた歩美

博士「残るはコナン君と蘭君だが…」

探偵団の三人と共に暗い顔をしている博士を横から不安そうに見て

博士に話しかけた

赤井「…阿笠さん、ちよっといいですか？」

と博士を呼び出した赤井

博士は赤井に呼ばれ不思議そうな顔をする

博士「ああ…みんなは先にコナン君達の元へいつとれ？」

元太「おう…」

赤井と博士は手術室から少し離れた長椅子に腰掛けた

博士「どうしたんじゃ？」

赤井「ええ、灰原哀の事なんです…」

「宮野志保が幼児化して灰原哀の姿になり、いくら組織が開発した薬でも今回の事故での検査結果に何か問題があった場合、どう対処していいものかと……」

博士「確かにそうじゃな？と言われてもワシには……」

赤井「灰原哀が宮野志保ということはこれからの将来のためにも絶対に阻止しなければならぬ……」

「そこで阿笠さんにお願ひがあるのですが……」
不思議そうな不安そうな顔をする博士

降り掛かった失意

コナンと蘭を心配する一同は無言と手術中のランプが消えるのを待っていた

園子（蘭…）

服部（工藤…）

それから一時間後手術室から担架に乗せられた蘭が出てきた

和葉「蘭ちゃん!？」

小五郎「先生、娘の容体は…?」

先生「今は眠っている状態です」

ジョディ「じゃあ意識は…」

先生「ええ、先程意識を戻し回復に向かっています」

「今日一日安静にしていれば何も問題ないです」

小五郎「そうですか、ありがとうございます」

園子「蘭、よかったあ…うっうえーん!」

光彦「蘭さん、よかったです!」

皆が喜んだ

元太「あとは…」

とコナンの入っている手術室を見る一同

といきなり手術室の中から慌てる様子で一人の女性看護師がでてきた

看護師「江戸川コナン君の保護者の方はどなたですか!？」

優作「私ですが…」

有希子「何かあったんですか!？」

看護師「現在輸血しているのですがどうにもこのままでは血量が足りません」

「家族か親戚の方の血液を分けていただくことは可能でしょうか!

？」

一同は驚きと不安の色を隠せなかった

あの時、あの五階が崩れ落ちた時に幼児化する苦しみで気付いては
いなかったが壁や天井が崩れ落ち数あるものがコナンを襲い腰辺り
を強打し机が足に落ちその机の角がコナンの太ももに刺さり長スボ
ンを履いていて気付かなかったが出血多量の状態だったのだ

有希子「私が…」

優作「だめだ、有希子は先日ウイルス性の感染症を患っただろ？」

「最低でも1ヶ月経たないと輸血はできない…」

看護師「そうですね…」

有希子「じゃあどうすればいいのよ!？」

優作「ああ、私とコナンでは血液型が違うし… 親戚…」

看護師「他に可能な方はいらっしゃいますか？」

優作は考え込んでいると後ろからある人物が現れた

絆で繋がる決意

「僕の血を使ってください！」

その言葉を聞いた一同が振り向くと

服部「おまえは…!?!」

博士「まさか…!?!」

優作「快斗…」

そこには怪盗キッドこと黒羽快斗がいた

園子「あなた誰? ちょっと格好いいけど… 血縁関係のある人じゃないや無理なのよ?」

快斗「僕は江古田高校に通う二年生、黒羽快斗です」

「父親失踪の真相を明かすために二代目怪盗キッドをやっています」

「そして江戸川コナン君とは親戚です」

一同は啞然とする

それは当然だ、世間を賑わせてきた怪盗キッドが突然私服で現れその正体を自ら明かし、更にはコナンと親戚だと言い張るのだから

有希子（快斗君…）

優作「快斗、ありがとう」

「でも君にこれ以上迷惑をかける訳にはいか…」

快斗「いや、僕にやらせてください」

言い出したら聞かない快斗は自ずと話を進める

快斗「看護師さん、僕でお願いします」

看護師「保護者の方は…?」

快斗「父は今取り込み中なので工藤優作さんが保護者でお願いします」

「ちなみに三ヶ月以内の病気はありません」

迫力のある言い分に最早だれも反対することはできなかった

看護師「では…こちらに」

優作（快斗…）

有希子「快斗君、ありがとう」

快斗は有希子と優作を見て微笑む

小五郎「キッドがコナンと親戚なあ？」

園子「キッド様は…同い年だったのね…？」

そう工藤優作と黒羽盗一は従兄弟でその息子の工藤新一と黒羽快斗は再従兄弟なのだ

新一と快斗の顔も容姿も声も性格もよく似ていた訳だ

揺るがぬ愛

灰原は呼吸器をつけたまま病室へと運ばれた

二日もあれば回復するということから赤井は杯戸中央総合病院を後にした

灰原が眠る横では博士が座っていた

博士（哀君…）

蘭も一般の病室へと移され未だに眠っていた

園子「蘭？早く元気になりなさいよ？」

和葉「そやで？またお好み焼きいや言うほど食べさせてやるさかい」

小五郎「園子ちゃんも和葉ちゃんもありがとう…」

「しかし今日はもう遅い、疲れていることだろうし今日のところは帰りなさい」

現在時刻は夜の9時20分…

人生で一番長い一日に感じる一回だった

和葉「そやね？ここにいっても迷惑やし、平次かえろ？」

服部「俺は帰らへんで？」

親友の命と快斗を心配する服部は動こうとしなかった

服部「今から空港いっても大阪行きの便に間に合いへんし、おっちゃん、いてもかまわへんよな？」

力強く鋭い眼差しを見せる服部に

小五郎「仕方ない…大阪の探偵坊主は残ってもいいが後の者は一旦帰りなさい、親御さんが心配しているだろう」

園子「…わかった、蘭が心配だけど」

「また明日も必ず来るから蘭、待っててね？」

そういうと園子は灰原の部屋にいる博士と元太と光彦と歩美のどこ

るに行き帰宅を促した

親が心配しているため博士は探偵団の三人と園子を家に送り届けた
その間灰原の部屋にはジヨディとキャメルがいた

そしてコナンが手術を受けている部屋の前には優作と有希子と服部
蘭の元には小五郎と和葉に連絡を受け飛んできた母、妃英理がつい
ていた

闇を照らし輝く光

杯戸港付近・組織アジト内

今までの資料や暗殺計画の書類等を燃やすジンの姿があった

その中に昔の彼女の写真もあった

ジン（わるいな… でも、ありがとう）

そんな姿を後ろから見たベルモットがさりげなくジンに話しかける

ベルモット「柄に合わないわね…」

「そんな顔をするなんて？」

ベルモットの存在に気付いたジンはベルモットが歩み寄った方向とは反対の方へ歩き去ろうとする

ベルモット「待って！」

ジン（……………）

ベルモット「あなたこれからどうするの？」

ジン「フツ… さあな？」

不適な笑みを浮かべ不安そうな顔で言い放つジンにベルモットはかける言葉が見つからなかった

ベルモット「……………」

ジン「田舎にでも帰るかな…？」

と寂しそうな、でもどこか懐かしく安心そうな顔をし笑いながらそう言うジンを見てベルモットも自然と笑みが溢れた

ベルモット「私はアメリカ女優としてシャロンを貫くわ」

ジン（…）

ベルモットを見て微笑むジン

ベルモット（…）

ジン「元気でな？」

と後ろを向き手を振り別れを告げながら歩くジンを
ベルモット「ジン！」

思わず呼び止める

ジン「まだ何か用か？」

ベルモット「私…」

「ジンのこと好きよ？」

真っ直ぐにジンを見て言うベルモットに対し

ジン「ばあに言われてもな？」

と苦笑いで真剣な想いを嘲笑う

ベルモット「本気…」

ジン「俺も、嫌いじゃねえ」

と少し照れるベルモットにジンならではの言葉をかける

ベルモットは疑問に思ったがジンの心を理解し微笑む

ジンも笑いながら深い闇の中へと消えていった

闇を照らし輝く光（後書き）

ベルモットことシャロン・ビンヤード…

ジンこと黒澤陣…

この二人がもう少し早く出会い
そして、一秒でも早く互いの心を
見通していたのなら

神様は二人に最高の笑みを
与えることができただろう…。

真実の扉（前書き）

翌日・杯戸中央総合病院

無事にコナンの手術が成功し快斗も何事もなく戻ることができた
早朝の病室ではそれぞれがそれぞれの部屋でうたた寝をしていた

真実の扉

蘭の病室では蘭の足元で英理と和葉が座りながら寝ており蘭の手のすぐそばでは小五郎が寝ていた

蘭「…ん…？」

ようやく目を覚ました蘭は自分が何故ここでこうしているのか不思議で堪らなかつた

小五郎「ん？蘭、起きたか！？」

蘭「お父さん…お母さん…和葉ちゃん」

小五郎「財閥のお嬢様はまた今日来るってよ？」

その一言で意識を失う前の事を思い出した

蘭（！！）

「元太君や光彦君や歩美ちゃんは！？」

「それに…新一は？コナン君…は？」

英理「蘭、落ち着きなさい？」

「元太君達三人は博士と家へ帰ったわ」

小五郎「探偵坊主は…わからねえが無事な事は確かだ」

「コナンは今病室にいる」

蘭「コナン君…どうかしたの！？」

和葉「みんなを助けようとまた無茶して海に落ちてもうたんよ…」

「足も怪我しておつて…手術成功しはったからもう大丈夫やけどな

？」

蘭（新一…！？）

江戸川コナンが工藤新一だという事実に皆は気付いてはいなかったが今まで何度も疑ってきて優作にあの日のトロピカルランドでの話を聞いた蘭はコナンが新一だと思つざる得なかつた

今回の事件は疑いが確信に変わった時間だった

蘭はコナンが眠る部屋へと駆け出して行った

コナンの二人部屋にはコナンの足元で服部が眠り部屋の椅子に優作と有希子が腰かけて眠っていた

コナンの眠るすぐ横では快斗が眠っていた

タツタツタツタツ ガラッ

勢い良く部屋のドアが開きドアの近くで眠っていた優作と有希子が目を覚ました

彩色の想いから

有希子「蘭ちゃん！？大丈夫なの？」

蘭「はい…心配おかけしてすみませんでした」

とコナンが眠っているカーテンを開ける

優作

優作は蘭を見て愛しい笑みを見せ有希子と共に部屋を出た

服部「お？もう、大丈夫なんか？」

服部も目を覚ました

蘭「うん…ありがとう」

「コナン君は…？大丈夫？」

服部「ああ、さっき先生がきてもうじき目覚ますやろって」

蘭「そう…」

蘭はコナンに歩み寄りコナンの手を握る

それを不思議な顔で見る服部はどう話しかけていいものか分からず
にいた

蘭「ねえ、服部くん…」

服部「な…なんや？」

蘭「…誰が私を助けてくれたの？」

服部「ああ、それが…！」

「それやったら…」

とありのままの真実を言おうとする服部の横から何故か服部の声で

「工藤に決まってるやろ？」

服部「えっ…？」

蘭「新一が？新一が助けてくれたの？」

その声の主が分かった服部はその言葉に続くように話を続けた

服部「あ…ああ、そやで？もちろん工藤が…」

蘭「そうなんだあ…ありがとう」

とコナンの手を強く握る蘭

服部が隣のカーテンをさりげなく覗くと寝っ転がりながらピースをしている快斗がいた

服部（またこいつ格好つけよって…）

不満そうな顔をする服部に蘭の容赦ない言葉が飛んだ

蘭「ねえ、コナン君って…」

服部「あん？なんや？」

蘭「コナン君って…新一なの！？」

服部（ギクツ！??）

完璧に油断していた服部は言葉を失う

蘭「コナン君って、新一なんでしょ！？」

開いた扉の奥には

助け船をと再度快斗の部屋のカーテンから快斗を覗くと寝たふりを
する快斗がいた

服部（くそっ！）

「あ、ああ…コナン君？コナン君が工藤かやって…？それは…それ
はなあ…」

と正直者で嘘がつけなく困り果てる服部に

「もういいぜ、服部？」

起きていたコナン、いや新一が口を開いた

蘭「コナン…新一？」

コナンは体を起こして蘭の方をみる

コナン「蘭、今まで黙っててわりいな…？」

「言い訳するつもりはないけどこれには深い事情があったんだ」

今までの蘭とは違い何もかも受け入れ優しく受け止めようとした

蘭「やつぱり…」

「ううん、いいの…」

「コナン君はコナン君で可愛いし、新一が無事で傍にいてくれるな
らそれでいいよ？」

コナン「蘭…」

この雰囲気を読み部屋を出た服部の目の前には優作と有希子がいた
三人は室内にいる新一と蘭を見守った

そして隣にいる快斗も

コナン「蘭、必ず元の姿に戻ったらまた蘭の元に帰ってくるからそ
れまで待っててくれるか？」

蘭「うん……」

「コナン君のままずっと家に居てくれてもいいよ？それなら一日中ずっと一緒にいられるし……」

コナン「バローツ、それじゃあ俺が困るんだよ」

といつになく嬉しそうなコナンと蘭の会話を真横で聞かされている

快斗

待ち望んだ時間(とき)

ラブラブじゃねえかよ…
快斗

(俺の血を分けてやったんだから…感謝しろよな?新一…)
と快斗も嬉しそうに微笑む

快斗(?)

といきなり静まるコナンと蘭…

まさかと思いきや興味津々な快斗がカーテンを何気なく覗くと

快斗(おいおいおい!?まぢかよ!?)

(ここは病院だぞー!)

快斗の目には口づけを交わすコナンと蘭がいた

小学生と高校生が口づけを交わすこの異様な光景…

だが今の二人は互いを思い合い愛し合う二人…

この空気に耐えきれなくなった快斗は

快斗「ゴホンッゴホンッ」

わざとらしく咳き込む

それに反応し隣に人がいた事を知った蘭はコナンから唇を離そうとするが

強引にもコナンは蘭の唇を離そうとはせずより深く口づけを交わす

快斗(あんにゃろ…誰のおかげで生きてると思ってるんだ!?)

(あいつ、俺が隣にいる事知ってたな?)(くーっ!なんて挑戦的なやつなんだ…)

悔しいのかイライラとする快斗だがこの部屋に流れる空気は誰もが待ち望んだ瞬間だろう…

一方灰原はまだ眠りから覚める事はなかった

ジョディとキャメルは仕事があるために早朝に来た博士と探偵団の三人と入れ違いに病院をあとにした

元太「灰原のやついつになつたら元気になるんだ…？」

光彦「先生はもう目覚めてもおかしくはないと言つてましたが…」
歩美「どこが悪いのかな…？」

不安な三人は昨日の夜は家に帰つても一睡もできなかった

博士「哀君も疲れているだろうから…」

「そのうち目覚めるだろう…」

そうフォローする博士自身も心配すぎて三人を送り届けた後にまた病院に戻り邪魔にならないようロビーで夜を過ごし先程昨日の帰りに約束をした三人を迎えに行き病院に来たのだった

歡喜と安心

灰原の部屋に訪れた後にコナンの部屋へ行くと蘭がいた
博士「調子はどうじゃ？」

コナン「ああ、多少傷口が痛むけど他は大丈夫」

光彦「よかったです」

歩美「早く元気になってね？」

元太「コナン…ごめんよ」

となんとなく元気のない三人

コナン「ありがとう」

「おめーらは大丈夫か？」

そのやり取りを見ている蘭は不思議そうになっている

その様子を見たコナンは蘭に意味深な合図を送り蘭はその合図の意味を理解し三人の前ではコナンはコナンでいることを蘭も願った

それから三日後：

なかなか目を覚まさない灰原は心配されていたがその日の昼にようやく目を覚ました

灰原「…んっ 痛っ！」

目を覚ます灰原の目の前には心配そうに顔を覗き込む優作と有希子に博士、事情聴取を終え直ぐに病院へと駆けつけ丸三日間娘の傍にいた宮野厚司、既に退院した蘭と小五郎に退院の目処がついたコナンがいた

灰原「どうしたの…みんな？」

コナン「どうしたのじゃねえよ、おめーが目を覚まさねえからみんな心配してたんだよ」

蘭「哀ちゃんもう大丈夫なの？」

宮野「まだ傷口痛むか？」

灰原は傷口がまだ痛むが丸三日間寝たお陰ですっきりしたせいかく

すくすと笑い出す

コナン「なんで笑ってんだよ？」

心配していたコナンは少しイラッとした

灰原「ごめん…なんだかおかしくなっちゃって」

宮野「志保、良かった…」

この時点で今回の事件で関わった者が灰原哀を宮野志保だと知っている人物は探偵団の三人を除くとほぼ全員だ

ただ今回の事件に関わった者達には優作と赤井の希望で本人のためにも世間に漏らさぬようにと優作から念が押された

一変する室内

先生「この調子なら通院は続けてもらいますが明日には退院できるでしょう」

有希子「よかったあ」

優作「ああ、これで一安心だな」

灰原は食欲もあり大分回復していた

まだ疲れている灰原に悪いからと皆は帰宅することとなった

部屋から出ていく人達を見送った灰原は本題へと入った

灰原の部屋に残ったのは博士とコナンだ

灰原「それで？あなたその格好だと入院している様だけど何があったの？それと今回の事件にどう関心を持っているのか答えてちょうだい」

怒っている様子の灰原を見ていつもの灰原に戻ったと嬉しく思わず笑ってしまうコナンと博士

灰原「なに笑っているの？」

「一歩間違えればあの三人が命を落としていたのよ？だいたいなぜ拳銃を所持していたの？」

コナン「おめーに弾が当たっちゃったのは悪いと思ってるよ」

「けどあそこで撃たなかったらジンが射殺されていたんだ…それに関しては悪いとは思わねえ」

「キャンティが撃たれちゃったのは悔しいがあの人三人じゃなかっただけ良かったと思う…」

灰原「あなたまさか三人が拳銃を所持しているのを知っていたの！？」

コナン「ああ…上で会ったときに」

灰原「なんでそんなことさせたのよ！？」コナン「バー口！俺が持たせた訳じゃねえよ、あいつらが見つけて来たんだ」

「それであいつらの強い意思と持たねえよりは持った方がいいと思
ったから俺が許可したんだ」

灰原「あなたね…!？」

コナン「それに、あいつらを連れて行く時点である程度覚悟はして
いた…それはあいつらも同じだと思っぜ？」

灰原「……………」

何も言えなくなる灰原はコナンの言い分も納得できないことはなか
った

灰原「で？あなたは？いつの間に小さくなったの？」

と先日の事件の灰原が病院に運ばれた後に起こった出来事を話した

強い意思と高い希望

灰原「なるほどね…」

「まあ、生きててよかったわ」

素直に言えない灰原はコナンから目を反らし冷たい眼差しで言い放つ

コナン「まあな…でもまた元にもどっちまうなんてな」

灰原は再びコナンの方を向き

灰原「今度は私があるあなたに解毒剤を飲ましてあげるから安心しなさい？」

「お父さんから“APT-X4869”の成分表とそれに関する資料、解毒剤に必要な薬の調合法まで完璧に記されている書籍をもらったから」

博士「それは本当かね!？」

コナン「本当か？灰原!？」

灰原「ええ」

病院に見舞いに来た宮野厚司が娘へ解毒剤ではなくあえて書籍を渡していたのだ

博士「よかった…これで…」

妙に安心する博士をみて疑問に思う二人

コナン「あん？どうしたんだ博士？」

灰原「何を言いかけたの？」

博士「あついやー…」

実は先日赤井に呼び出されたのは解毒剤を作って欲しいとのことだった

組織が破滅した今となっては一刻も早く灰原哀を宮野志保にしなくてはならなかった

世間と本人のためにはもちろんだが、聞く人が聞けば幼児化へと導く薬を飲みたいと思う人もいるだろうが一歩間違えれば死者を出す

薬で正真正銘の毒薬だ

そんな薬を体内に取り入れてこのまま何ともない訳がないのだ
灰原哀が知っているかどうかは分からないしその効果は人それぞれ
だが最高でも二年以内に解毒剤を活用し元の体に戻さなくては死人
となってしまうのであった

それは博士も赤井から聞き初めて知った事だった…

赤井は洞察力も推理力も完璧だが科学者ではないために作るうにも
作れなく体調不良な灰原にこの事実を話し更に自分を追い詰めてし
まうという事は避けたく博士に頼んだのであった

せめてもの償いと情

そのことをコナンと灰原に話す博士

灰原「だめよ博士」

「私は今まで解毒剤を色々と研究してきたけど1から始めるのはとてもじゃないけど時間がかかりすぎるし、ましてや毒薬の成分を分析し解毒剤の調合をするのはいくら博士でも難しすぎるわ」

博士「そ… そうなんじゃが…」

灰原「私なら大丈夫、体はもう傷口が痛むだけで何ともないし」

「工藤君には色々と助けられた恩返しをしなくてはならないから、意地でも私が作るわ」

コナン「大丈夫か？」

灰原「あら、私が作る解毒剤、そんなに心配かしら？」

「まあ退院したらすぐに始めるから安心して？」

そうゆう灰原の目は強い光を帯びていた

自分が作ってしまった毒薬“APT-X4869”

それを投与されてしまった工藤新一

自身でもそれを飲み助けを求め江戸川コナンの元に現れた灰原は一番恨みたい人物を許すどころか受け入れ、そして優しく守り続けてくれたコナンになんとしても自分で作った解毒剤を投与し元の姿に戻させ恩返しをしたかったのだ

ただその他にも一つ、理由があつたが

それから更に三日後

事件から丁度一週間が経つた土曜日

灰原は無事に退院ができ二日早く退院したコナンと博士と学校が休みな探偵団の三人と蘭と園子と服部と和葉、それにコナンが優作を

通して呼んだ黒羽快斗、そこについてきた中森青子で退院の祝福パーティーを開いていた

幸せな瓜二つ

中森青子は刑事、中森銀三の娘で黒羽快斗の幼なじみ
これもまた蘭に容姿がそっくりなのである

蘭「はい、ケーキできたよ」

歩美「わあ、かわいい」

そのケーキには皆の顔型のチョコレートが添えてあった

青子「わあ？私まで？かわいい」

快斗「実物よりかわいいな？」

青子「ちよつと！なによ快斗!？」

快斗「あんだよ？だいたいなんでお前がここにいるんだよ？」

青子「えっ…？それは…」

園子「いいじゃない別に、私達同じ十七歳ってことでみんな仲良く
しましうよ？」

蘭「そうそう」

青子「そうだよね…？ほら、園子ちゃんと蘭ちゃんがそう言っ
てるじゃない!？」

快斗は青子を無言で横目で見下ろす

青子「なによ!？怪盗キッドやってたくせに泥棒が偉そうにしない
でよ!！」

快斗「あんだてめー…」

青子「なによ…」

とここでも喧嘩を勃発する二人は病んでいた皆の心を和ませていた
服部「快斗、怪盗キッドやってたこと彼女に言ったんやな？」

コナン「ああ、事情を説明したら許してくれたみてーだぜ？」

和葉「よかつたな〜でも意外やね？あんな若い子が世間を賑わす怪
盗キッドだったなんてな？」

と服部に話しかける和葉の横で服部は不満そうな悔しそうな顔で和
葉を睨み付ける

光彦「あつ、服部さんもしかして妬いてます？」

歩美「本当だ、アハハハ」

服部「妬いとらんわ!!!」

頬を真っ赤に染めてむきになって怒鳴る

灰原「よかつたわね？」

コナン「ああ」

その様子を見た二人も喜んでいた

しかしある人物の一言で一気に空気が沈んだのだ

快斗「そういえばこの坊主、キャンティってスナイパー撃っちまっ

たけどその後どうなったんだ？」

賑やかだった室内が一瞬で沈黙の渦に巻き込まれた

危険な三角関係

服部「…か、快斗、それはあかんやろ？」

光彦「いや、大丈夫です」

「射殺してしまったことは事実ですし…刑事さん達からまだ連絡が来なくどうすることもできませんが…」

ここでコナンと灰原が口を開けた

コナン「それなら大丈夫だぜ光彦？」

光彦「えっ？」

灰原「ナイトバロン号に取り残されていた老人を助けたそうね？」

元太「それがどうかしたのか？」

コナン「あのお婆さんはお偉いさんで教育委員会はもちろん警察にも顔が通る方でお前らが助けてくれた事に感謝して今回の事件はお前らも反省しているようだし射殺したのは凶悪犯罪グループのスナイパーだったこともあって正当防衛と見なされたってよ」

歩美「本当に!？」

灰原「ええ、さつき目暮警部から連絡があつたわ」

服部「そうか、よかつたな？」

光彦「ええ、よかつたです…」

博士「じゃあそろそろほれ、みんなで食べよう？」

蘭「そうね、せっかくのお料理が冷めちゃう」

皆の前に置かれた料理はご馳走で楽しくおいしく食べていた

灰原「そういえば、彼女どうなったの？」

コナン「あん？」

灰原「彼女、あなたが工藤新一だということに気付いているんじゃない？」

コナン「ああ、蘭には全部話した」

灰原「そう」

どこか寂しそうな表情を見せる灰原

コナン「なんだ？」

灰原「別に……」

と機嫌の悪くなる灰原にコナンは疑問に思いながらも博士と蘭と灰原が作った料理を堪能していた

その様子を当然の如く見ていた蘭も少し不安に感じていた

蘭（新一……？）

それに気付いた灰原は

灰原「私、なんだか眠くなっちゃったから少し寝るわ」

歩美「哀ちゃんまだ体調悪いの？」

灰原「いえ、体調はともいいわ」

（心の調子は不調だけど）

そういうと灰原は地下室へと消えていった

鈍感な乙女心

博士「哀くんどうしたんじやる？」

コナン「ほつとけよ？またそのうち《お腹が減ったわ、博士なにかあるかしら？》とか言っただけ戻って来るんだから」

博士「まあ、それならいいが…」

灰原は地下室に入り込むと何かを決めたように解毒剤の完成へと事を進めた

リビングでのパーティーが賑わう中で蘭がコナンを呼び出した

蘭「コナン君、ちょっと…」

小声でそうゆう蘭にコナンは不思議に感じながら外に出た蘭についていく

コナン「蘭、どうしたんだ？」

蘭「あつごめんね…せつかく楽しんでる途中に…」

コナン「いや？」

蘭の心の中では半年程も前から幼児化している新一の元に共に幼児化している宮野志保が現れ博士の家に居候していて小さい頃から新一が慕う博士の家によく遊びに行くコナンこと新一としょっちゅう顔を合わせて会話もしている…それに組織に関して協力もしてきていたし何かしら共に行動していたコナンと灰原の姿を見せられ、いくら信頼している新一だとしても、女ならではの…女だからこそとてつもない不安と恐怖に刈られていたのだった

蘭「哀ちゃんも仲良いね？」

恥ずかしがりながら引き気味で質問する

コナン「灰原か？そうか？仲が良いってゆうかしょっちゅう言い合ってるけどな？」

そう笑って言うコナンの姿に少し苦しむ蘭

蘭「いつも…みんなで何して遊んでるの？」

コナン「みんなって元太達とか？」

「なにしてゲームとかトランプとか…まあだいたい探偵ごっこだけだな」

蘭「そうなんだ、哀ちゃんも？」

コナン「ああ、まああいつも元太や光彦や歩美に付き合ってるって感じだけど…」

蘭「そう…」

コナン「どうしたんだ？蘭」

「そんなことより早く食おうぜ？せつかくのご馳走が冷めちゃうぜ？」

そう言いながら中へ戻ろうとするコナンを蘭が呼び止めた

繋がっている幼なじみの想い

蘭「ねえ！新一！」

コナン「あん？何だ？」

足を止め振り向き蘭に問い掛ける

蘭「……………」

そうしていると中から快斗の呼ぶ声がした

快斗「おーい？コナンくん？」

コナン「ああ！今行く！」

再び蘭の後ろを向き中に入ろうとする

蘭「哀ちゃん！」

と一言叫ぶ蘭

それに反応しコナンがまた振り向く

蘭「哀ちゃん……」

「宮野志保さんのことどう思っているの！？」

遂に言った蘭は強い眼差しでコナンを見ていた

当然いきなりの質問にビツクリするコナン

コナン「宮野志保って…灰原か？」

蘭「うん…哀ちゃんは哀ちゃんだけど一応、女性でしょ？本当の年

齢は知らないけど哀ちゃんを見てると少なくとも私達と同じくらい

に思えるし、それなりに……」

やっと蘭の言っている事を理解したコナンは蘭のほうに歩み寄り優

しく微笑みかけながら

コナン「灰原は俺を小さくした毒薬を作った張本人でそれを今でも

悔やんでどうにかして俺を元の姿に戻そうと必死で解毒剤の開発に

専念してる」

「灰原の事情を知っている俺は組織から灰原を守るために共に行動

したり博士の家に住ませたりしていたけど、別にこれといった関

係はねえぜ？」

コナンのあまりの真剣で優しい眼差しに正直戸惑う蘭は照れくさそうに応えた

蘭「そ、そうなんだ？」

コナン「だから心配すんなよ？必ず元の姿に戻ったらまた構ってやつからよ？」

コナンも照れくさそうにそう言つと蘭は安心した様子で微笑み皆の所に戻るうとコナンを促した

それぞれの道 … 闇からの卒業

灰原（工藤君…）

（正直、ちよっと辛いわ…）

（お姉ちゃん、なんでだろう？）

（こんなの私らしくないよね？）

その頃地下室で解毒剤の研究を進める灰原はリビングでパーティーを楽しむ者とは裏腹に目に少しばかり涙を浮かべて不快な笑みを浮かべそう思っていた

そして今回事件に関わった目暮警部を始め捜査一課の面々はまた今日も凶悪な犯罪を目の前に戦っていた

大阪府警では優作の協力で組織に関わる前の服部平蔵が仕事に専念している、もちろん遠山銀司郎と大滝吾朗と共に…

初代怪盗キッドの黒羽盗一は記者会見を開き今までは難病と戦っており所在不明にしている、現在は回復し、マジシャンとしてまた一から始めるとそう世間に言い渡した
妻の黒羽千影と寺井はさぞかし喜んでいた

一方で怪盗キッドが世の中から姿を消し予告状が届かなく退屈している中森銀三

宮野厚司は博士の家の近くのアパートを借りそこで宮野志保が戻ってくるまで灰原哀を見守ろうと嬉しそうな顔で日々を過ごす

FBI捜査官のジョーディとキャメルは組織壊滅で今までにないくらい多忙の仕事に追われていた

そんな矢先にジョーディ達の元に赤井秀一が捜査官として戻ってきた
その横には弟の赤井響一もいた

赤井「今日から兄弟でFBIに加わる」

その一言に捜査官達は大盛況していた

いくら人のためといっても殺人を何度も繰り返したという凶悪な行動からジーンとベルモットは監獄へと入れられた

ベルモット（ありがとう…Angel）

明かされた意外な繋がりと驚愕

優作は殺人に直接手を触れた事はなく、全て息子を守りながら世の人のためにしてきたことだが、さまざまな犯罪計画を組み立てそれを実行し世間に迷惑をかけたとされ懲役二年の実刑をくらってしまった

妻である有希子も共犯とみなされたが犯罪に直接手を染めてはいなくその誰もが涙を流してしまう息子への愛情という演技力でどうにか猶予二年だけで免れた

そして小五郎は今回の事件に関して蘭を危険な目に合わせたとして妻の妃英理にこっぴどく怒られていた

小五郎「す…すみませんでした」

服部「まあ…しかしよかつたな？全員無事で」

博士「そうじゃのう！これで黒の組織とも縁を切れたしのう！」

園子「そうね！組織とかは良く分からないけど…」

「あとは哀ちゃんか解毒剤ってゆうのを作って飲めば元に戻れるわけね？」

と蘭に小声で言う

蘭「そ、そだね！」

コナンを見ながら園子に言う

コナン（ハハハ…俺もだけどな？）

歩美「でもさ…コナン君とキッド様が親戚だなんてビックリだよな」

光彦「ええ！妙に仲が良かった訳ですね！」

それぞれの道… 感じる愛情

服部「な、なんや？」

青子「どうしたのよ快斗？」

快斗「やっべえ… パンドラ…」

「パンドラ探すの忘れてたー！！！」

和葉「なにそれ？」

服部「確か、組織も必要としていた宝石やろ？」

「今頃はふつかーい海の底やろな？」

そう、やらなくてはいけなかった事

それはパンドラを手に入れ二度とこのような事がおきないように破壊へと導く事だった…

奇妙な招待状に不可解な招待客の謎、そこで出会った新一に蘭の九死に一生の危機と快斗に訪れた難題が有りすぎてすっかりパンドラを手に入れることを忘れていたようだ…

快斗「親父、どうしよう…？」

コナン「ハハハ」

しかし父親の黒羽盗一は息子が一生懸命難題に挑戦している間しっかりパンドラを探し当て、手に入れ次の満月の夜に二代目怪盗キッドと共に破滅することを待ち望みパンドラを持ち帰り家へと保管していたのだった

そうとは知らずの快斗はせっかく楽しんでいたパーティーが台無しになるほど落ち込むが皆はそれを見ながらも今日というこの日を幸せに思うのであった

有希子は優作の存在を

英理は蘭と小五郎の存在を

服部平蔵は平次の存在を

高木は警部と佐藤の存在を

ジヨデイは赤井の存在を

平次は和葉の存在を

快斗は黒羽盗一の存在を

青子は快斗の存在を

蘭は新一の存在を

灰原は新一と博士と探偵団の存在を

博士は皆の存在を

コナンは蘭と灰原をはじめ皆の存在を
とてつもなく愛しく感じるのであった

それぞれの道… 感じる愛情（後書き）

そしてそれから早一ヶ月…

寝る間も惜しみ作り続けた

やっと完成した“ APTX4869 ”

灰原はそれを愛しく眺めコナンの元へと持っていくのであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6766w/>

名探偵コナン『闇に放つ銀の弾丸(シルバー・ブレット)』

2011年9月30日18時14分発行